国際理解教育研修会

平成 29 年度 在外教育施設派遣教員帰国報告会
（2017 年度）

主　催　　兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会

共　催　　兵庫ＯＶ教員研究会　青年海外協力隊兵庫県ＯＢ会

後　援　　兵庫県教育委員会　神戸市教育委員会　ＪＩＣＡ関西

期日：　平成 29（2017）年 6 月 24 日（土）

会場：　ＪＩＣＡ関西（神戸市中央区）

はじめに

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会
会　長　足立　浩
（篠山市立古市小学校長）

日頃より兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会（兵海研）の諸活動・事業に対してご理解・ご協力をいただき、心より感謝申し上げます。私たち兵海研は、在外教育施設への派遣経験をもとに、国際理解教育・帰国子女教育・多文化共生教育などの取り組みを推進しています。「兵庫から良い先生を送り出そう！」を合い言葉に、在外教育施設からの帰国教員による帰国報告会や多文化共生・国際教育セミナー（派遣希望者研修会）、派遣教員への支援活動、情報交換会等の諸事業に取り組んでいます。

さて、本日、ここに「国際理解教育研修会～平成２９年度在外教育施設派遣教員帰国報告会～」を開催することができました。ご多用の中、在外教育施設並びに青年海外協力隊での実践を発表いただく先生方、本研修会にご参加いただいた先生方、心よりお礼申しあげます。

帰国教員の皆さん、海外での勤務、大変お疲れ様でした。国際政治や経済が不安定な中での海外勤務は、苦労や困難が多々あったことと思います。学校経営上の課題、教育活動上の課題、児童・生徒の多様化に関わる課題、そして「テロ」や「自然災害」「治安問題」「衛生問題」等安全に関わる課題など、国内では考えられない問題にも対応されたことでしょう。派遣教員の皆さんが責務を全うされ、無事に元気に帰国されましたこと、私たちも心から嬉しく思っています。

また、帰国後約２か月が経過し、今、激流ともいえる日本の教育の流れに日々奮闘されていることでしょう。「海外での勤務は遠い過去のことのよう･･･」と感じておられているかもしれません。「海外での貴重な経験を帰国後どのようにいかしていくか」というのはとても難しい問題です。帰国後すぐに、今の学校やクラス、地域でいかすことができる･･･というほど簡単なものではありません。しかしながら、教育界もまた社会全体も、先生方の経験を求める方向に確実に進んでいます。グローバルな時代と言われる今日、多様な文化・価値観を尊重する態度や外国語・異文化への柔軟な対応力、国際的な人権感覚、自分の考えを持ち積極的に交流を図るコミュニケーション能力など、先生方が海外で身に付けられた資質・能力は、日本人全体、とりわけ未来に生きる子どもたちに求められるようになっています。

すでにご存知のように、文部科学省や県教委、各市教委からは、全海研、兵海研に対して「派遣経験を国際理解教育や帰国子女教育、多文化共生教育の分野でいかしてほしい」という言葉をいただいています。多くの方々の期待に応えるべく、ぜひ日々の教育をはじめ様々な場面で創意工夫しながら、海外での経験をいかしていただきたく思います。

最後になりましたが、本研修会を実施するにあたり、ＪＩＣＡ関西をはじめ、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、兵庫県ＯＶ教員研究会、ＪＯＣＶ兵庫ＯＢ会等、多くの方々のご支援・ご協力をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

今後とも、兵海研の諸事業にご理解とご協力をいただきますよう、よろしくお願いいたします。

国際理解教育研修会

～平成29年度在外教育施設派遣教員　帰国報告会～

１ 日　時　　平成29年6月24日（土）　午前9時50分～午後5時15分
２ 場　所　　JICA関西　（神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2　℡078－261-0341）
３ 日　程

9：30　受付
9：50　開会行事
(1) 開会あいさつ
(2) 来賓あいさつ
(3) 事務局より
10:20　帰国報告（１人３０分）

	時刻/会場	２階　ブリーフィング室	２階　オリエンテーション室1・2
①	10:20	香港日本人学校 小学部 香港校 川西市教育委員会事務局 升村　誠志	香港日本人学校 小学部 香港校 尼崎市立武庫の里小学校 菅沼　翔吾
②	10:50	デュッセルドルフ日本人学校 加東市立鴨川小学校 豊田　悦子	ニューヨーク日本人学校 姫路市立飾磨東中学校 小林　恵子
③	11:20	青年海外協力隊（グアテマラ） 大阪市立四貫島小学校 鈴木　恵	ソウル日本人学校 神戸市立稗田小学校 奥谷　裕子
④	11:50	グアテマラ日本人学校・校長 シニア派遣 照本　忠光	マナウス日本人学校 姫路市立香寺中学校 阪口　要
	12:30	昼食（１時間）	
⑤	13:30	ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ日本人学校 小学部 ｸﾚﾒﾝﾃｨ校 宝塚市立小浜小学校 園田　和弘	ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ日本人学校 小学部 ｸﾚﾒﾝﾃｨ校 明石市立朝霧小学校 野田　星奈
⑥	14:00	杭州日本人学校・校長 シニア派遣 宮田　正彦	香港日本人学校 大埔校 西宮市立高木北小学校 塚本　与久
⑦	14:30	青年海外協力隊（エチオピア） 西宮市立上ケ原小学校 村上　敦子	深圳日本人学校 高砂市立荒井小学校 佐々木　国江
	15:00	休憩（１５分間）	
⑧	15:15	上海日本人学校 浦東校 太子町立太子東中学校 西口　美希	大連日本人学校 芦屋市立打出浜小学校 伏見　聖人
⑨	15:45	イスタンブル日本人学校 高砂市立高砂中学校 横江　和彦	バンコク日本人学校 西宮市立深津中学校 中澤　大樹
⑩	16:15	ブラッセル日本人学校・教頭 三木市立緑が丘中学校 八幡　良一	ブラッセル日本人学校 神戸市立樫野台小学校 長谷川　静佳

※時間はおおよその目安です。また、都合により発表の順序を入れかえることがあります。

17:00 閉会行事
(1) 閉会あいさつ
(2) 事務局より

17:30 懇親会　（会場：３階　セミナー室31・32）

帰 国 報 告 書 目 次

（当日発表）

1	香港日本人学校 小学部 香港校	川西市教育委員会事務局	升村　誠志	・・・・	1
2	香港日本人学校 小学部 香港校	尼崎市立武庫の里小学校	菅沼　翔吾	・・・・	3
3	デュッセルドルフ日本人学校	加東市立鴨川小学校	豊田　悦子	・・・・	5
4	ニューヨーク日本人学校	姫路市立飾磨東中学校	小林　恵子	・・・・	7
5	青年海外協力隊（グアテマラ）	大阪市立四貫島小学校	鈴木　恵	・・・・	9
6	ソウル日本人学校	神戸市立稗田小学校	奥谷　裕子	・・・・	11
7	グアテマラ日本人学校・校長	シニア・姫路市	照本　忠光	・・・・	13
8	マナウス日本人学校	姫路市立香寺中学校	阪口　要	・・・・	15
9	ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ日本人学校 小学部 ｸﾚﾒﾝﾃｨ校	宝塚市立小浜小学校	園田　和弘	・・・・	17
10	ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ日本人学校 小学部 ｸﾚﾒﾝﾃｨ校	明石市立朝霧小学校	野田　星奈	・・・・	19
11	杭州日本人学校・校長	シニア・篠山市	宮田　正彦	・・・・	21
12	香港日本人学校 大埔校	西宮市立高木北小学校	塚本　与久	・・・・	23
13	青年海外協力隊（エチオピア）	西宮市立上ケ原小学校	村上　敦子	・・・・	25
14	深圳日本人学校	高砂市立荒井小学校	佐々木　国江	・・・・	27
15	上海日本人学校 浦東校	太子町立太子東中学校	西口　美希	・・・・	29
16	大連日本人学校	芦屋市立打出浜小学校	伏見　聖人	・・・・	31
17	イスタンブル日本人学校	高砂市立高砂中学校	横江　和彦	・・・・	33
18	バンコク日本人学校	西宮市立深津中学校	中澤　大樹	・・・・	35
19	ブラッセル日本人学校・教頭	三木市立緑が丘中学校	八幡　良一	・・・・	37
20	ブラッセル日本人学校	神戸市立樫野台小学校	長谷川　静佳	・・・・	39

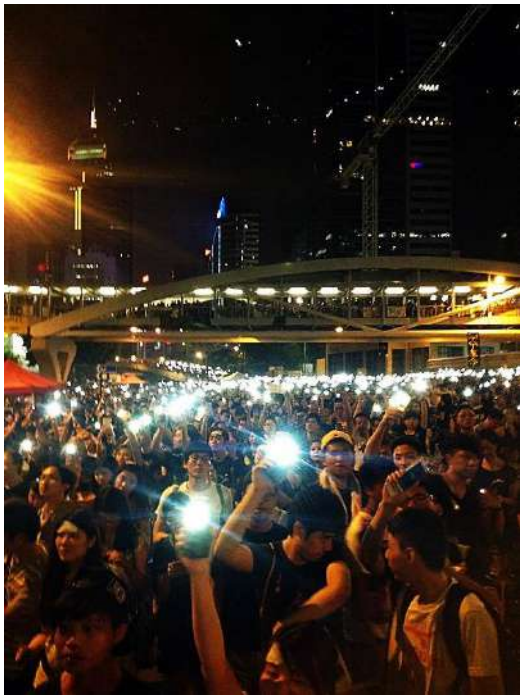
（紙面発表のみ）

21	ジャカルタ日本人学校	神戸市立長峰中学校	葛西　竜一	・・・・	41
22	モスクワ日本人学校	西宮市立真砂中学校	山村　裕二	・・・・	43
23	バルセロナ日本人学校	川西市立明峰小小学校	小西　宏典	・・・・	45
24	ボストン補習校	シニア・宝塚市	横山　勝寿	・・・・	47
25	青年海外協力隊（マレーシア）	阪神昆陽特別支援学校	加藤　佳恵	・・・・	49
26	青年海外協力隊（フィジー）	播磨町立蓮池小学校	丸岡　ひとみ	・・・・	51

香港日本人学校小学部香港校に赴任して

川西市教育委員会事務局　升村　誠志

１　香港の概観



香港の正式名称は「中華人民共和国香港特別行政区」。このような特別な呼び方をされているのは、1842 年から 1997 年までの間、イギリスの植民地とされており、1997 年に中国に返還されたものの、完全に中国として機能できるまでには時間が必要であるとされ、一国二制度という姿勢が執られている。

赴任した 2014 年。世界にも大きく報道された雨傘革命が起こった。

このデモ運動も、香港の一国二制度、中国返還への不安から行われたものである。香港の政治は、中華人民共和国の全国人民代表大会（中国共産党）に権利が集中する政治制度ではなく、イギリス占領下からの政治を引き継ぎ普通選挙によって議員を選んでいる。しかし、純粋な普通選挙ではなく、立候補者は、全国人民代表大会の意向を受け入れることが前提にあるため、中華人民共和国の政治制度に不安をもっていたり、中華人民共和国の生活や文化に不満をもっていたりする人々（特に学生）が「真の普通選挙の実現」を訴えるものであった。

2017 年は、中華人民共和国返還 20 周年の年になるが、香港に住むすべての人々から祝福されるものではなく、また、完全に中華人民共和国に返還となる 2047 年へ向けて、香港に住む人々の不安はより大きくなると考えられている。

日本でも、憲法 9 条の議論で学生等のデモ活動が盛んになったが、香港の若者にとって、中華人民共和国への完全な返還は、香港人としてのあり方を考えさせられるものになっており、今後もその動向からは、目が離せない。

２　赴任校の概要

香港日本人学校は、主に香港島を校区とする小学部香港校と、九龍・新界といった大陸を校区とする大埔校。そして香港全体を校区とする中学部という 3 つの学校で構成されている。その中でも、小学部香港校は、香港島の北側､ハッピーバレイという丘の上にあり、香港らしい大都会の街並みを見下ろすことができる。赴任時は、１～６年生まで２クラスあり、330 人程度の児童数であった。

2016 年は、香港日本人学校 50 周年記念式典が行われた。今までの歴史を振り返るとともに、この 50 周年という節目に、香港日本人学校に在籍していること、そして、未来について考える機会になった。そして、揺れ動く香港の中にあって、日本の教育を推し進めてこられた諸先輩方に敬意を表したい。

式典に来られた先輩教員が「香港小は香港小でした。昔の良さが残っていますよ。」と話された。今も昔も、子どもたちに知識や学力だけでなく、日本人のアイデンティティや誇りも身に付ける教育を行うことができていると実感できた。

３　特色ある教育実践

2016 年 4 月から、グローバルクラスを開設した。

グローバルクラスは､｢日本人としての自覚をもったグローバル人材の育成」を目指して開設された。

育てたい児童像として、

・グローバル社会で通用する英語コミュニケーション能力を身に着ける。
・分析力やプレゼンテーション力、調査力、課題解決力等の２１世紀に必要なグローバルスキルを培う。
・日本人としての意識を持ちながら、グローバル市民としての主体性を育む。

をあげ、今までの香港日本人学校の歴史に新しい側面を付け加えた。

グローバルクラスの特徴としては、

・少人数複数指導や教科担任制をとり、きめ細かい学習スタイルをとっている。
・英語イマージョン教科を設定し、日本語力だけでなく、英語力をつけ、香港の地で様々なコミュニケーションをとれるようにしている。
・今日的課題を扱う教科「グローバルスタディーズ」を設定し、国際的な問題や課題に対する知識や調査･分析力､プレゼンテーション力を高めることを目的とした探究型の学びを実施している。
・自分がこれからの社会に何をすることができるのか、またどのように行動していく責任があるのかを理解したグローバル市民になるためには、普段から自分の学びを他者と共有していくような活動を大切にしている。
・Student Action Project (SAP)という活動をグローバルスタディーズの中に設け、ワークショップや低学年へのストーリーテリング、プレゼンテーションを行うなどして、学び得た知識や調査結果を発信している。学びと実生活との結びつきを実感するとともに、社会への責任感と学び続ける姿勢が養う。
・基本、日本の学習指導要領に従って学習を進めている。また、通常クラスと同様に、クラブ、集会、学校祭、運動会など数々の行事に参加することを通じ、日本文化にも多く触れる機会を設けるとともに、学習規律を大切にし、協力・協働することを重視した授業を展開している。

このように、日本の教育の特性を生かしながら、英語を話すだけでなく、今日的な課題に対して、様々な言語や表現方法をツールとして、他者と積極的に関わりながら解決を探る学習を図ることで、生涯にわたってどのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るかを考えることのできるグローバル人材が育成できると考えている。

４　成果

まずは､香港の｢多文化共生｣｢他者を受け入れる寛容さ｣を学べたことをあげたい。歴史的な背景、地理的な背景からきていると考えられるが、香港人は異文化に対して寛容であった。グローバルな視点を育む際、香港で学んだことを生かしていきたい。

次に、外国に暮らす日本人が日本に帰国した際、困ることのないように日本の教育を実践することを使命としていたが、新学習指導要領のキーワード「主体的、対話的で深い学び」のヒントを「グローバルクラス」の開設、「グローバルスタディーズ」の授業技法や内容から得ることができた。

子どもたちが、すすんで取り組みたい、解決したいと思う課題や課題解決の方法、思考の手立て等を学ぶことができた。

教育委員会の指導主事という立場になったが、これからは先生方に､｢グローバル視点」の大切さを伝えていきたい。

香港日本人学校小学部香港校に赴任して

尼崎市立武庫の里小学校　菅沼　翔吾

１　香港の概要

関西国際空港から南東へ飛行機で４時間。中華人民共和国香港特別行政区は、中華人民共和国の南部にある特別行政区（一国二制度）である。1842 年の南京条約でイギリスの植民地となり、1941 年～45 年には日本が占領したが、第二次世界大戦の敗戦で、再びイギリスの統治が再開されるが、1997 年に中華人民共和国に返還され、特別行政区となった。イギリスの統治下だったため、英語を話せる人が多いが、現状としては香港人の英語レベルは低下している。ある英語教育機関が２００９～１１年に英語を母語としない 54 カ国・地域の１７０万人の英語能力を調査し、順位をつけたもので香港は世界 25 位、アジアの中では７位であった。（１位はシンガポール）

返還後 50 年間は一定の自治権の付与と本土（中国大陸）と異なる行政・法律・経済制度の維持が認められているが、中国本土の行政が介入してきており、中国に取り込められたくないとデモを起こして反対しているため、反日感情は少なく、反中感情が現在は大きい。治安はとてもよく、安全であるが、香港では、12 才以下の子どもをひとりで留守番させたり、外出させたりすると保護者義務違反という罪状で逮捕される。

面積は、1104km^2 人口は約 700 万人。（大阪 1899km^2 に、約 880 万人）香港の開発された地域は陸地総面積の僅か 30％ほどの為、世界有数の人口密集地域である。そのため、土地が狭い。地震がほぼないため、タワーマンションや高層ビルがたくさん建ち並び、住宅（家賃）の物価が世界でもトップクラスである。

在留日本人は約 27000 人（2015 年）。2010 年は約 21000 人。2001 年は約 24000 人。日本人学校の児童・生徒数（2017 年 4 月）は、小学部香港校 327 人、大埔校 620 人、中学部 175 人である。1990 年代は 3 校合わせて約 2100 人を擁していたので、児童・生徒数は減少している。そのため、2018 年 3 月末に中学部を小学部香港校校舎に移設し、2018 年 4 月より小学部香港校と中学部は併設となる予定である。

２　香港日本人学校香港校の概要

現在の香港日本人学校は 1966 年設立だが、これ以前にも香港在住の日本人子女向けの教育施設は存在しており、その歴史は 1907 年（明治 40 年）設立の香港本願寺小学校までさかのぼる。日本人学校としては、1966 年から 2016 年で創立 50 年となり、昨年度、創立 50 周年式典を３校で行い、歴代の卒業生や教員が集まった。

香港校は、2013 年に大規模改修が行われ、新校舎が完成した。各教室にプロジェクターやスピーカーが付いており、とても綺麗な校舎で最新の ICT 活用がされていた。

教育目標に「グローバル社会をたくましく生きぬくための確かな学力と豊かな心をもった児童の育成」を掲げ、文部科学省の派遣による「派遣教員」、学校が募集をかけて採用する「学校採用教員」、現地在住の方の採用の「現地採用教員」、「英語講師」など様々な国や地域の人からなる学校である。

３　特色ある教育実践

（１）　グローバルクラス

グローバルクラスとは、日本の学習指導要領に従いながらも、複数の教科を英語で学ぶことにより、日本の教育課程を達成しながら高度な英語力を身に付けていくクラスである。4 年生から始まり、5，6 年生ともちあがっていく、20 人の少人数クラスである。現在（2017 年度）は開設 2 年目である。グローバルクラスでは、ただ単に英語力を身につけるだけでなく、日本人学校の特色を生かし、日本の学習指導要領に基づく教育や学校生活を行いながら、英語力や新科目グローバルスタディーズに力を入れ、これからの社会に必要な人材を育成している。独自

科目グローバルスタディーズは、国際的な問題や課題に対する知識や調査・分析力、プレゼンテーション力を高めることを目的とした探究型の学びである。まとめると、グローバル社会で通用する英語コミュニケーション能力を身に着けながら、分析力やプレゼンテーション力、調査力、課題解決力等の 21 世紀に必要なグローバルスキルを培い、日本人としての意識を持ちながら、グローバル市民としての主体性を育んでいる。
また、通常クラスと同様に、クラブ、集会、学校祭、運動会など数々の行事に参加することを通じ、日本文化にも多く触れる機会を設けて、通常学級との交流も行っている。

（２） 現地校交流

国際理解教育として、現地校（香港の学校）との交流学習会を毎年定期的に行っている。１年生～４年生は、民生書院小学校、５年生はセントポール校、６年生は特別支援学校との交流会を行っている。１年おきに自分の学校に招待し、香港の文化、日本の文化を味わうような交流会である。会話は、お互い英語で行っているが、香港の学校の英語のレベルの高さを感じた。交流としては、年に一回だけで、単発で終わっていたので、年間を通じて交流できた方が、子ども通しの関わりがもっと増えて有意義なものになるとも感じた。

（３） 英語活動

１年生～６年生まで毎日１時間（週５時間）、ネイティブの英語教師による英語の時間がある。レベルは４つに分けられ、児童のレベルにあった英語の授業が行われている。初めて英語を習う児童から、家庭では英語で話している児童まで、レベルの差はとてもある。授業時間は、１、２年生は生活の時間の一部、３～６年生は総合的な学習の時間を英語の時間に割り当てている。

（４） 学校行事

日本の学校と同じような学校行事を年間を通じて行い、香港ならではの構成を組み込んでいる。

① 運動会

学校の運動場は狭く、団体演技の練習ができないので、近くのグラウンドへバスで行き、練習をしている。本番の会場は陸上競技場で行い、とても広い。しかし、広すぎて演技がこぢんまりしているように見え、構成が難しかった。カンフーや太極拳の動きを取り入れたり、広東語の曲で演技をしたりと香港らしさを取り入れていた。日本同様、組体操の賛否が話題になっていたが、難易度を下げて行っていた。また、普段の体育では、運動場が狭い分、５月から２月まで年間２５時間の水泳学習があったのが特徴的だった。

② ハッピフェスティバル

各学級でお店を出す「チャレンジ祭り」、各学年で合唱や合奏、音楽劇などをする「学習発表会」を１学期と３学期に行っていた。

③ ハロウィーンパーティ

ハロウィーンの日は、英語教師が中心となり、学校全体で仮装をし、盛り上がっていた。児童達も仮装をし、とても楽しんでいた。

４　成果

各都道府県の先生方や国籍の違うイングリッシュスタッフ、現地スタッフと仕事をする中で、大事なことは、それぞれが同じ方を向いて協調性を持って仕事をすることである。そして、それが児童達に向けられていることである。日本全国の各自のやり方やその国の文化を貫こうとしても立ち回らない。協調性を持ちつつ、自分の培ってきたやり方や個性を出し、その環境に適応することが大切であると感じた。また、国や国籍は関係なく、大事なのは、「人」である。日本人や外国人は関係なく、その人の経験やコミュニケーションの取り方で、環境は変わる。任期の期間をどのように有意義な時間にするかは、その人次第である。それは、どこの場所にいても同じであると感じられたのは、１つの成果である。

デュッセルドルフ日本人学校に赴任して

加東市立鴨川小学校　豊田　悦子

１ 赴任地の概要

デュッセルドルフ（Düsseldorf）は、ドイツ連邦共和国の都市でノルトライン＝ヴェストファーレン州の州都であり人口は約 61 万人。ライン川河畔に位置し、ライン・ルール大都市圏地域の中心でルール工業地帯のすぐ南西部にある。日本企業の進出も盛んで、デュッセルドルフ市内には約 6,000 人以上の日本人の駐在員やその家族などが居住し、日本総領事館などのあるインマーマン通りは日本人街といわれるほど日本の店が立ち並ぶ。

２ 赴任校の概要

デュッセルドルフ日本人学校は１９７１年４月２１日、デュッセルドルフ市オーバーカッセル区教会付属建物カニージウスハウスを仮校舎として、小学部５年生から中学部３年生までの４３名で開校した。１９８７年５月には児童・生徒数が９００名を超え、１９９２年には９９８名となった。その後は児童・生徒数は年々減少傾向にあり、現在は小学部、中学部合わせて約４６０名の児童生徒が在籍している。

子どもたちにとって、ここデュッセルドルフは大変生活がしやすい街で、登下校は子どもたちの６割が徒歩、３割が電車かバス利用、残り１割が自家用車で通学している。通学時間も３０分以内が９７％で、ほとんどの子どもたちが学校の近くに住んでいる。公園が随所にあり鬼ごっこやサッカー、ドッジボールなどで楽しく遊んだりしている姿を見かける。また、子どもたちが興味・関心・意欲さえあれば、自分の力を伸ばすことができるスポーツクラブや、音楽学校、バレエ教室など様々な施設がある。子どもたちは放課後を利用し、現地の子どもたちに混じって通っている。

本校は、小学部と中学部が同じ敷地、同じ校舎で学習しており、日常的に小中の交わりがある。小中が関わる大きな行事として運動会と学校祭がある。この２つの行事は、補習校の児童・生徒も（約２００人）も参加し、大いに盛り上がる。９月の週末２日間にわたって行われる学校祭は、本校最大の行事である。学校祭のポスターはデュッセルドルフの様々な会社や飲食店にも配布され、保護者だけでなくヨーロッパ中からいろいろな人が見学に訪れる。当日は、小・中学部の学習発表、琴クラブやウィンドアンサンブルの演奏、日本人クラブで結成している合唱サークルのコンサートなど様々な催しが行われる。校舎内では、保護者を中心としたショップや様々な遊びのブースが設けられる。また、日本人が経営するパン屋さんやスーパーマーケットが出店し、うどんやからあげ、たこやきといった様々な日本食が販売され、学校はさながら「日本のお祭り」の雰囲気になる。この日のためにデュッセルドルフにやってくるヨーロッパ在住の日本人も多い。また、デュッセルドルフに住むドイツの人々は日本に関心がある方が多く、学校際にも多くのドイツ人が訪れる。子ども達も１年に１回のこの日を大変楽しみにしており、保護者もこの日のために半年をかけて準備をしている。

３ 教育実践

本校は、ドイツにある日本人学校として第１学年からドイツ語の授業を行っている。しかしながら、学校の中ではドイツ語を使う必要性はなく、普段の生活の中においても自らドイツ人コミュニティーに入らない限りは、日常的にドイツ語にふれ合う機会をもつことは難しい。児童の中には「ドイツ語を話したい。」という意欲はあるものの使う機会がないため、ドイツ語を使って自らコミュニケーションをとろうとする児童は少ない。そこで、実生活において使うチャンスに恵まれることでドイツ語を積極的に学び、自らコミュニケーションをとるのではないだろうかと考えた。１年生の３学期の教材に「むかしから　つたわるあそびを　たのしもう」という学習がある。日本の昔から伝わる伝統遊びに触れたり、日本の風習や伝統行事にふれたりして日本の良さを感じることができる単元である。そこで、自分たちが楽しんだ日本の昔遊びを「ドイツの子どもたちに伝える。」ということを目標に単元を構成した。人に教えるためには、昔遊びが上手になければならない。昔遊びを教えるためには、話すためのドイツ語を習得しなければならない。昔遊びを教えてもらうためにドイツに永住されている日本人の高齢者の方に来ていただいた。デュッセルドルフには、「竹の会」というドイツ人配偶者をもつ日本人の女性の会がある。日本人学校の子どもたちの祖父母は遠く日本に住んでおり、また「竹の会」の方も国を離れなかなか孫と会うことができない方も多くみられた。双方の交流は大変温かい雰囲気で行われた。

昔遊びを教えてもらってからは、休み時間になると子どもたちは競い合うように昔遊びを楽しむようになった。日本の子どもたちに比べ、遊ぶものが少ない子どもたちにとって昔遊びは「すればするほど上手になる魅力的な遊び」だったようである。また、この遊びを通じて日本にいるおじいちゃん、おばあちゃんとのやりとりも増えたようである。休み時間には誰が上手にこまを回すことができるか、どんな技ができるか。休み時間の子どもたちの表情も生き生きしていた。日本の昔遊びの種類は多く、そのおもしろさを子どもたちは感じていたようだった。当日は、ドイツの子どもたちに伝える紹介する遊びを８つに絞り、コーナーに分かれて準備をした。伝えるためのドイツ語もドイツ語の堪能な児童に先生となってもらったりドイツ語教員に教えてもらったりして準備した。当日は、生き生きとドイツ語を使い、楽しんで現地の子どもたちに伝える姿があった。交流後の感想には、「もっと、ドイツ語を話せるようになりたい。」「友達ができた。」「今度は、もっと話せるようにしたい。」など、意欲的な意見が多くみられ以前にも増して、ドイツ語を学ぼうとする児童の姿が見られるようになった。

４ おわりに

当地に赴任する前までは、日本人学校では現地校との交流が盛んであろうと思っていた。しかし、赴任した時点では４年生以下の交流校はなく、教員が気軽に現地校に出向き、現地校の授業を見る機会もなかった。そのため、教員のドイツの教育システムに対する認識も低く、子どもたちのドイツ語に対するモチベーションも非常に低かった。ドイツ語に対する学習意欲を高めるためには、とにかく使うことである。そう考え、日本人学校から徒歩で行ける範囲、子どもたちが家庭に帰った後も公園等で出会うことのできる交流校を探した。また、教員が気軽に現地校の授業を見ることができる研修も現地の教員の協力を得ながら同時に行った。その結果、教員の現地校への見学を通じて同学年の児童との交流が実現した。本来の目的であれば、もっと定期的な交流をする予定であったが、ドイツの学校の新学期が９月スタートということもあり課題も多かった。しかし、教員自身が自ら動き、入口をつくることで現地の社会に子どもたちも入っていくことができるということも分かった。

教員自身の考え働きがけで様々なことが実現でき、児童の指導へと返していけるのが日本人学校の良さでもある。ただ、３年間では何かを形にするのは短かすぎたが、自分なりに全力で力を注いだ３年間だったといえる。日本に帰った今、日本の子どもたちに私ができることとは・・。これからの日本を支えていく子どもたちのため、周りに、世界に興味を向けることができるよう、小さな芽をたくさん蒔いていくことだと感じている。

ニューヨーク日本人学校に赴任して

姫路市立飾磨東中学校　小林恵子

1 赴任地の概観

ニューヨーク日本人学校は現在、ニューヨーク州の東隣のコネチカット州グリニッチという人口約6万人の市にある。1992 年にニューヨーク市からグリニッチに移ったが、ニューヨーク日本人学校という名称をそのまま使っている。グリニッチはニューヨーク市マンハッタンから電車や車で、約1時間の位置にある。

市内にはヘッジファンドなど金融サービスの会社が多く、アメリカで最も裕福な地区の一つに挙げられたことがあり、富裕層が多く治安が大変よい。グリニッチの中心地にはグリニッチアベニューがあり、交差点には景観を守るために信号がなく、警察官が交通整理を行っている。グリニッチアベニューには数多くの有名な高級服飾店が並んでおり、マンハッタンに行かなくても望みの品物が手に入る。市内には立派な設備をもつ施設が多く、市立図書館では日本の書籍も貸し出しできる。

気候は温暖湿潤気候だ。青森県と同じ緯度にあるため、夏は涼しく、冬は寒い。冬期はマイナス10度を下回る時もあり、年に数回は雪のために休校になる。しかし建物内はセントラルヒーティングが施されているため、室内は暖かく快適である。

市内や隣接するニューヨーク州に日本食料品店があり、日本人が比較的多く住んでいる。緑が多く、大きな公園が点在し、タウンが保有するビーチもある。アメリカという国の1つの特徴でもあるが、本人や親、祖父母が中南米やヨーロッパからの移民である人も多い。

2 赴任校の概要

アメリカ合衆国本土には、全日制の日本人学校が3校ある。ニューヨーク日本人学校・ニュージャージー日本人学校・シカゴ日本人学校である。また土曜日のみの補習校もある。アメリカ合衆国内では多くの日本人の子どもが平日は現地校に通っている。現地校に通っている児童生徒は土曜日に補習校に通ったり、平日の放課後に塾に通ったりして、日本の教育を補っている。

ニューヨーク日本人学校（The Japanese School of New York / The Greenwich Japanese School）は，ニューヨーク日本人教育審議会により、1975 年、ニューヨーク州ジャマイカ・クイーンズに開設された、北米で最も古い日本人学校である。1992 年には、児童生徒数の増加により、ニューヨーク州に隣接する緑豊かな環境の良いコネチカット州のグリニッチに移転し、現在に至る。児童生徒数は初等部が 97 人、中等部が 32 人で合計 130 人である。2 学期には 9 年生(中学 3 年生)が現地校を卒業して、受験のために本校に転入してくる。在籍人数は減少傾向にある。保護者の赴任で日本から編入する児童生徒が多数を占めるが、中にはアメリカ国内で生まれ育った児童生徒も在籍している。登下校はグリニッチタウンとの取り決めによりスクールバス使用が必須となっている。バス停には必ず保護者が送り迎えをする。安全対策として、毎月、避難訓練をしており、不審者対応のロックダウンやバスの避難訓練など、様々な想定で緊急事態に備えている。また、休み時間にはグラウンドや体育館に必ず教職員が子ども達を見守り、安全確保に努めている。ユダヤ教のカーメル・アカデミー校とリース契約をしてキャンパスシェアをしているため、校舎やグランドなどの使用で制限される場面があり、年々施設利用の状況が厳しくなっている。

3 特色ある教育実践

ニューヨーク日本人学校には 1 年生から 9 年生まで、全学年において ESL が設けられており、英語教育に力を注いでいる。

子ども達は、初等部で週に 4 時間、中等部で週に 5 時間、現地採用の Native Speaker と Bilingual Speaker から生きた英語を学んでいる。英文法は勿論、今、まさに使われている『生きた英語表現』を、一人ひとりの力に応じて指導を行っている。授業形態は 1 学年を原則 2 ～ 3 クラスに分けての習熟度別授業をはじめ、取り出し指導を適宜行うなど、少人数できめ細かい指導を行っている。授業内容は『聞く Listening』『話す Speaking』『読む Reading』『書く Writing』『文法 Grammar』を盛り込んでいる。また、読書を通して英語に親しめるように図書室の英語の本を借りて読む時間を設けている。英語科でも毎年オープンスクールで、日々の授業内容の向上と、保護者や外部の方に授業を見る機会を設けている。また、英語科職員も研究授業を行い、研鑽をしている。さらにＡｒｔ科の授業は、現地採用の職員が初等部は週 2 時間、中等部は週 1 時間、全て英語で行っている。作業をしながら簡単な英会話で

学習が進むので、英語に慣れ親しむにはとてもよい機会になっている。加えて米国社会の授業でも、現地採用の職員が週１～２回英語で行い、アメリカの文化について学んでいる。

本校の ESL の目的は、各レベルによって異なる。Ａクラスはネイティブスピーカーの英語力に近づけることである。Ｂクラスは批判的思考や４技能を習得することである。Ｃクラスは基本的な英語力を付けることである。また、子どもたちが自分で目標を設定し、日々の学習の成果を試す機会として実用英語技能検定（英検）を毎年３回、本校を会場として、希望者により実施している。

次に各学年のクラス分けは、転入生は英語科の教員が面接をして決定する。前年度からの在籍生徒については、２月に行う LAS / LAB test の結果によってクラス分けを行っている。LAS test では Reading, Speaking, Writing, Listening の４観点をみる。全英語教員が協力して行い、５～６時間ほど時間をかけて実施している。どの力が強いか、前年度と比較してどの力がついたのか、また同じ学年の児童生徒との比較もできる。このテスト結果の報告を保護者にも知らせている。

使用するテキストは各教師が決定する。同じ学年でも、構成する児童生徒によって力が毎年異なるため、その集団によってテキストを検討する。テキストはインターネットとリンクしており、動画を使って新出単語を効果的に紹介したり、リスニングの教材があったりと工夫がされている。

以前の ESL ではドリル練習をよく行っていたが、最近の ESL では本当のコミュニケーションを目指し、生徒それぞれに合った内容を練習する傾向にあり、本校でもそのような取り組みがされている。その生徒の実態に合った意味のある英語が使えるように配慮されている。

また、本校では１０月に初等部と中等部に分かれて学習発表会を行っている。中等部は全学年で英語科スピーチがある。そのスピーチに向けて、英語科の各クラスで同じテーマでエッセイを書いていく。テーマは「修学旅行について」「フィクション」「アメリカの年代」などである。Ａ～Ｃの各クラスから１人ほど代表が選ばれ、学習発表会でスピーチを行う。また、始業式、終業式において初等部、中等部から１名ずつ日本語と英語のスピーチを行ったり、運動会や行事などの場面で英語を使って司会をしたりするなど児童生徒が英語の成果を披露する場面を多く設けている。その結果、英語の発表に向けて英語力が向上するとともに、児童生徒本人や仲間が英語の力の成長を感じることができる。

ESL で学んだ英語を使う場面として、現地の学校との交流がある。毎年キャンパスシェアをしている Carmel 校や地域の公立・私立中学校との学校間交流である。私が担任した８年生では、毎年隣町である Stamford 市の KING 校との学校間交流を行っている。子ども達にとっては、普段の英語の学習の成果を確かめる場であり、新しい友達をつくる大切な行事になっている。KING 校はプライベートスクール(私立学校)であり、クリケット、野球、サッカー場、３Ｄプリンターなど設備が充実しており、１クラスは１５人ほどで、スタッフも多い。本校の８年生との学校間交流は８年目となる。今年度の KING 校招待時には、自己紹介・他己紹介、日本文化紹介、銃規制のディベート、和太鼓の演奏と盆踊りや日本の歌を KING 校の生徒と一緒に体験した。招待の１週間後には KING 校を訪問し、校舎案内、授業体験、バスケットボールをして、交流を深めることができた。

〇以下は本校 ESL で使用しているテキストである。

＜初等部用のテキスト＞・Cornerstone A-F (Pearson Longman)　・Reach A-F (Cengage Learning)・Backpack A-F (Pearson Longman)・Explore Our World 1-6 (Cengage Learning)・Our World 1-6 (Cengage Learning)・New Parade

＜中等部用のテキスト＞・Postcards 1-4 (Pearson Longman)・Milestones A-D (Pearson Longman)・Time Zones 1-4 (Cengage Learning)・Inside A-F (Cengage Learning)・Let's Talk 1-3 (Cambridge)・Q: Skills for Success 1-4 (Oxford)・In Synch 1-4 (Pearson Longman)・Side by side A-F (Pearson Longman)・Pathways 1-4 (Cengage Learning)

４　成果

小学校から英語指導で文字導入をするべきかという議論がある日本と異なり、小学校１年生から文字やフォニックスなどを学習している様子は衝撃であった。転入して１～２学期もすれば、英語の聞き取りができるようになり、１年もすれば発音よく英語を話している生徒が少なくない。ESL から学ぶことが多々あった。日本以外の英語教育について実際に目で見たり、体験したりすることができたことは有意義な経験となった。今後、英語教育に生かしていく。そしてクラスの一人ひとり、またその保護者の方々、苦楽を共にした同僚と出会えたことが私の宝である。

グアテマラ　コンセプシオン市教育事務所に赴任して

大阪市立四貫島小学校　鈴木　恵

１　赴任国の概要

グアテマラ共和国、通称グアテマラは、中央アメリカ北部に位置する共和制国家である。北にメキシコ、北東にベリーズ、東にホンジュラス、南東にエルサルバドルと国境を接しており、北東はカリブ海に、南は太平洋に面する。人口は約 1,634 万人、面積は北海道と四国を合わせた広さよりやや大きい広さである。気候は低地及び海岸地域は熱帯性気候であり、中央高原地帯は温帯性気候である。１年は乾期(11 月～4 月)と雨期(5 月～10 月)に分かれており、特に 12 月～2 月はほとんど雨が降らない。公用語はスペイン語であるが、国民の過半数はマヤ文化を祖先とする原住民であり、地方では 20 種類以上のマヤ系言語が用いられている。1996 年まで続いたグアテマラ内戦により治安や政治においてグアテマラ社会は未だに不安定な状態にある。コーヒー、砂糖、バナナ等の農産品が主要輸出産品で、今でも女性は丹念な刺繍を施したウィピルと呼ばれる先住民の民族衣装を身にまとって生活をしている。赴任地ケツァルテナンゴ県は、グアテマラ第二の都市といわれている。

２　赴任校の概要

配属先はコンセプシオン市教育事務所。ケツァルテナンゴ県の出先機関として、教育全般に関する問題点の解決や教育システムの円滑な運営のため設置されている。公立小学校 17 校、中学校２校があり、一番大きな学校は児童数 244 名、各学年 2 クラスである。市の中心から離れるほど、複式学級が多くなる。私は主に小学校教員対象に「算数授業力向上」のため派遣された。市教員は教師用指導書および、児童用作業帳「GUATEMATICA」を有効に活用した授業ができていなかった。具体的には、教員は、分数や小数の概念や基礎知識不足していること。また子供の発達年齢に即した具体的指導方法を知る機会があまりないこと。教員によるストライキや先を見通して計画的に物事を進める力が弱いため、年間計画にそって教えなければいけないことを教えていない、つまり未履修の単元があること。そして、自分の授業や指導を振り返り相談する機会が無いこと、教員間同士の交流の場が少ないと感じた。地域格差による課題を把握するために、巡回する小学校は、大・中・中・小規模の４校に決定した。

３　特色ある教育実践

(1) 学校巡回

教育現場の実態把握のため、４校の巡回校に算数科における学力テストを実施した。教員への指導と助言を書き込んだシートを毎時間教員に渡し、校長に報告するようにした。

(2) 研修会

主に、算数科授業に関する研修会を定期的におこなった。最も大切にしたのは、考える楽しさに気がついてもらえるようにしたことである。全市校長を対象に日本の教育に関する研修会もおこなった。また複式学級の実践に関する研修会を実施した。活動の後半になると、算数指導に関するビデオを作成し、現地教員が主催できるよう企画、運営を行った。また国立大学と共同し、他県で出張研修会を行った。

(3) 授業研究の導入と普及

グアテマラ教員は、教育実習の経験や、専門的知識を持たず教壇に立つことができる。彼らは、他人の授業を見た経験がほとんど無い状況であった。また場所が不足していたり勤務時間や給料、働き方の姿勢などが原因で教員同士における相互扶助の関係が薄かった。そこで、授業研究を紹介した。グアテマラ人の教育的価値観に基づいた、「よりよい授業の発見と共有の場」として巡回校の教員が中心となり、授業研究チームが発足し、全市に普及した。

検討会後

授業研究チーム

(4) 他の地域との連携

他県に日本人ボランティア(算数)が７名と、JICA 専門家１名がいた。彼らと連携し、他県の教員と交流する機会を提供した。また、他国(中南米９か国)と交流する機会を設け、５日間にわたる研修会を行った。さらに、他職種の日本人ボランティアと協力して理科の授業、持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）授業を小学生、高校生を対象におこなった。

(5) 広報

市教育事務所には、日々多くの市民や市役所の方々が訪れる。そこで、待合室に広報を目的とした壁新聞を毎月作成した。授業を工夫している教員の頑張りや、他校の取り組み内容などを紹介した。

４　成果(派遣隊員として得たもの)

私は、大阪市で４年間の小学校教員生活を経て青年海外協力隊へ参加した。活動期間中、時間に余裕のある中で「教育、豊かさ、国の発展、算数の面白さとは何か」を現地の人々の反応を通して自問自答し考えることができた。自分の意思で活動内容を考え、実施した経験は何事にも代えがたい学びであった。グアテマラでの経験は、何もないところから始まり、自分の信念に基づいて行動していくことが常に求められた。伝えたいことと、求められていることの２つを意識し、活動内容が現地の人々のためになっているのかについて考えたこと、また、正解のない中で、現地の人々と共に悩み考えたことは、学ぶことが多かったと同時に自分の強みと弱みを強烈に意識させられた経験でもあった。自身の算数や教育に関する知識不足を痛感し、邁進する日々でもあった。また、これら赴任先での活動は、日本人の隊員と切磋琢磨したこと、そして自身の伝えようとすることを、何とかくみ取ろうとしてくださったグアテマラの教員、常に感謝を伝えてくれようとするグアテマラ人の人柄あって成り立ったものだと考えている。今後は、この経験を日本の子どもたちに伝えていきたい。

ソウル日本人学校に赴任して

神戸市立稗田小学校　奥谷　裕子

１　赴任地の概要

大韓民国、通称韓国は、朝鮮半島南部を実行支配する東アジアの共和制国家であり、戦後の冷戦で誕生した分断国家である。憲法上は、鴨緑江（おうりょくこう・アプロッガン）豆満江（とうまんこう・トゥマンガン）以南の韓半島（朝鮮半島）の全域を領土とするが、現在、北緯 38 度線付近の軍事境界線より北側は朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の統治下にあり、施政権は及んでおらず、1953 年の休戦以来、休戦状態にあり現在まで軍事対立や小規模な衝突が続いている。このため、韓国では国家保安法により、北朝鮮（韓国では「北韓（プッカン）」と呼称）を公然と支持することは禁じられており、北朝鮮支持者とみられる場合は入国や言論に制限が加えられることがある。

国土面積は、98,480 ㎢であり、日本の約 26%にあたる。国土に関して、日韓間には、竹島【韓国名：独島（ドクト）】の領有問題が存在する他、日本海【韓国名：東海（トンヘ）】の国際的呼称を巡っての政府間の対立等、いくつかの問題がある。

また、韓国の歴史を知る上で、日本との関係は大変深いものがある。古くは、稲作の伝来、朝鮮半島の三国時代以降においても、日韓間での関わりは大きいが、韓国において現在でも大きく扱われているのは、豊臣秀吉が 1592 年から日本が朝鮮半島に侵略した、文禄・慶長の役がその一つである。その際の朝鮮軍の将軍李舜臣は、現在でも韓国では英雄となっており、各地に李舜臣の日本の方角を向いて立つ像が設置されている。もう一つの歴史は、韓国併合である（韓国では、日帝時代と呼ばれることが多い）。これに関しては、日本側においても、否定的にみる見方と、朝鮮半島の近代化に寄与したと肯定的に評価する見方とがあり、対立している。韓国側においては、否定的にみる見方が多数である。そこから、近年の韓国では、伊藤博文を殺害した安重根を祖国解放の英雄として解釈している。また、昨今よく取り上げられている、従軍慰安婦問題等、日韓間では様々な歴史的認識のずれや、解決していない問題等が多く存在している。このような点から、現在の韓国においても、日本に嫌悪を抱く「反日」と言われる人も存在していることも事実である。しかし、日本人学校に勤務する現地の人々はもちろん、生活していて街で出会った韓国の人々は、日本人にもとても親切に、温かく接してくれる人たちばかりであった。実際のところ、日本のアニメやドラマは韓国でも人気が高く、特に若い世代の人たちは、日本を好意的な感情を抱いている人が多いと感じた。

２　赴任校の概要

1970 年（昭和 45 年）に、日本文化交流センター（現・日本大使館広報文化院）に日本語学級が設けられ、1972 年（昭和 47 年）、子どもの人数増加に伴い龍山区のビル２階に移転した。その際、正式にソウル日本人学校として開校した。その後、２回の移転を経て、現在はソウル特別市麻浦区上岩洞に位置している。また、同校はソウルジャパンクラブ（SJS）によって設立・運営されている学校である。2010 年（平成 22 年）に現在の場所に移転してきた。

設備に関しては、全教室にノートパソコン・実物投影機・プロジェクターが設置されていたり、天候に関係なく使用できる室内プールが整備されていたりと、学習環境が整っているといえる。また、普通教室については、小学部１・２年生の教室はそれぞれの教室に扉があるが、３・４年生の教室は、廊下との壁のようなものはあるものの、扉はない。５・６年生の教室になると、廊下との隔たりが全くない（カーテンは設置されているが、基本的に使用しない）完全なオープン教室となっている。それぞれの学年に応じた、教室の作りとなっている。

幼稚部・小学部・中学部の 3 部からなり、2016 年度（平成 28 年度）の児童数は、幼稚部 68 名・小学部 295 名・中学部 86 名、計 499 名となっている。教育目標は、「たくましく心豊かに世界に生きる子どもの育成」である。

３　特色ある教育活動

（１）　現地校との交流学習

小学部１年生から中学部３年生まで、現地の学校との年に２回の交流学習を行っている。１学期の交流学習では、現地校の児童・生徒を日本人学校に招き、２学期の交流学習では、現地校を訪問する。また、学年ごとに違う現地校と交流を行っているため、児童（生徒）は毎年違う学校を訪問することができる。ただし中学部は、１年生から３年生まで一緒に交流学習を行うため、毎年同じ学校と交流が学習を行っている。また、中学部は、現地校だけでなく、日本人学校の隣にあるインターナショナルスクールとの交流学習も行っている。

学習内容については、各学年によって異なっているが、日頃学習している韓国語を使って簡単な挨拶や自己紹介を行った後、１学期においては一緒に折り紙をしたり、おにぎり作りをしたりと日本の文化的交流を行う。また、文化的交流だけでなく、ドッジボールや大縄跳びなど、一緒に体を動かす、スポーツ交流も行っている。２学期の現地校訪問では、文化的スポーツ的交流の他に、給食交流も行っている。ちなみに、ソウル日本人学校では給食を実施していないため、児童（生徒）にとっては、大変新鮮な体験である。

（２）　幼少中の連携

ソウル日本人学校では、幼稚部（年少）～中学部の園児・児童・生徒が一緒に学校（園）生活を送っている。運動会やワクニコハッピーフェスティバル（２学期に行う、合唱・合奏などの発表会）といった大きな学校行事だけではなく、週１回、小学部３，４年生児童が幼稚部児童に絵本の読み聞かせを行ったり、学期に１回、幼稚部から中学部までの園児・児童・生徒で構成されている縦割班活動を行ったりしている。

（３）　英会話・韓国語の学習

小学部と中学部では、週１時間ずつ、韓国語を英会話の授業を行っている。各授業では、それぞれの言葉の学習をするだけではなく、文化を学ぶことも大切にしている。また、小学部３年生以上はそれぞれのレベルに合わせてクラス分けをし学習している。韓国語については、１学年（５０名程度）を３クラス、英会話については、１クラス（２５名程度）を３クラスに分けて、少人数制で学習している。

（４）　有事を想定した避難訓練

赴任地の概要でも述べたように、現在韓国は北朝鮮と休戦状態である。そのため、いつ有事が起こるかわからない。万が一に備え、年２回、有事を想定した避難訓練を行っている。韓国では、建物の地下が有事の際のシェルターに指定されている場合が多い。有事に備え、毎年、日本人学校付近の避難場所の確認を職員全員で行っている。

４　成果

全国から教員が集まる学校のため、授業の進め方や行事の進め方などの違いに、赴任当初は戸惑うこともあった。しかし、そのような新しいこととの出会いは、自分の知識を深めたり、広げたりする大変貴重な経験となった。また、日本と同様にソウルにはたくさんの物が溢れているため、教材等に関して、特に不自由することもなく、日本と同様の授業をし、学校生活を送ることができた。

生活においては、日本で報じられている韓国と、実際の韓国との差を感じた３年間であった。日本では、反日的なニュースが報じられることが多いが、実際に生活をしてみるとそのように感じることはほとんどなかった。買い物をしていると、こっちの物の方が良い、と教えてくれる見ず知らずのアジュンマ（おばさん）や、重い荷物を持って電車やバスに乗ると席を譲ってくれようとする人たち、タクシーに乗ると、少しだけ話せる日本語でたくさん話しかけてくれるアジョシ（おじさん）というように、日本で生活しているよりも、人を近くに感じられた３年間であった。しかし、現地の学校を訪問すると、各階の廊下に貼られている「独島」の地図や、駅に設置されている「独島」の模型を目にすることが多い。そこからは、日韓間には未だ解決されていない問題があることも実感させられた。そのことにより、日本と韓国との歴史を学ぶこともできた。私が３年間に学んだことを今後、子どもたちに伝えたり、教育活動に活かしたりしていくべきだと考えている。また、韓国と日本の関係を「１番近くて遠い国」と言われることもあるが、いつかお互いが「１番近い国」と感じられることを願っている。

「グァテマラ日本人学校の経営から“夢みる修学旅行”を考える」

姫路市立総合教育センター（育成支援課嘱託職員）照本 忠光

１ はじめに

グアテマラの識字率は７０％を割る。ある小学校の場合、１年生は５０人以上いるのに６年生は５人しか在籍しておらず、最後に卒業できるのは１人…。学校があるはずの時間に、弟や妹を背負って歩いてる女の子。学校へ行く友達を見ながら、お父さんの仕事についていく男の子。小学校を優秀な成績で卒業したけれど中学校へは行けない。たくさんいる兄弟姉妹の分も自分が働かなければならない現実。

「勉強したい？」「学校行きたい？」

「うん」と、こっくりうなずく子ども達。

「きっといつか（行くことが）出来るよ・・・。」

これは、１６年前にグァテマラ日本人学校で常勤講師をされていた白石光代さんが代表の NPO 法人“青い空の会”のＨＰをひらくと、その最初のページに掲載されている挨拶文の一部である。

決して勉強だけがすべてで、学校へ行くだけがすべてではないかもしれない。しかし、子ども達が「学校へ行きたい」と希望するのであれば、それは大切なことだ。

やがて、白石さんと出会う機会があり、彼女が活動の拠点としているソロラ県にある学校や子ども達の話を伺った。そして、「小中学校に通えるのがあたりまえである日本」のことを改考するとともに、ご縁があって日本人学校の校長として赴任したからには、現地に目を向けた活動にチャレンジしなければならないと決意した。

紙面の都合上、赴任国（日本語表記では“危地馬拉”と書く）や日本人学校の概要等については、派遣教師帰国報告会で紹介することとし、以下、“夢見みる修学旅行”について述べる。

２ 修学旅行の見直し

（１）今までの修学旅行

小学６年生が在籍する年度に限って、同５年生（さらには４年生を含めることも）と一緒に実施しており、私が赴任した平成２７年度は、２名の６年生児童の他に、２人の４年生を加えて行った。

その教育的活動内容は、現地理解をするために織物並びに染色体験をメインとし、マヤ文化の色どりが強く残っているアティトラン湖周辺のパナハチェルという町で１泊した。

しかし、現地理解とはいうものの、織物体験をさせてもらいその対価を支払うのであるから、単に観光で訪れる人たちとそう変わらない。年度によっては、世界文化遺産の一つであるティカル遺跡や隣国ホンジュラスにあるコパン遺跡を訪ねたこともあるが、グアテマラに暮らす人々とのふれ合いにまでは至っていない。

（２）現地の人々の生活

グアテマラの夜明けは、各家の煙突からうっすらと立ち上る煙から始まる。かまどに火が入ると、みんながそこに集まって、朝のコーヒーを沸かしトルティーヤを焼いて一緒に食事を取る。かまどは台所にある唯一の家具であるが、ただ料理をするだけのものではなく、くつろげる場所という大きな役割を担っている。グアテマラの友人が「我々にとって、最も大切なものは家族」と誇らしげに話す一端を感じる。

また、現地のみなさんの家には、冷蔵庫がない家庭も少なくない。従って、日々の買い物は、値段があって無いような市場（メルカド）で行われるのが通常で、とりたての野菜やたまご・果物であふれている。そこは、外に出る機会の少ない女性にとって貴重な交流の場であり、スーパーやモールが急増しても、グテマラの買い物の中心なのだ。また、欲しいものを欲しい量だけ買うことで、余計なゴミは出ず、結果的にエコな暮らしにつながる。

これらを通して、我々日本人にとっての「幸せ」「豊かな社会」などを考える機会を作りたいと思うようになった。

（３）現地社会を垣間見る真の交流教育の模索

年２回、学校から車で数分の所にある「オーストリア校」との学校間交流では、次のような活動を継続している。

・学校紹介　・オーストリアと日本の相互紹介　・歌や踊り、伝統的な遊びなど

・スポーツ交流　・その他　　※平成２７／２８年度の実績

オーストリア校は大きな学校（在籍する児童生徒数は７００名を超す）で、シティ近辺に住む富

裕層である家庭の子女が通学しており、現地社会の中にある学校と比べると、学校設備や子ども達のおかれている環境には大差がある。そこで、真の交流教育活動を安全安心のもとで実施する手立てを模索している際に出会ったのが前述した白石光代さんだった。

3　体験型修学旅行の計画とそこから見えてくるもの

（1）平成２９年度に実施する修学旅行に向けての実踏

いくら現地社会にふれさせたくても、治安のことに深慮しなくてはいけない。学校行事で行う訳だから、大きな事故があってはならない。そこで、帰国が迫ってきた今年の２月２５日に、派遣３年目を迎えるＷ教諭・Ｋ教諭と共にソロラ県に足を運んだ。

同県の中心都市のソロラ市で白石さんと合流後、彼女が１０年以上にわたって関わりを続けている学校の中で、一番小規模な小学校（全校生約５０名のラスミナス小学校）が位置する小さな村を訪問する。私の緊急帰国前の慌ただしい時であった。

（2）ラスミナス小学校について

幼稚園児と義務教育である小学生を合わせて約５０名の子どもが在籍する学校には、“青い空の会”が支援している子ども１１名がいる。１階建て校舎１棟からなる小さな学校には、女性校長を含む３名の教師が主に複式学級で教育活動を行っている。

従って、「子ども達とは意思疎通がしやすく、人なつっこくて好奇心が強い」「その一方では、住民の５０％がカクチケル語という言葉を話し、スペイン語は小学校に通い始めてから習う」（白石さん）と言われるように、子ども達の学習能力は決して高くはない。

（3）ラスミナス小学校との交流から見えてくるもの

①真のグアテマラ社会

日本から遠く離れた中米にあるグアテマラに在住こそしていても、日本人家庭にいて日本人学校に通っている限り、なかなかグアテマラ社会が見えてこない。

例えば、男女の格差社会 ／ 平均月収約３万円 ／ 信号待ちをしている車の前でパフォーマンスする子供 ／ 水道のない家庭 ／ シャワーは水 ／ 家族を大切にする国民 ／ その他 を理解しようと思っても容易ではない。治安のことを考えると、行動範囲やその内容に制限がかかる。

そこで、新たな修学旅行を通して、真のグアテマラ社会を知る機会になることを願う。

②自分の将来のキャリアを見つめさせる

阪神淡路大震災後、地元神戸にある県立舞子高等学校に環境防災科ができた。「防災」というだけで、災害や避難所というようなイメージを抱く人がいるが、防災についての学びを深めた高校生たちは、将来、医者や看護師などの医療関係 ／ 福祉関係 ／ 地質学者 ／ 消防士 ／ 天気予報士 ／ 報道関係 ／ 教師 ／ その他　になりたいという実に様々な進路を考えている。

日本人学校の子ども達は、両親の都合でたまたまグアテマラで生活をしている訳だが、その体験を将来への“自分探しの旅”のヒントにしてほしいと思う。即ち、グアテマラ社会での見聞から、自分がやるべきことを見い出すだけでなく、より寛大なものの見方ができる大人へと成長してもらいたい。

4　まとめにかえて

派遣初年度に立てた３年間の教育構想が、昨年度の１０月２７日に受けた国際教育課からの突然の電話で出来なくなるとともに、その後、新年度に向けての計画で苦慮した。元学校運営委員長であったＮ氏が文科省に送信したイレギュラーなメールによって「２年満期での帰国」の命が下されたからである。

教育面で譲らなかったこと（教育の質の低下につながるため）とＮ氏の資金面を最優先する思考の間で大きな溝が生まれていったことは確かだが、県教委の推薦を受け、文科省による面接等を経ての派遣であるにもかかわらず、一邦人のメールが優先されたことが残念でならない。

ともあれ２年満期で帰国をすることで、「夢ある修学旅行」の実施については、後任の校長並びに派遣３年目を迎える教諭に委ねることになった。校歌に「マヤの心情(こころ)をくみとりつ　大和(やまと)心(ごころ)を高く保(も)ち」とあるように、子ども達は、グローバル教育の神髄とも言えるこのダブルの精神を誇りとして、やがて世界に羽ばたいていく。

最後に、７月に実施する修学旅行が、最高の学校行事になることを祈念してやまない。

マナウス日本人学校に赴任して

マナウス日本人学校（姫路市立香寺中学校）　　阪口　要

1 ブラジルとマナウスの概要

ブラジルは、南アメリカに位置する連邦共和国で、首都はブラジリアである。人口は、約 2 億人（世界第 5 位）で、面積は、ラテンアメリカ最大の領土で 851.2 万㎢（日本の 22.5 倍）である。公用語はブラジル・ポルトガル語で、南北アメリカ大陸で唯一のポルトガル語圏の国であり、世界最大のポルトガル語使用人口を擁する国でもある。宗教は、国民の約 7 割がカトリック教徒で、コルコバードの丘にあるキリスト像（Cristo Redentor）が世界遺産として有名である。また、カンドンブレなどのアフリカの宗教に起原するアフロ・ブラジル宗教もある。歴史をさかのぼると約紀元前 8000 年にベーリング海峡を渡ってブラジルの地に移り住んだアジア人やポルトガル植民地時代にやって来た多くのヨーロッパ系移民、サトウキビやコーヒーのプランテーションの労働力として連れてこられたアフリカ系移民などから成り立つブラジルは、民族や文化の多様性が見られ、その違いを当たり前のこととして受け入れることができる国民性がある。また、近年ではサッカーワールドカップ（2014 年）やリオ・デ・ジャネイロ・オリンピック（2016 年）が開催され、マナウスの競技場（Arena da Amazônia）がサッカーの会場となり、注目を浴びた。

マナウスは、大西洋のアマゾン川の河口から約 1500km のアマゾン本流とネグロ川の合流地点に位置し、人口は約 200 万人（2016 年）で、ブラジルのアマゾン地域最大の都市である。19 世紀に天然ゴムやコーヒー豆、ジュート（麻）栽培の集積地として開かれ、アマゾン内部の経済や交通、流通の要衝都市として繁栄した。旧市街地には開拓時代に建設されたヨーロッパ風のコロニアル調の建物が多く残り、アマゾナス劇場（Teatro Amazonas）が有名である。また、ほぼ赤道直下に位置するため、年間を通じて気温が 30～40℃で、湿度が 80％である。雨期と乾期の降水量の違いも激しく、ネグロ川の水位も 20～30m 程度変化する。さらに、多くの国立公園、環境保護区に隣接しており、「緑の魔界」と恐れられるジャングルには、アラーラやトゥッカーノなどの鳥やピラニアなどの魚、ピンクイルカやワニ、ナマケモノなどの多様な動物が数多く生息し、アマゾン観光の中心地となっている。

2 マナウス日本人学校の概要

ブラジルには、サンパウロとリオ・デ・ジャネイロに加えて、マナウス日本人学校（Escola Japonesa de Manaus）の 3 校の在外教育施設がある。本校は、1980 年にマナオス補習授業校として設立され、1983 年に日本人学校として開校した。児童生徒数は、小学部と中学部を合わせて 36 名（平成 28 年度）である。派遣教員は 7 名で、現地採用教員が 3 名、ローカルスタッフは 4 名である。その他として、警備員数名が 24 時間学校を警備している（平成 28 年度）。学校教育目標を「自ら進んで学びとる子ども」「礼儀正しく、思いやりのある子ども」「心と体を鍛える子ども」とし、知・徳・体の調和がとれた生きる力を育むことを目指している。本校は 2 コースからなり、日本からの駐在員の子弟が在籍する全日コースとマナウス出身の子どもたちのための日本文化コースがある。日本文化コースは、現地の学校に通う日系の子たちが 3 時間目までを日本語や音楽、体育などの授業を受けて、日本の言葉や文化に触れることを目的としている。両コースの子どもたちは、授業や学校行事を通じて日本語とポルトガル語を使い、親睦を深めたり、相互理解に努めたりしている。

本校の学校運営の主体は、在マナウス日本国総領事館や各日本企業を中心としたマナウス日本文化振興会である。年度初めの総会に加え、毎月開かれる定例理事会では学校運営に関わる事項を協議している。日頃の教育活動への理解や多大な財政面の支援を得ながら日本人学校が円滑に運営されている。また、保護者の学校教育に対する関心が高く、行事や PTA 活動にも積極的な協力を得られている。

3 特色ある教育実践

（１）大運動会

本校の大運動会は、学校に在籍する児童生徒と保護者だけではなく、総領事館や日本企業の方々にも数多く参加して頂いている。また、愛（まなみ）幼稚園や地域の子どもたちによるプログラムもある。また、本校の運動会は各企業の福利厚生を実質的に兼ねており、シュハスコ（バーベキュー）を

しながら観覧され、演技へ参加するのが恒例である。演技内容は、日本国内でもおなじみの玉入れや綱引きなどの演技に加えて、本校ではダンス『ボイブンバ』に取り組んでいる。ブラジルは、カーナバルのサンバで知られているが、アマゾナス州では、ボイ（水牛）の物語に基づくダンスがより有名である。毎年新しい曲でボイの衣装を身にまとってダンスを披露している。

（２）水泳記録会

常夏のマナウスでは、一年中水泳の授業ができる。週に一度の授業では、初球・中級・上級の３つのコースに分け、定期的に検定試験を実施している。そして、記録会前には特別時間割による水泳練習を行い、児童生徒は自己新記録や学校新記録の更新を目標に本番当日を迎える。

（３）アマゾン体験学習

マナウス市がアマゾン川流域にあるので、自然体験をねらいに宿泊訓練を行う。ネグロ川流域に日系人所有のビーチ（Praia Japonesa）がある。川幅が広いアマゾンは、訪れると海のように感じる。ピラニアやワニ、エイなどの動物も生息しているが、なるべく安全な場所で子どもたち全員がエイ払いの儀式を行い、海水浴さながらに泳ぎ、砂遊びに興じる。低学年は企業から借用したクルーズ船で就寝し、高学年はチャーターした観光船でヘッジ（Rede：ハンモック）を吊って一夜を明かす。子どもたちは、川遊びやしんと静まりかえった夜のアマゾン川でハンモックに揺られるのを毎年楽しみにしている。

（４）学習発表会

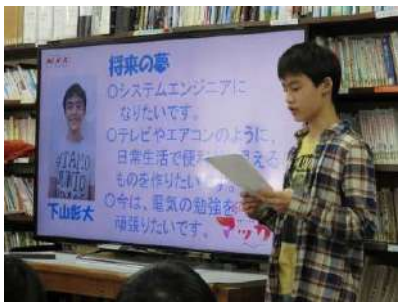
本校の文化発表会として行われる学習発表会は、西部アマゾン日伯協会の協力でホールを借りて行う。学校では、学年別に演目の練習を行い、高学年はポップダンスやソーラン節などの舞踊を披露し、低学年は演劇を行う。また、音楽発表では合唱や合奏を行う。そして、日頃の授業や行事で交流を行っているジョゼフィーナ校の児童生徒との合同発表も行った。さらに、愛（まなみ）幼稚園の子どもたちのダンスや日伯協会の日本語教室の学生によるコーラスの参加も発表会に華を添えている。

（５）長距離走大会

本校は、気候と治安の問題から運動場での活動が困難な現状があるため、体育の授業はもとより休み時間には常に体育館で体を動かしている。さらに、教科外であるが時間割に「アラーラ」という体力作りの時間を設定し、学校の敷地内にあるコースをランニングする 10 分間サーキットを実施している。その成果を発揮する場として、学校近辺のゴルフ場の協力のもとで長距離走大会を行っている。

（６）外国語発表会（全日コース）やミニ弁論大会（日本文化コース）

全日コースの外国語活動（小学部）や英語科の授業（中学部）の発表として、朗読劇や演劇、ストーリーテリングなどを行う。また、日本文化コースの子どもたちは、授業の成果として日本語で作文をまとめ、学内のお話大会で発表する。さらに、日伯協会主催の弁論大会に参加する。各コースとも人前で自己表現することに緊張しつつ、自信を持って発表している。



４　成果（派遣教員として得たもの）

私が派遣教員として過ごした３年間で最も印象的なことは、マナウスでの人との出会いである。日系の子どもたちの言葉づかいや、人との接し方などの穏やかさや慎ましさに古き良き日本を感じた。ブラジルと日本の良さと課題をしっかりと理解し、各自の生活をよりよくするための糧にしようとする姿勢を感じた。また、全国からの教員仲間やローカルスタッフ、様々な企業に勤務されている保護者や現地で永住されている日本人たちを通じて得られた「気づき」が今の私の財産である。

今回の赴任を通じて、ふるさと日本を理解した上で他国の文化や考え方の違いを受け入れ、お互いを尊重しながら自分の意見をはっきりと言える子どもたちを育てることが、私に課せられた今後の使命だと感じている。

シンガポール日本人学校小学部に赴任して

宝塚市立小浜小学校　園田　和広

１　シンガポールの概観

シンガポール共和国は東南アジアのほぼ中心であるマレー半島の先端にあり、面積は約７１９㎢である。兵庫県の$\frac{1}{10}$の大きさで、世界１９６ヵ国中で１７６位である。地球儀で見るとほんの数ミリの大きさの国であるが、人口は５６１万人(兵庫県は５５７万人)で人口密度は7,697人/㎢で世界第二位である。この人口のうち約２００万人は外国人や一時滞在者である。

これは、シンガポールの地理的な特徴からが古くから西欧諸国とアジアを結ぶ貿易の拠点として栄え、様々な人種の交流があったからであろう。総人口のうち、中華系74%、マレー系13%、インド系9%、その他4%となっている。中華系の人々はいわゆる「華僑」であり、華僑の人々が流入する以前に土着していたシンガポール人は１%に満たないと言われている。公用語は英語、中国語、マレー語、タミール語となっている。宗教は仏教、イスラム教、キリスト教、道教、ヒンズー教である。このように、シンガポールは多民族・多文化共生社会となっている。人口の８割が住んでいるとされている HDB(公営住宅)では、隣人同士は他宗教もしくは他民族となるように管理されており、民族や宗教間の対立のリスクを低減する施策がなされている。

国政は安定しているが、投票は義務制で与党に投票しなかった場合には、徴税面、公団住宅の改装が後回しにされるなど、報復的な措置を受ける。民主主義は形式的なもので、現実的には一党支配で独裁政権である。一方で、経済的に豊かで表向きには華やかなことから「明るい北朝鮮」と評されている。

２　起任校の概要

シンガポール日本人学校は大正元年(１９１２年)１１月３日、在留邦人有志によって建てられたことから始まる。この時は児童数２８名、教員１名であった。昭和１６年(１９４１年)には第二次世界大戦のために閉校される。在留邦人は抑留された地においても学校を開き、子弟の教育に力を注ぎ続けた。昭和４１年(１９６６年)にはシンガポール政府から私立学校として認可された。以後、児童生徒の増加に伴い移転を経験し、平成７年(１９９５年)から小学部クレメンティ校・小学部チャンギ校・中学部ウエストコースト校となり現在に至る。

平成２８年度にはクレメンティ校の児童数は８１５名、教職員数は６０名を数えることになった(英会話スタッフを含む)。「豊かな国際感覚をもち、世界の人々とつながろうとする人材の育成」を理念とし、私が赴任したクレメンティ校では(１)英語教育の重視(２)国際理解教育と現地交流の推進(３)ＩＣＴ教育の充実などを具体的な柱としていた。

３　特色ある教育実践

（１）英語教育

①　英会話

２５年前から英会話の学習が導入され、平成２７年度(２０１５年)から英語教育推進部会が開設され、小学部２校の内容の連携、再検討が図られた。英語に初めて触れる児童もいれば、幼少時から英語が家庭内の第一言語で育っている児童もいる状況も踏まえて、Ａ～Ｎの１４クラスに分けて習熟度別に授業が行われている。ここでは、一部のクラスでは日本人が日本語と英語を交えて授業をしているが、基本的には現地の英会話スタッフが英語での授業を展開している。日本では５年生から外国語活動が始まるが、クレメンティ校では１年生から英会話の授業が展開されている。

②　イマージョン教育

イマージョン教育は、「immersion」(浸す・没入する)という英単語から名付けられ、通常の授業をオールイングリッシュで行うことを指す。

クレメンティ校では１８年前から導入され、教科の学習を行いながら自然に英語力を身に付けることを目標としている。会話の中で自然な言い回しや日本語で学習してきた言葉が英語ではどう表現されるかなど、母語や教科学習に影響を与えず、外国語の機能的能力を付けるようにしている。したがって、音楽と体育(水泳)の授業を週に各１時間、現地のネイティブスタッフによって行われている。

（２）国際理解教育

①　学校交流活動

異文化を尊重する態度や、国際社会で自分の考えを表現するためのコミュニケーション能力の育

成、また異文化理解を通して母国の文化の良さに気付くことをねらいとして全学年が現地校との交流を行っている。どの学年も招待・訪問の年２回の交流を行っている。学年ごとに下記のような内容で取り組んでいる。

<table>
<tr><th>学年</th><th>交流相手</th><th>交流内容</th><th>形態</th></tr>
<tr><td rowspan="2">１～３年生</td><td rowspan="3">現地小学校</td><td rowspan="2">ゲーム、ダンス、自己紹介
日本人学校案内、日本文化の紹介、昔遊びの紹介</td><td>全体</td></tr>
<tr><td>４～５人の班活動</td></tr>
<tr><td>４年生</td><td>授業に招待・参加</td><td rowspan="3">１対１の個別交流</td></tr>
<tr><td>５年生
６年生</td><td>現地小学校
現地大学</td><td>授業に招待・参加
日本文化の紹介
インタビュー</td></tr>
</table>

ここでは、英会話やイマージョン水泳で学んだ英語力、コミュニケーション能力を試す場ともなっている。また、４年生では、学期ごとに中華文化、マレー文化、インド文化を学んでいる。校外学習でチャイナタウンやモスク、リトルインディアに行ったり、ムスリム(イスラム教)の日本人の方や、インド人の方をゲストティーチャーとして招いたりすることで、それぞれの文化の良さに触れる機会を設けている。

（３）ＩＣＴ教育

クレメンティ校では、すさまじいスピードで進む社会の情報化に対応すべく、各クラスに iPod と appleTV が各１台配備されるだけでなく、３、４年生には３０台、５、６年生には１００台を超える Chrome book(クロームブック)が配備されている。Wi-Fi 環境も整備され、体育館を除くどの教室でもインターネットを利用することが可能である。社会や総合での調べ学習やプレゼンテーションで大いに活用さている。各学年におけるＩＣＴ教育の概要は以下の通りである。

<table>
<tr><th>学年</th><th>内容</th><th>学年</th><th>内容</th></tr>
<tr><td>１年生
２年生</td><td>パソコンで文集のワードパッドを使って打ち込む
クロームブックの使い方</td><td>３年生
４年生</td><td>総合や調べ学習をパソコンやクロームブックを行う。
新聞をパソコンやクロームブックを使って作成</td></tr>
<tr><td>５年生
６年生</td><td>クロームブックを使って
プレゼンテーションを作成</td><td colspan="2"></td></tr>
</table>

また、中学部では１人１台クロームブックを購入し、個別のアカウントが与えられている。授業の予習や宿題や学校だよりの配布がインターネットを通じて行われているので、小学校－中学校の移行がスムーズにできるよう、学期ごとに３校のＩＣＴ担当が集まり、反省と今後の反省について協議をしている。

４　成果

子供たちが「知る」→「学ぶ」ことで「変わっていく」姿をたくさん見ることができた３年間だった。シンガポールを含め、海外の日本人学校周辺には異文化についてたくさん学ぶことのできる資源がある。そこから何を伝え、何を学ばせるのかを教師が考えて、授業をする。例えて言うなら、材料を教師が選び、調理法を考えて、できた料理を子供が食べる。そしてその味に目を輝かせ新しい世界が広がるというイメージである。なぜこのようなことを考えたかというと、最後の学年で担任をしたある児童がイスラム教の勉強をして書いた感想が印象的だったからである。「イスラム教は勉強する前は怖い、厳しいというイメージを持っていました。でも、勉強をしていくと平等だったり、お金持ちもそうでない人も一緒だったりすることが分かり、優しいイメージに変わりました。次はインドの文化を学ぶので、たくさんのことを学んでいきたいです。」昨今の報道を観ると、イスラム教＝怖いというイメージが子供たちに定着しかねない危うさを感じる。しかし、それは正しく伝えることで正しく判断できるようになると感じている

海外の環境は日本と比べて不便なところも多々ある。しかし、それ以上に子供たちの学ぶ資源はたくさんある。道端に咲いている花や雑草も立派な学習の資源ではないだろうか。気候、食べ物、文化はもちろんだ。帰国したこれからは、「海外から見た日本」を意識して身の回りの資源を上手に料理して、学びのある授業を子供たちに提供していきたい。

シンガポール日本人学校小学部クレメンティ校 に赴任して
～　豊かな国際感覚をもつ人材の育成をめざして　～

明石市立朝霧小学校　野田 星奈

1　シンガポール共和国の概観

シンガポール共和国は、東南アジアの主権都市国家である。マレー半島南端にあり、シンガポール島を含む 63 の島で構成されている島国である。赤道直下に位置するため、気候は一年を通して高温かつ多湿である。モンスーンの影響で雷雨や強風が多く、インドネシアの焼畑や山火事の影響で大気汚染のヘイズによる健康被害もある。ヘイズの汚染数値 PSI が上昇すると目が痛くなり呼吸が困難になるため外出を控える必要があり、赴任中も屋外体育中止や休校などの措置をとっていた。

高度に都市化され、特に南半分は高層のビルやコンドミニアムが建ち並び、レジャーやショッピング等の商業施設が多く、コンクリートジャングルの印象が強いが、公園や街路樹なども良く整備され「ガーデン・シティ」と呼ばれている。東南アジア有数の空港であり世界中の旅行者やビジネスマンに人気のチャンギ空港をはじめ、地下鉄や路線バス、タクシー、高速道路などの交通機関が発達しており、携帯のアプリケーション等を使い国内外の各方面への移動が容易である。国土は埋立てにより拡大してきたが、勤務校周辺の森林地帯近くのコンドミニアムでは現在もコブラの出現や蚊によるデング熱なども発生し、日常生活では注意が必要である。

2 世紀に定住が始まり、英国の植民地、英国から独立、第二次世界大戦では日本の占領下を経て、マレーシアと分かれて以来急速に発展した。2016 年には日本との国交 50 周年となり、外交関係はおおむね良好である。近年の若い世代は親日家が多く、日本のイベント会場には日本アニメのコスプレの人たちで溢れかえっているが、赴任中の 2015 年におけるシンガポール建国 50 周年の記念式典の期間やリー・クアンユー元首相が亡くなった際には、日本の統治時代に対する反日的な言動や報道もあった。

シンガポールは、貿易、交通及び金融の中心地の一つであり、9 年連続「世界で最もビジネス展開に良い国」とされた。貿易を中心に経済が発展し、世界第 3 位の一人当りの国民所得を有するが、格差社会でもある。国際ランキングでは、シンガポール大学をはじめとする英才教育、東南アジア諸国からヘリで搬送されてくるほどの高度医療、経済競争力において高位に順位付けされる。小学校から入試を受けるなど教育熱心で、転職でキャリアアップをしながら経営者を目指す若者が多い。

東南アジア諸国連合（ASEAN）原加盟国、アジア太平洋経済協力（APEC）の事務局設置国でもあるシンガポールは、国歌にも歌われているように多文化主義及び文化多様性があり、約 4 割は外国籍の人である。華人 7.4 割、マレー系 1.4 割、インド系 0.8 割及びユーラシア人である複合民族国家である。各民族のアイデンティティーを大切にし、様々な民族衣装も普段着で使われ、食文化も豊かで街には各国料理のお店が並ぶ。国語はマレー語だが、公用語が中国語、英語、マレー語、タミル語の 4 言語あるため、40 歳以下はシングリッシュと呼ばれる 4 言語を併せもった英語を話す人が多い。また、宗教も多様で、仏教、道教、イスラム教、キリスト教、ヒンドゥー教があり、教会や寺院も多い。

2　シンガポール日本人学校の概要

1912 年に法人有志により、シンガポールに初めて日本人のための日本小学校(教員 1 名児童 28 名)が設立され、1941 年には第二次世界大戦で閉校した。1965 年に、日本人会により国語と算数の補習校が始まり、全日制日本人学校設置活動が活発になった。1966 年のダイベイエステート校時代(教員 1 名児童 27 名)には、シンガポール政府より私立学校として正式認可されたが、勉強道具が十分でなかった。児童数増加に伴い、1968 年スイスコテージ校(児童数 72 名)に移転し、学校目標や校規もでき、中学部の補習授業が始まり、1970 年に中学校を開校(生徒 16 名から 137 名に増加)した。1971 年にウエストコースト校に移転し、校庭や校舎がとても広くなり、特別教室もできた。

1976 年に日本人会、企業、日本政府による援助により現在の校舎の前身となるクレメンティ校(派遣教員 9 名児童生徒 715 名)に移転し、体育館、プール、運動場、放送室ができた。1984 年にウエストコーストに中学部校舎(児童生徒 2026 名)ができ、小中学部が分離した。

1995 年にチャンギ校が開校し、小学部のうち 5・6 年生がチャンギキャンパスに移り、日本人学校は三校体制になった。1998 年に学区制を導入し、小学部が完全二校体制になった。現在は 3 校舎合わせて児童生徒 2,000 人を超え、世界の日本人学校の中でも最大規模を誇っており、２１世紀に生きる日本人として、「豊かな国際感覚をもち、世界

の人々とつながろうとする人材の育成」を掲げている。

3　特色ある教育実践

（1）　国際理解教育と現地校交流の推進

① アイデンティティーの育成…世界の言葉で

保護者は留学や海外出張経験が豊富で、両親のどちらかが外国籍をもつ児童(ダブル)も少なくはなく、４名のダブルの児童が学級に在籍していた。その良さを生かし、その児童に関連する国の言葉で朝や帰り、食事のあいさつを毎日行った。月曜日はベトナム、火曜日は韓国、水曜日はフランス、木曜日はアメリカ、金曜日は「世界のあいさつ一覧表」から自分で選択して、各国の言語に親しむ活動を行った。

日本人学校は特殊な環境ではあるが、実際は英語を流暢に話せるとは言えず、日本の学校と同じくほとんど日本語で学校生活を送っている。ダブルの児童は両親の 2 言語を話すことができるが、見た目や少数派のためか自尊感情が高くはなく、はじめはダブルであることを恥ずかしがっていた。しかしながら、それは誰しもが得ることのできない、素晴らしい一つの個性であると考える。そこで、その児童が中心となり、担当日に「あいさつリーダー」としてみんなの前に出るという、「世界のあいさつ」の取組みを行った。また、朝の会や音楽では、いろいろな国の歌やダンス、遊びにもチャレンジした。その結果、ダブルの児童も徐々に自信をもち始め、自分から両親の国の話題やあいさつ以外の言葉について話をするようになった。

同じ学級の児童も国内外の文化についてより一層関心をもつようになり、異文化を取り入れることが自然になり、ダブルの児童だけでなく一人ひとりのアイデンティティーを高めることができた。

② 現地小学校との異文化交流

1・2・3 年生がチーファー校と遊びや歌や授業、4・5 年生がヘンリーパーク校と交換ホームステイ、6 年生は修学旅行でバリ島の学校訪問を通して交流を行っている。外国人講師による英会話を週 3 回、英語での水泳と音楽を各週 1 回あるが、ほとんどの児童は日常会話には至っていない。国民性か、失敗を恐れたり恥ずかしがったりして、英会話に消極的な児童が多い。そこでしっかりと事前準備や練習を行い、経験を増やし、自信を高め交流に臨んでいる。

将来海外で活躍する可能性がある児童も多いため、表現や発信する力、司会や進行を通しリーダー性の育成にも役立っている。毎年互いの学校を訪問し合うので、低学年はジェスチャーを交えながら奮闘し、中学年や高学年は再会を楽しみながら充実した時間を過ごすことができている。

私は交流担当として各校の担当教諭と連絡を取り、ミーティングの設定を行っていた。そこで、各学年、プログラムや活動内容について毎年互いに工夫を凝らし、相手校の教諭と共に考え話し合っている。子どもたちができるだけ多く関り合え、より良い交流となるように試行錯誤している。

また、夏休みなどの長期休業を利用し、教員研修として互いの学校を訪問し合っている。そこでは各国の教育事情や学校の紹介、授業見学や料理、スポーツなどの異文化交流、意見交換も行っている。共に悩み考え一緒に活動することで両校の教員が親しくなり、理解し合おうと努力している。

これは、海外の学校教育について知るだけなく、話し合いや教員研修を行うことで子どもと類似した経験をすることができ、子どもの立場に立って感じ、考えられるため、日々の教育活動に生かすことができている。子どもも教員も、日本人学校だからこそできる貴重な経験と言える。

（2）　異文化を生かした学校行事の充実

クレメンティ校では、複合民族国家としてのシンガポールの良さを生かし、年間を通し異文化行事が多い。英会話や専科の外国人講師を中心に、10 月にはインドのヒンズー教の祭典ディパバリ、10 月末に全員家から仮装して登校するハロウィンパーティ、12 月のクリスマスパーティ、2 月の中国の旧正月のお祭りと多民族文化のチンゲイパレードへの参加など、異文化を楽しんでいる。その度に学校中飾りつけがされ、一つの国や学校に居ながらにして、様々な異文化体験ができる。

4　成果

多民族国家という特殊な環境の中で長期間勤務したことで、「豊かな国際感覚」について考える機会を多くもつことができた。言語、衣装、肌、宗教、感覚、思考など、個々にとって全てかけがえのないものであるからこそ、「地球人」として違いを認め合い、尊重していくことの大切さを痛感した。

また、個性やアイデンティティーを生かし、自尊感情を高めるよう日々努力し、自分の考えや思いについて自信をもって堂々と豊かに発信する現地校の児童との交流は学びが多く、今後の教育活動に大いに役立つと考える。パソコンやインターネットといった情報社会を生きるこれからの子どもたちにとって、海外は身近な存在である。この経験をぜひこれからの学校教育の現場で生かして行きたい。

杭州日本人学校帰国報告

杭州日本人学校　校長　宮田　正彦

＜日本人学校概要＞

１．学校名　　：杭州日本人学校
２．開校期日　：平成２０年（2008 年）４月１８日
３．開校地　　：浙江省杭州経済技術開発区徳勝東路３９５号
４．運営主体　：杭州日本人学校運営委員会
５．学校形態　：全日制日本人学校（ぱんだ組・小学部･中学部）
６．教職員組織：14 名　（校長、事務長、教諭９、幼稚園教諭２名、事務職員）
７．クラス編制：小学部６学級、中学部３学級　児童生徒数４６名（平成２９年２月現在）
　　幼稚部（ぱんだ組　４歳児・５歳児）　園児数１１名
８．校　舎　　：杭州市経済技術開発区管理委員会が建造する校舎や附属設備を賃借する。

＜本校の教育目標＞

『志高く夢を抱き､自らの力で　生き方を切り拓く児童生徒の育成』

＜校　訓＞

『切　磋　琢　磨』

＜3 つの約束＞

①　元気なあいさつ　　②「はい」と返事する　　③はきものをそろえる

＜教育課程＞

日本国内と同様の学習指導要領を実施している。

＜本校の特色＞

ネイティブの外国人講師による英会話の指導
全学年　週１時間　中国語の時間（中国人講師）
中国語会話か英会話の活動　１週間に１回 15 分間
中国語については、学生ボランティアがきている。

＜主な行事＞

・儀式的行事
　入学式、始業式、終業式、卒業式、修了式（小中学部合同実施）
・文化的行事
　学習発表会、百人一首大会、書き初め会
・健康安全・体育的行事
　定期健康診断（内科、眼科、耳鼻科、歯科、尿検査）、発育測定、避難訓練（年３回）、交通安全教室（１～３年）、運動会、水泳教室（大学プールを利用）
・遠足・集団宿泊的行事
　宿泊体験学習（３～５年　１泊２日　上海）
　修学旅行（６・８年　北京）
　歓迎遠足（全学年）､お別れ遠足（全学年）
・児童生徒会行事
　児童生徒集会、七夕集会、節分集会

＜園児・児童・生徒数＞

＜教育交流＞

開校以来、文海小学校と定期的に交流。運動会、授業交流。

浙江工商大学日本語科学生がボランティアで中国語会話、中国文化紹介などで交流。

＜杭州日本人学校の課題＞

① 日本語指導が必要な子どもが増加傾向にある。
② 大気汚染の影響で屋外での運動が制限され、体力不足である。
③ 毎年、転出入が多いため、児童生徒の確保が学校経営上の課題である。

＜まとめ＞

① シニア派遣校長として３年間小中学部で授業ができたことが貴重な体験である。
② 中国から日本を見つめることができる。
③ 毎日健康で仕事ができたのも、配偶者の支えがあったことに感謝している。

香港日本人学校大埔校に赴任して

西宮市立高木北小学校　塚本　与久

１　赴任地（香港）の様子

香港は，中華人民共和国にある特別行政区である。１９９８年に返還される前までは，イギリス領であったため，英国などヨーロッパから来た人をはじめとして，英語を話せる人が非常に多い。

２０４７年までは，一国二制度として，資本主義の制度も含めて，一定の自治が認められているため，中国本土とは「別の国」という様相が強い。例えば，香港と隣町の深センとは，列車で１時間程度の距離だが，国境もあり，そこを超えると別の国のように，空気も人々の様子も違う。自由貿易が認められている地域であるため，世界中の商品がここに集まり，貿易，金融，運輸関係の仕事をしている人が非常に多い。

そんな近代的で平和な香港だが，滞在中の大きな出来事として，民主化を求める運動があった。２０１４年９月に，香港の長である行政長官の選択を，香港人が主体となって行うべきだという意見を持つ学生たちが中心となって，大規模なデモが起こった。警察官が催涙ガスを投げつけ，それを黄色い雨傘で防ぐデモ隊との攻防は，「雨傘革命」の名のもとに，世界中にセンセーショナルに報道された。

郊外にある大埔校はその影響があまりなかったが，中心部にある香港校は数日休校になった。中国本土と香港の人々との考え方に違いがあることを象徴する事件だった。

そんな香港には，たくさんの日系企業が進出し，多くの子どもたちが学んでいる。

２　学校の様子

（１）概要

香港日本人学校には，小学部（香港校・大埔校）と中学部がある。私が赴任した大埔校は，香港の中でも比較的中国本土に近い郊外に位置している。

広い土地を確保することが難しい香港の事情で，運動場はとても狭い。そのため休み時間は子どもの遊び場として，運動場以外にも，体育館や屋上を開放している。

香港日本人学校大埔校の全児童数は，４５８人（平成２９年４月現在）。中には，第一言語が日本語以外の子どももおり，学校内ではあるが別組織として有料の日本語教室が開校されている。

また，同じ校舎内に，国際学級（International section=通称 IS）が併設されているのも，大きな特徴である。国際学級とは，インターナショナルスクールのことで，こちらは国際バカロレアに準じて教育を行っている。

（２）学校行事

大きな学校行事として，１学期に行われる「大縄大会」，２学期の「運動会」，３学期の学習発表会「ランタナ祭」がある。その他にも，校外学習や集会，縦割り班による「大埔だ班」活動などが，日本と同様に行われている。

先に述べたように，香港は広い土地を確保することが難しく，子どもたちは体を存分に動かせる機会が少ない。そんな事情もあってか，運動関係の行事は非常に盛り上がる。１学期におこなわれる「大縄大会」は，子どもたちも教師もすごい熱が入る（日本人が多く居住する地区の近くの公園では，その時期になると，みんなの遊びが大縄になることもあるそうだ）。

運動会は学校の運動場が狭いため，近くの体育学校のグランドを借りて行われる。保護者の方の参加率も非常に高く，こちらも非常に盛り上がる。

「ランタナ祭」についても，私立学校であるという性質上，学校を一般の方々にアピールする良い機会としてとらえられているようで，学習発表という学校行事としてだけでなく，日系の企業などが出店を開き，お祭りのような賑わいを見せる。

（３）特色を生かした教育

大埔校では英語教育に力を入れている。香港では，第一言語は広東語だが，先に述べたように英語もほぼ公用語として使われており，子どもたちにとっても，学んだことをすぐに活かせる環境にある。そういった事情もあってか，英語教育に非常に熱心な保護者が多い。

英語の時間は，全学年，毎日１時間ずつの週５時間（年間１７５時間）行われている。英語の授業は，専門のネイティブの先生が受け持ち，習熟度別に各学年４～６クラスに分かれる。通常の学習指導要領分の時間数を行った上で，英語も行うので，授業時数がとても多くなるが，余剰の時間も目一杯使って，８：２０～１５：３０までの授業を毎日行っている（多くの日本人学校がそうであるように，バス通学の都合上，低学年の子どもたちも，高学年の子どもたちと同じように，６時間目まで授業をしているのが少しだけしんどそうだった……）。

その他の特徴として，水泳と図工で日本人以外の専門スタッフによる指導が挙げられる。３年生以上の図工の授業は，外国人教師が英語で行うという「イマージョン」というかたちで行われている。また，学校の中に，香港としては珍しい室内型のプールがあることから，体育ではプール指導を年間を通して行っている。指導は，外部委託しており，専門のスタッフ（香港人の先生）が行う。こちらも，指導には英語が使われている。

（４）国際学級との交流

先に述べたように，大埔校には，国際学級（International section=通称 IS）が併設されている。イギリス，香港，カナダ，日本など様々な国籍の子どもたちが，通っている。同じ敷地内（５階建ての建物のうち１フロアがＩＳ）にあるが，ＩＳの方は国際バカロレアを元にして教育活動を行っているので，時間割もほとんどの学校行事も，そして職員室までもが別になっている。

しかし，同じ学校内に国際学級がある良さを生かして，ＩＳとの交流活動は盛んに行われている。例えば３年生では，図工の巨大作品を一緒に作ったり，交流ゲームをしたりしている。６年生になると，混合のグループ活動を行い，お互いを知るためにインタビューをしてまとめる活動を行ったり，IS の卒業式に参加したりしている。また，休み時間が重なっているため，サッカーや鬼ごっこなどで，子どもたちが自主的に一緒に遊んでいる姿も見られる。一方で，文化やルール，お互いの価値観の違いなどから，トラブルになることもしばしば見られるのが現状である。

（５）特別支援教育

最後に，特別支援教育について触れたい。日本の学校と同様に，特別な支援を必要とする子どもも見られる。また，大埔校には様々な環境の子どもが通っているため，中には日本語の習得が不十分で学習に遅れが出てきてしまう子どもも見られる。

私立学校であるという立場から，予算の公平性を考えた際に，特別支援学級を設置するということが非常に困難であるため，本校の特別支援教育は，通級指導で行われてる。通級指導では，「自立活動」を中心に，個に応じた指導を抜き出しで行っている。このあたりは，日本の発達障害通級指導教室の形式に近いものであると言える。現在１０人前後の児童が，週１～５時間程度の通級による個別指導を受けている。

３　終わりに

様々な環境の子どもが通う学校に，様々な地域から派遣された教職員。香港という土地もまた同様に，地域の中には様々な事情を抱えた人々が暮らしている。そんな中で暮らし，仕事をするためには，自分の持っている力を発揮すると同時に，周りにいる人たちと力を合わせていかなければならない。それは，学校の中だけでなく，香港での暮らしの中でもいろいろなところで，とても大きく感じたことだった。また，異国の地で，色々な地域から派遣された仲間と出会い，たくさんのすばらしい体験をさせていただけた。快く送り出してくださった兵庫県，西宮市の皆さんに心から感謝をして，ここで得た経験を活かし，日本での教育活動を行っていきたい。

エチオピアでみつけたアートの魅力

西宮市立上ケ原小学校　村上　敦子

１ エチオピア・アディスアベバの概要

エチオピアは、過去１０年連続で約１０％の経済成長を達成、２０１４年の経済成長率は、世界第１位を記録した。一方で、内政は安定しているとは言えず、２０１５年から２０１６年にかけて、反政府デモが頻発し、インターネットが遮断されることも少なくなかった。２０１６年１０月には、非常事態宣言が出され、状況は落ち着きつつある。また、エチオピアは、歴史上独立を維持し、植民地化されていないアフリカ唯一の国でもある。そのため、独自の文化が色濃く、愛国心が強い。

エチオピアの首都であるアディスアベバは、アムハラ語で「新しい花」を意味する。その名の通り、ここ数年で大豹変を遂げている。２０１５年には、電車が走り出し、インフラがものすごいスピードで計画・整備されている。一方で、貧富の差が拡大しているという現状もあり、物乞いをする老人や親子も街中にたくさんいる。

２ 赴任校の概要

マサラットエチオピア小学校は、首都アディスアベバの１０教区の内の一つであるキルコス地区に所在している。１～８年生の児童に対してアムハラ語、理数科、社会、図工、音楽、体育などの初等教育を行う公立小学校である。児童数は約７８０名で各学年２クラスずつである。管理職は校長と３名の教頭、教員数は４４名である。その他に事務職員、掃除婦、ガードを含め、４０名の職員が勤務している。

2 期制であり、２月に１週間のターム休み、７月中旬から約２か月の雨季休みがある。授業は全学年 1 日７コマである。１５分の行間休み、1 時間半の昼休みがある。教科担任制であるが、複数の教科を担当したり、自分の専門外の授業を受け持ったりしている先生もいる。

児童の家庭環境は、けして裕福ではない。鞄や文房具を持っていない児童やぼろぼろの制服を着ている児童も少なくない。

３ 特色ある教育実践

（１）要請内容…情操教育の質の向上

（２）赴任当初の状況

配属先では、アートに関して、特に課題が多かった。アートの授業に色はない。その理由として、管理職や教育機関の理解がないので予算がない。予算がないので、材料や道具がない。材料や道具がないので、ものづくりは宿題。教室では、理論や作り方を説明するみで、活動がおこなわれることは、ほぼなかった。さらに、給料が低いので教師のモチベーションが低い、大学で専門教育を受けた指導者がいない、一クラスの人数が５０人以上で学級経営の難しさも課題であった。ないない尽くしのアート授業。なんとかエチオピアの子どもたちにアートを楽しんでほしいという思いから、活動を始めた。

（３）実践

「現地教員が教室で活動を取り入れた授業ができる」ということをゴールとして、①ものの整備 ②授業提案 ③価値の共有の３本柱で活動を行った。

① ものの整備

ア　あるものさがし

まず、廃材や身近なものを利用して、アートの授業の実践を試みた。牛乳パックを縫い合わせてボールを作ったり、小麦粉と水を混ぜてのりをつくったり、石を砕いて絵の具を作ったりした。限

られたものの中でも教材開発にが可能なことがわかった反面、道具や絵の具がない中での授業に限界も感じた。

イ　「コーヒーアート」児童の作品販売

そこで、中央郵便局や JICA 事務所で児童の作品を販売した。コーヒーでエチオピアの少数民族をあしらったカードは、外国人の評判がよく、日本円で約２万円の利益があった。売り上げで、はさみや絵の具、クレパス、色鉛筆などを購入することができた。

② 授業提案

ア　メントワブ先生とティームティーチング

新任のメントワブ先生と、そろえた道具を用いて、アート授業の実践を行った。エチオピアの教員養成大学では、理論中心の授業が多く、ものづくりの経験がほとんどない。そこで、私がアイデアの提供と準備を行い、教室の中でものづくりにチャレンジした。道具の盗難やタイムマネジメント、考え方の違いなど多くの問題もあったが、２人で試行錯誤しながら③ものづくりの授業を実践した。

イ　教育事務所と共催の教員セミナー

エチオピアの小学校教育ボランティアの実践をより多くの先生たちに伝えるために、定期的に教員セミナーを開催した。はじめは、日本人ボランティアが中心となって行っていたが、徐々に現地教員や教育事務所の協力者が増えていった。教材のアイデアの共有のみならず、現地教員による研究授業を通して、情操教育の価値や学級経営の方法も共有することができた。

③ 価値の共有

活動のまとめとして、配属先で図工展を開催した。図工展には、たくさんの保護者と地域のこどもたち、近隣校の先生が来場した。上手な子の作品だけではなく、全員の作品を掲示するというのは、エチオピアでは新しい提案であった。子どもたちは、自分の作品が掲示されて自慢げにおうちの人に見せている姿も見られた。図工展を通して、管理職の理解も得ることができ、来年度の予算を準備してくれることになった。

４ 成果

まず、アートの魅力に気づくことができたことが私の中での大きな成果である。日本の教育の「あたりまえ」があたりまえではないことを知り、２つの国の教育を比較することで、今まで考えなかったことに考えを巡らす時間となった。なぜ教室でものづくりをするのか。国の発展にどんな影響があるのか。個性ってどうやって育つのか。なんて、きっとエチオピアに来なければ考えることはなかった。教室で、みんなで繋がりながらものづくりをすることの良さ、生活に直結する道具の使い方、「発信」することの価値、最後まで作り上げる根気強さや時間内に仕上げる計画性など、アート「で」子どもに伝えられることがたくさんあることを知った。さらに、作品が完成したときのエチオピアの子どもたちの飛び切りの笑顔で、アートの魅力に私自身が改めて気づかされた。

次に、自分自身について見つめる機会となった。人種、職業、年齢を越えて、人生の中で一番たくさんの人と関わり、語り合った２年間だったと思う。話をする中で、自分の生き方や働き方を見直すことができた。「家族や友だちを愛すること」「すきを仕事に」「協力してもらう術」、エチオピア人と２年間で出会った人たちにたくさんのことを教えていただいた。

この貴重なエチオピアでの２年間の「楽しかった」の中には、困難もあったし、苦労もあった。異国の地での私なりのチャレンジの積み重ねが自分の自信と成長に繋がったと思う。これから出会う子どもたちには、チャレンジすることの大切さを伝えていきたい。

深圳日本人学校に赴任して～心豊かでたくましい日本人の育成をめざして～

高砂市立荒井小学校　佐々木　国江

１ 赴任地（国）の概要

中華人民共和国の面積は９，５９６，９６０㎢(日本の２５．４倍)世界三番目で、広東省の面積は日本の約半分である。それが２１の市区に分かれているので、市といっても感覚としては日本の都道府県で、深圳の面積は 1,953 ㎢、大阪府の 1,894 ㎢とほぼ同程度である。

行政区２３省（台湾を含む）・５自治区・４直轄市・２特別行政区に分けられ、計３４の一級行政区が存在する。深圳市は 12 区に分かれ、その内、元経済特区は羅湖区、福田区、南山区、塩田区の四つで計 396 ㎢。その他に宝安区、龍崗区等の８つの区があり、面積は広大である。

中国の人口は世界一で、約１３億７千万人(2016)。現在も増え続けている。広東省は中国一で約１億人と言われている。そして深圳は約 1300 万人(2016)で、中国では上海・北京に次ぐ三番目の大都市である。元々の深圳市民は少なく、中国各地からの転入者がほとんどである。深圳市の在留邦人（日本人）は約５，５００人(2016)である。

深圳市の歴史は浅く、１９８０年に経済特区に指定された。それまで人口３万人の漁村から急激に発展を遂げ、現在もいたるところで工事がおこなわれており、経済的にも目覚ましい発展を遂げている。

深圳の気候は亜熱帯に属し、５月から１０月まで真夏のような暑さが続き、真冬でも日が照ると汗ばむ陽気である。おかげで年中、きれいな花が街中を彩り、おいしい南国のフルーツが食べられる。なかでもマンゴーや校歌の歌詞にも登場するライチが有名である。

２ 赴任校の概要

深圳日本人学校は２００８年４月にホテルの１、２階を改築して開校した。現時点（２０１７年）では世界で２番目に新しい日本人学校である。開校時、深圳にゆかりのある歌手の大黒摩季さんに校歌を作詞作曲していただき、開校イベントを行った。それから児童生徒の増加に伴い、２０１２年４月に旧校舎から移転。事務所ビルを改築した校舎で、現在は小学部約２３０名中学部約５０名の児童数である。街中にある校舎のため、グランドといっても人工芝をしきつめた狭いスペースで、体育館やプールの施設などもなく、運動会や水泳指導の時期になると近くの施設を借りて指導を行っている。

外国人が通える学校は日本人学校以外にインターナショナルスクールが３校ほど、韓国系の学校が１校ある。また日系の幼稚園が学校の近くに２校開園した。

３ 特色ある教育実践

経済発展著しい中国。その中でも，経済特別区として特異な発展を遂げてきた深圳市に所在している本校では、 「国際社会において　心身ともにたくましく生きる児童・生徒の育成」 を学校教育目標に掲げ、その具現化を目指しながら日々の教育活動に取り組んでいる。これは，『深圳速度』と呼ばれる目を見張るようなスピードで様々なものが変化し，エネルギーに満ち溢れているこの街に暮らす国際人の一人として，心身ともにたくましく生きていくことができる児童生徒の育成を目指すものである。特に力を入れた活動が以下である。

（１） 小中一貫教育が実施できることを生かした異学年活動の充実

縦割り活動として小学部１年生から中学部３年生までフレンズ班を構成し、フレンズ遠足、フレンズ清掃・フレンズランチ・フレンズスポーツ大会などを行い、異学年で協力する機会を設け、幅広い人間関係をつくっていこうという態度を養っている。

（２） 総合的な学習の時間・小学部の外国語の時間を構築

国際社会で通用するスキルを磨いていけるよう小学部１年生から外国語の授業時間を英語週２時間、中国語週１時間実施した。

（３） 現地校交流

小学部は現地の育才第三小学校と、中学部は深圳大学といろいろな交流活動を行った。日本文化を伝える折り紙や昔遊びを一緒に行ったり、現地の学校で中国文化の遊び（中国ごまや中国シャトル）などを一緒に行ったりする活動で交流を深めながら異文化に触れた。

（４） 芸術鑑賞会

PTA

の方々の協力を得て、毎年児童生徒に中国文化に触れてもらおうと、外部からさまざまな伝統芸能の団体を迎え行っている。中国雅楽や獅子舞、変面、二胡の演奏のときもあれば雑技団を招き、中国雑技のすごさに触れた年もある。

４ 成果（派遣教員として得たもの）

深圳日本人学校開校７年目から９年目という期間勤務した。まだまだ新しい学校でこれまでなかった朝学習の視写の統一や「深圳スタンダード」という学習規律の徹底、日本語能力の向上への取組を行ったことで本校の教育活動の基盤になれたかと思う。一人では取り組めなかったことも組織だって継続的に行うことで、児童生徒の学力の向上に少しは貢献できたと考えるが、日本人学校は教員の出入りが激しく取り組む内容もさらに検討できるものであろうと考える。学校教育目標を受けてこの３年間で自分なりに取り組んできたが、さらにどの教育現場に行こうともこの経験を生かし、児童の成長に貢献したいと考える。そのために研究と研修を積み重ね、今向き合っている児童のためにいろいろな取組を考え、実践していきたいと思う。最後に支えてくださった方々に感謝し、この貴重な経験を一人でも多くの児童に還元することで恩返しをしたい。

上海日本人学校浦東校に赴任して

太子町立太子東中学校　　西口　美希

１　赴任地の概観

上海は中国東海岸の中心部に位置し、中国最大の商工業都市である。上海市は，常住人口は2400万人を超えており，世界第６位を誇る。世界から人が集まる国際都市であり、2007年に在留邦人数がニューヨーク市を抜いて世界最大の５万6000人となっている。日本食のレストランやスーパーも数多くあり、街を歩いていても日本語を耳にする機会は多い。

２　赴任校の概要

上海日本人学校は、国交正常化の３年後、１９７５年に上海日本人学校補習学校として歩みを開始し、その後１９８７年に上海日本人学校として合計６１名の児童生徒数で虹橋校が開校した。浦東校は、虹橋校の児童数が増大し、受け入れ困難になったため、新しく上海の浦東地区に設置された上海第二の日本人学校である。２０１１年には、日本人学校の中で唯一の高等部が開校し、浦東校に併設している。上海日本人学校として昨年で３０周年を迎え、児童・生徒・職員が虹橋校に一堂に会し、記念式典が行われた。

浦東校は今年で１２年目を迎え、人工芝のグラウンド、屋内プール、２つの体育館、広い廊下、パソコン・プロジェクター完備、冷暖房完備、ゆったりとした図書館など設備が整っている。平成２８年４月現在小学部児童数は６７２名、中学部生徒数は４６６名、合計１１３８名の大規模校である。小中併せて４３クラスあり、教員は７１名、現地スタッフを含めると１００名近くになる。校訓は「独歩博愛」で、日中の架け橋となる子どもを育てようと上海ならではの教育活動を通して、国際性豊かな児童生徒の育成を目指している。

３　特色ある教育実践

（１）ネイティブ講師による英会話、中国語の授業

全学年で週に英会話１時間、中国語１時間、習熟度別に分けた少人数クラスで、授業を行っている。一般的な参観日とは別に、語学参観の日が設けられている。また、英会話の授業とは別に、中学部の英語の授業は、週に１時間ALTと英語科教員によるチームティーチングの授業が行われる。

（２）現地校交流会

現地理解教育の一環として、どの学年でも年に1回の現地校を訪問、もしくは現地校生徒が来校し、交流会を行っている。中国語での自己紹介や発表などの活動を通して、中国文化への理解を深めるとともに、日本の文化や遊びについて紹介を行い、現地校生徒との交流を深める。小学６年生では、漢詩の春暁を中国語で読み方を教えてもらい、学習発表会で発表した。また、ジェンズという羽根を蹴る遊びを体験したり、大縄をしたりと一緒に汗を流すことで、お互いの距離が縮まる様子が見られた。日本のアニメは上海でも人気で、その話題で盛り上がることができてうれしかったという生徒の感想

が聞かれた。なかなか日常生活の中で使う機会の少ない中国語を学ぶモチベーションにもなっている。

（３）日本語スピーチ大会

「将来、日中の架け橋になる子どもが育ってほしい」という願いを込めて毎年行われているスピーチ大会である。日本人学校の生徒は中国語で、上海市の現地校の生徒は日本語でスピーチを行う。互いの考えを知り、国際理解を深める機会であるとともに、日本語や中国語のスピーチを通じた語学力向上の機会として、日頃の語学学習の成果を発揮する場となっている。

（４）副読本「わたしたちの浦東」、「日中の架け橋となった人々」

どちらも上海日本人学校の教職員が、現地理解教育推進のために作成し、校内で使用している副読本である。「私たちの浦東」には、上海の交通や建物など生活に関することがまとめてあり、総合的な学習、地域学習の資料、ふるさと上海学習資料として使用している。「日中の架け橋となった人々」は中国と日本の架け橋となった偉人のエピソードが紹介されており、道徳の時間などに使用している。

４　成果（派遣教員として得たもの）

１つ目に、「ねらい」の重要性である。バスや保護者の送り迎えで一斉に登下校するため、生徒と関われる時間が限られている。また、小中高が同居し生徒数も多いため、施設は充実しているが自由に施設が使えないこともあった。そのため、行事やその他の教育活動を「何のために行うのか」ということを常に意識し、削る部分と必要な部分を考え、限られた時間の中でいかに生徒を動かし、ねらいを達成させるのかということを考えることができた。

２つ目に、１年目は小学６年生、２年目は中学１年生、３年目は中学２年生の担当をし、日本では経験できない持ち上がりをしたことで、成長段階が見え、小学校の先生方の苦労や思いを理解することができた。

３つ目に、国際社会で活躍する人を育てるということを、何度も考える機会があった。世界の共通語である英語を操ることだけでは不十分であると感じた。これからも私自身が世界を見る機会をもち、国際理解教育について考えて続けたい。

エネルギッシュな街で、エネルギッシュな人々との出会いがあり、毎日が刺激的な３年間だった。熱意ある全国の教職員と日々語り合い、様々なバックグラウンドをもつ生徒と共に学ぶことができたのは、大変貴重な経験であった。

大連日本人学校に赴任して

芦屋市立打出浜小学校
伏見　聖人

1　中国・大連市の概観

清の時代まで村であった大連。1898年にロシアの租借地となり，近代都市としての建設が始まる。日露戦争以降，ロシアに代わり日本が約40年間大連を統治。1945年に大連市政府が成立。改革開放後，1984年には中国でいち早く沿海開放都市に指定され，日系をはじめとする外資系企業が進出。

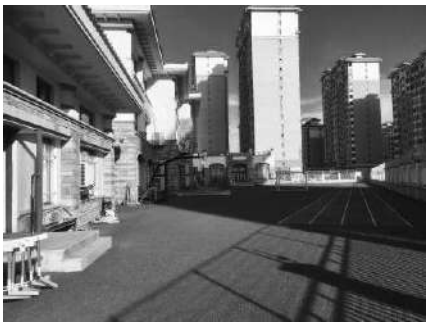
2003年の東北旧工業基地振興政策に伴い，国務院が大連を「1つのセンター，4つの基地」と位置づけた。中国東北地域の経済・工業の中心都市であり，東北地域最大の良港を持つ大連には，外資系企業の加工貿易拠点が集積しており，海外から多くの投資が導入されている（外資企業数は14477社以上※大連市概況より）。また，東北3省の在留邦人，日系企業の約8割（※瀋陽日本国総領事館より）が集まっている。大連に進出している日系企業は約4571社(※大連市対外貿易経済合作局発表より)。日系企業は大連市の産業の大きな部分を担っており，2014年の在大連企業の輸出額トップ50社のうち，22社を日系企業が占めるまでとなっている。

2018年の総人口は約594.3万人(※2015年3月領事館公表)。漢民族が全体の94%。その他，朝鮮族，満州族，回族，シボ族，モンゴル族など，55の少数民族が住んでいる。大連では，一般的に「普通語（北京語）」と呼ばれる標準語が話されているが，北京人から聞くと，若干の大連なまりがあるらしい。気候はモンスーン型温帯気候に属す。日本の仙台市とほぼ同じ緯度。1年を通し，雨が少なく乾燥している。夏は比較的涼しく過ごしやすい。冬は－10℃前後が続くが，雪は殆ど降らない。ただ，乾燥した強風が吹くため，体感温度ではさらに気温の低さを感じる。

現在の大連は，旧ロシア人街や旧日本人街など歴史を感じさせる建物と，アジア最大の広さの星海公園など近代的な建造物が立ち並ぶ近代都市になっている。“北の香港”とも呼ばれ治安も良い。2008年の北京オリンピックの開催に伴い，聖火リレーが行われ，車道等の整備が進んだ。また，2年に1度，世界経済フォーラムによる夏季ダボス会議が大連で開催され，国際都市として着実な進歩を続けている。

2　大連日本人学校の概要

大連日本人学校は，平成2年，補習授業校としてスタートし，平成6年4月に日本人学校として開校した。そして，平成25年には20周年を迎えた。平成27年度より経済技術開発区湾里南に移転。日系企業も多く進出する経済技術開発区は新しいマンションが次々に建築され都市化が進んでいる。大連日本人学校も，周囲をマンションに囲まれたエリアにある。3階建ての建物（元々は，現地幼稚園用に建てられた）に，学校用に手を加えて校舎としている。施設として，校庭（新校舎には体育館がない）・講堂・図書室・保健室・理科室・家庭科室・音楽室・ＰＣ教室等がある。各教室にはエアコンや空気清浄機，加湿器，ＴＶが設置。校庭は人工芝で，バスケットゴールやミニサッカーゴール，鉄棒，ブランコ等の遊具が整備されている。また，敷地内には幼稚園も併設されている。



移転前（平成26年度）の在籍児童生徒数は181名（小学部144名，中学部37名）。移転後（平成27年度）の在籍児童生徒数は136名（小学部116名，中学部20名）になり，転入数を除くと約80名近くの減数となった。

3　特色ある教育実践

(1)中国語

中国人講師を招き，各学年で能力別編成により個に応じた中国語の学習を実施している。日常会話から中国の文化にまで至る内容で，テキストを使用しながら，読み・書きの学習も行っている。

(2)英会話

ALTと英語教師による指導を各学年で実施している。学年に実態に応じて会話の内容も計画され，積極的に話すことを重視している。中国に暮らす児童生徒にとっても，国際社会の中で最有利と捉える英会話の充実を図ることが，国際社会に生きるために必要なものと捉えている。

(3)現地の日系企業訪問・職場体験

日本の企業が海外進出し，どのような理念で運営にあたっているのか，また，職場で働く人の思い，現地採用の人の思いを知ることで，協力・友好と関係が築かれていることを実感している。現地の人がいきいきと明るく働く姿からも，企業側の方針が利益追求だけでなく，人を活かすことを実践していることも学ぶことができる。

(4)現地校との交流

市内の小中学校との交流が十数年継続している。中国の小中学校のことを知り，理解していく。そして，そこに信頼関係を築くことを目的とした取り組みを行っている。日本の小学校高学年や中学生は，多角的な歴史認識は難しく，メディアの影響から歴史を捉えている場合がある。未来につながる関係を想定して，積極的に関わっていける機会である。現地校交流は，事後学習として，小学部では学習発表会，中学校では総合的な学習の発表会等でまとめを行っている。

4　成果

日本でも，将来を見据えて，国際社会における生き方の基盤を育もうと国際理解教育を実施している。在外教育施設ではさらに，国際理解・多文化共生について考えさせられる機会が多かった。生活をしている国や地域の伝統文化，日々の生活習慣におけるよさを，明確に表現できることが重要だとの考えに，今，至っている。

国際理解教育の推進をテーマの１つとして３年間を赴任した。実感したことは，個人が育った国や地域に愛情を持ち，やはり自国の文化についての知識体験をまずは持つということであった。それらを言語を通して，相手に誇りをもって伝えていくこと。また，相手の文化的発信を消極的寛容で聞き入れていくのではなく，積極的共生の価値観で受け入れていくことが大切だと感じている。

国際交流が益々盛んになる中，各国の生活習慣の違いが浮き彫りにもされている。中国で生活する児童生徒も，日本での生活習慣の違いを感じている。この点においても，それぞれの国の当たり前の習慣が，どのように育まれてきたかについて発信し合うチャンスであり，理解し合える大きな機会になると思っている。

各国の諸事情により，教育の目標もその国独自のものになる。政治的関係も大きく左右して，国民感情につながる。１つの事柄を双方の立場から冷静に見て理解していかないと，相手の批判で終始することになる。そうした認識の上で，国際理解教育を進めていかなければならないと，改めて感じる日々であった。加えて，中国の関わりにおける歴史についての学習，中国の人の思いを率直に聞く機会を設ける交流を進めていくことが今後大切なのではないかと考えている。段階を踏んで，表面的でない交流ができるようになれば，さらに国際理解が深まるのではと考えている。

「イスタンブル日本人学校に赴任して」

高砂市立荒井中学校　主幹教諭　横江和彦

１．イスタンブルの概要

イスタンブルは、ボスポラス海峡を挟んでアジア大陸とヨーロッパ大陸の二つの大陸にまたがる世界で唯一の都市である。四方をヨーロッパ、中東、ロシアに囲まれ、地政学的に重要な位置にあり、近年の経済発展はめざましい。

４時間以内でヨーロッパ各地、中東等の主要都市に行くことができ、多くの観光客でも賑わう大都市である。イスタンブルはトルコの首都ではないが、トルコ最大の都市で、人口は 1400 万人を超え、ビル群が乱立し、交通渋滞は慢性化している。また、トルコ経済及び文化の中心であり、トルコ企業やメディアの本社の多くがイスタンブルに集中している。

トルコに進出している日系企業の 90%近くがイスタンブル及び周辺地域に集中している。イスタンブル及び周辺の日系企業は約 220 社（トルコ経済省、2015 年 12 月時点）あり、主な企業としてトヨタ自動車、マツダ自動車、ＹＫＫ，ＩＨＩ等の大企業が進出している。その他、商社、金融、製造業、物流、サービス部門等幅広い分野の企業が進出し、中東、北アフリカ、東欧等の周辺地域をカバーする拠点企業も増加している。

２．イスタンブル日本人学校の概要

平成３年に、イスタンブル日本人会が設置者となり、日本人国籍を有する児童・生徒のために、日本国の教育基本法に則り、日本の公立小学校または中学校と同等の教育を行い、帰国時に日本の学校と円滑な接続を図ることを主たる目的とし、設立された学校である。平成２７年度初めに、近隣家屋での銃撃戦があり（マフィア同士の抗争）、平成２８年度夏に校舎は移転している。

また、イスラム国の問題や、エルドアン大統領の独裁的な政治に対するテロなどが増えてきているため、単身赴任でトルコに来る人が増えており、児童・生徒数は少しずつ減少している傾向である。

３．特色ある教育実践

（１）７時間授業

全校生が、スクールバスでの送迎であるため、授業開始時刻と授業終了時刻を合わせるために、小学校１年生から中学３年生まで、水曜日以外は全員が７時間授業である。小学校高学年からは、部活動の時間が設けられ、７時間目に運動をして体力の増進に励んでいる。低学年の児童は、読書や自主学習、またイスタンブルタイム（低学年同士での行事）を毎週行っている。

（２）ＩＣＴ教育の充実

学校には、全教室にパソコンとプロジェクターが設置されており、どの教科においても、ＩＣＴを活用した授業実践が行われている。また、ｉＰａｄがｓ３０台（約２学年分）あり、ｉＰａｄを使った調べ学習や教科研究が日々行われている。宿題においても、個人にクラウド学習の番号が振

り分けられており、大雨や大雪で突然の休校の場合でも、学校のパソコンから自主学習の宿題を出し、各自が家庭のパソコンを使って学習を進めることができるしくみが整っている。我々教師は、学校に居ながら、児童・生徒の宿題の進み具合や間違いか所をチェックすることができ、非常に便利である。

（３）日本の遊び集会、餅つき

例年、冬休み明けに餅つき大会が行われ、その日は現地のトルコ人の子どもたちも参加して、コマや羽子板、双六、けん玉、福笑いなどの日本の遊びを一緒に楽しんでいる。コマやけん玉については、普段から休み時間に遊べるように用意されており、低学年の子どもたちが休み時間になると熱心に競い合っている姿を毎日見ることができる。

（４）トルコ語と英語

各学期末に、低学年、中学年、高学年、中学部に英語の歌の課題が出され、４つのグループが発表会を行います。また、昼休みの時間には、トルコの童謡が放送で流され、トルコ語の歌も口ずさめるようになっていきます。

（５）体育教育

学校のグランドはテニスコート１面ほどしかないため、体育の時間は近くにあるグランドを借り、バスで移動して２時間続けての体育授業（週に２日）になります。水泳についても、現地校のプールを借りて、２時間続きの授業（年間６～８回）です。高学年以上は、これ以外に部活動の時間を週に３時間取っていますが、子どもたちは家へ帰ってからは危険を伴うために外遊びができないこともあり、登校後に縄跳びやジョギングの時間を学年ごとに設けています。

また、柔道着や剣道の道具も豊富にあるので、中学生は武道の授業もきっちりと行っています。

（６）現地校との交流

トルコの子どもの日に合わせて現地校の祝典に参加させていただいている。また、お互いに文化発表会への参加なども行い交流を深めている。高学年では、トルコの私立校での英語授業参加も行っている。

４．成果（派遣教員として得たもの）

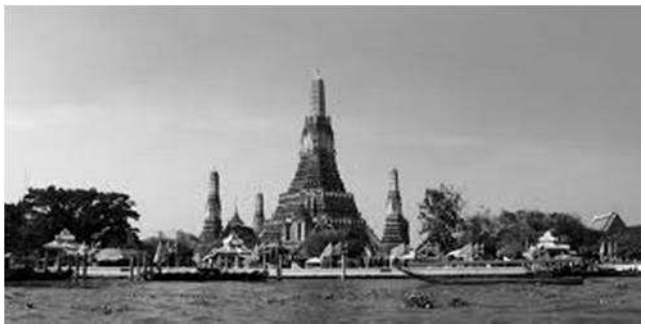
私の場合は、妻が大病を患ってしまい２年間での帰国となってしまったが、非常に得るものが多い２年間であった。一番に感じたのは、旅行しただけでは分からなかった文化の違いを実感でき、グローバルな社会の一員として活躍するためには、英語力を磨くことがとても大切であるという事である。小学校教育にも英語が導入されるが、コミュニケーションとしての英語力を身に付けることが、これからの教育においてとても重要であると実感しました。

また、他県の教師とは教育方法や教育観が違うところがあり、お互いに教育について語り合いながら、学ぶことが多かったです。親日家であるトルコの人々との多くの出会いも、自分の人生の中で大きな宝物になりました。

バンコク日本人学校に赴任して　～明るく、仲良く、たくましく～

西宮市立深津中学校　中澤　大樹

１　タイ王国（首都バンコク）の概要



タイ王国は東南アジアの中央部に位置し、熱帯気候に属する。モンスーンの影響を受けるため、雨季と乾季がはっきりと分かれている。文化は仏教の影響が強く、国民の大多数が敬虔な仏教徒である。国内のあらゆる場所にワット（寺院）があり、人々は日々祈りを捧げている。また王室は国民から敬愛されており、学校行事の開会の際には、「国王賛歌」が斉唱される。経済面では、自動車産業を中心とした製造業が盛んで、多くの日系企業が進出している。またプーケットやチェンマイといった観光地も多く、世界中から多くの観光客が訪れる。同国の首都バンコクは、政治経済の中心で、シンガポール、クアラルンプール、ジャカルタ等と並ぶ東南アジア有数の大都市である。在留邦人も多く（2017 年現在で約６万人）そのほとんどが、日系企業の駐在員、JICA、大使館等の政府関係者及びその家族等である。

２　バンコク日本人学校の概要

バンコク日本人学校（泰日協会学校）は 1926 年の盤谷日本尋常小学校を前身とする、世界で最も歴史のある在外教育施設である。泰日協会学校理事会が運営管理に責任・権限をもつ私立学校として位置づけられている。本年度は児童生徒数約 2700 名、教職員 220 名が在籍し、世界一の規模を誇る日本人学校である。

３　特色ある教育の実践（現地理解教育）

本校の国際理解教育は、海外というロケーションを活かし、現地校との交流学習会が定期的に行われているのが特色である。基本方針とねらいは以下の通りである。

- ・現地校との交流を通して、児童生徒の現地理解（文化、歴史、生活習慣等）を深める。
- ・外国語学習（英語・タイ語）の成果を実感できるような活動を設定する。
- ・現地校との事前ミーティングで情報交換を行うなかで教員同士の交流もはかる。

（１）　中学１年生のとりくみ

①アユタヤ校外学習

世界遺産でタイの古都でもあるアユタヤを訪れ、タイの歴史・文化について学ぶ。事前学習として、クラスの各班でアユタヤについて調べ、レポートにまとめる。さらに「タイ語」の時間に、タイ語の先生からタイの歴史の概要について講話を聞く。当日は、歴史博物館や遺跡を訪問する。

② チュラロンコン大学附属中学校との交流学習会

タイ国内で名門大学とされるチュラロンコン大学附属中学校と文化・スポーツ交流を行う。隔年でホスト校とゲスト校が入れ替わる。本校で行う場合は、日本文化の紹介（メンコ遊び、折り紙、けん玉）、スポーツ交流では二人三脚を行う。交流会の最後には「思いやりの花」を日本語とタイ語で全員で歌う。

③ ODA 校外学習

JICA とタイアップし、日本の政府開発援助（ODA）について学習する。最初に JICA の方に、ODA について講演を頂き、その後コース別（空港、地下鉄、港湾施設、浄水場、農業指導、障がい者施設）に分かれ、コース別に調べ学習を行う。その内容をふまえてフィールドワークで ODA 事業の現場を訪れ、現地の日本企業の担当者から説明を受ける。その成果をパワーポイントにまとめ、授業参観で発表する。

（３）中学２年生、３年生のとりくみ

中学２年生は、１年生に引き続き現地理解学習を行う。バンコク郊外のムアンボーラーン（古代遺跡公園）で泰日工業大学の大学生と班別でオリエンテーリングを行い、交流する。また職場体験学習で、日系企業（トヨタ、三菱電機、JAL、JTB、マックスバリュ等）の現場を体験し、タイ国における日系企業の活動を体験する。また修学旅行では、シンガポールを訪れ、シンガポールの歴史、文化、公共政策等について学ぶ。B&S システムを活用し、シンガポール人の大学生と共に、班別で観光スポット（マーライオンパーク、マリーナベイ、リトルインディア、チャイナタウン等）を巡る。また、水不足問題解消ための水濾過再処理施設を見学する。さらに平和学習として、第二次世界大戦中に、日本が同国を侵略し支配したこと。その過程で華僑を虐殺しこと。捕虜として泰緬鉄道の建設において強制労働させていたことについて知る。さらに歴史的観点から、広島・長崎・沖縄等とは違い、東南アジアにおいては、日本は「加害者」的な側面がある点についても学び、多様な立場から世界平和について考えさせる。中学３年生ではインターナショナルスクールを訪問、同校生徒と交流し、多様性のある教育課程や多文化共生について考える。また、在タイ日本国大使館を訪問し、外務省の方から在外公館の役割や邦人保護についての講話を聴く。

４ 成果

在外教育施設における教育活動（国際理解学習の指導や教員研修等）異文化のなかでの自身の海外生活を通して、グローバルな感覚や視点を身につけることができた。特にアジア太平洋地域において日本が果たしている役割を感じた。ODA をはじめとする援助活動は、対象国の発展を支えるだけでなく、対象国の人々の親日感情へとつながっている。今後は経済面だけでなく、教育面でもどのような援助ができるかを考えていきたい。また、大規模校におけるチームプレーの大切さも学んだ。組織が大きくなればなるほど、個人としての役割分担の明確化や均質性の維持が重要となってくる。これらの経験を日本の教育現場にも還元し、貢献できる教員になりたい。

ブラッセル日本人学校に赴任して

三木市立緑が丘中学校　八幡　良一

１　ベルギー王国の概観

ベルギーは，ドイツ，ルクセンブルグ，フランス，オランダ，北海を隔ててイギリスの５国と隣り合っている。これらの国々の首都は，すべてブリュッセルを中心として半径350kmほどの円の中に収まる。そのようなヨーロッパの十字路に位置する利便性から多くの戦乱の舞台になった歴史を持つ。今では，首都ブリュッセルはＥＵやＮＡＴＯの本部がある政治経済の中枢を司る国際都市だが，美食の都という別名があるほど食文化も盛んである。

九州よりやや小さい面積に日本の約１０分の１の人々が暮らしている。人種は様々で，それぞれの文化を尊重しながら穏やかに生活をしている。夏は特に過ごしやすい季節で，町中にある広大な緑あふれる公園には人が集まり，憩いの場となっている。

また，ベルギーは公用語として，仏語，蘭語，独語がある。国土のほぼ中央を東西に横切る言語境界線によって，北は蘭語，南は仏語を主に使用する。

２　ブラッセル日本人学校の概要

本校は，ベルギーの首都ブリュッセルの住宅街に位置し，２年後の2019年に創立40周年を迎える。児童生徒数は毎年300名前後でスタートし，１年間で約100名が転入し，ほぼ同数の転出がある。

海外で学ぶ地の利を活かして，小学部１，２年生は仏語，小学部３年生以上は英仏語選択で，会話学習を従来の授業時間に加え，週２時間から３時間行っている。ネイティブの講師による少人数での学習で，個に応じた授業を展開している。座学だけではなく，スポーツを取り入れたり，学校を出てインタビューや買い物をしたりと，工夫された活動を通して，子どもたちは楽しく体験学習を進めながら，語学力を高めている。

学校行事では，大きな教会での全校合唱祭，サンカントネール公園でのエスキスデー（写生会）など，ヨーロッパだからできる学校行事を積極的に進めている。小学部の修学旅行はオランダへ行く。観光だけではなく，デルフトタイルの絵付けや，ゴーダチーズ作りなどを体験する。また，中学部はドイツ・ベルリンへ行く。ベルリンの壁，メモリアルセンターなどを訪れ，平和について考える。また，ベルリンフィルハーモニーのバックヤードと演奏会で，本場の音楽を堪能する。

継続的に進める国際理解教育として，全学年が年間複数回，現地校やインターナショナルスクールと交流活動を行っている。外国語授業で学んだ表現を実際に使って意思疎通を図り，言語以外の方法でもコミュニケーションをとりながら，相手の文化や考え方を知り，それぞれの良さを理解していく。

また，各種施設を訪問し，そこでの人たちとの触れあいを通して，現地理解を深める。小学部では，農場見学，マルシェ見学，浄水場見学，消防署見学，チョコレート工場見学など，中学部では，芸術鑑賞として，楽器博物館見学や人形劇鑑賞などを行っている。

３　特色ある教育実践

海外で学ぶ児童生徒たちのために，多くの方が来校され，将来の指針となる講演や演奏会などを行

っていただいた。それに向けた計画・準備・当日の様子を抜粋してまとめてみた。

（１）要人訪問『安部総理夫人』

安倍総理夫人が来校された。訪問時間は４０分間だったが，それまでの準備期間は未知の領域ばかりで大変な作業だった。来校１か月前に，大使館より連絡が入り，総理夫人の来校を知った。職員・保護者等への連絡は，来校直前の官房長官発表まで伏せておくため，内々で計画を進めるよう依頼を受けた。領事，一等書記官，二等書記官，担当者の大使館サイドとの大使館での打合せ以外にも，欧州連合日本政府代表部，在ジュネーブ国際機関日本政府代表部とも入念な打合せを行った。当日の夫人は小２生の現地校交流の参観から，帰られるときまで終始笑顔で，子どもたちにも気さくに話しかけられ，子どもたちも大喜びだった。

（２）演奏『ミ・ベモル サクソフォンアンサンブル』

世界でも珍しい５種類のサクソフォンだけの楽団“ミ・ベモル サクソフォンアンサンブル”の演奏会があった。2014年ベルギーは，サクソフォンを発明したベルギー生まれのアドルフ・サックス生誕200年を記念したイベントが多く行うなか“ミ・ベモル”は欧州コンサートツアーを行い，演奏会の合間に来校し，生の演奏を披露してくれた。体育館に集まった全校生の前で，種類順に「ボレロ」を奏でながら入場がはじまり，曲の後半は２０名全てのサクソフォンが体育館中に響き渡る感動のオープニングから，種類別のサクソフォン演奏があり，児童たちにも馴染みのあるジブリメドレーがあり，サックスの伴奏で全校生が「もみじ」を歌うなど，児童生徒に合わせた演奏を聴かせてくれた。リハーサルでは，主宰の前田氏から団員たちに行進の足の運びまで指導が入り，妥協を許さないプロ魂を感じました。半年以上をかけて，主催者と連絡を取り合い，来校する１か月前には本校で最終打合せを行った。

（３）演奏『雅楽鑑賞会』

2007年には，ユネスコ無形文化遺産となった雅楽演奏団“北乃台雅楽アンサンブル”は，「日本ベルギー(日白)友好150周年」開会式典での演奏や，劇場での演奏会のために来白され，日本人学校にも訪問してくれた。私たちは，楽器のみの演奏“管絃”と，舞を伴う演奏“舞楽”を鑑賞する機会をいただいた。日本に居ても生で聴くことがなかった演奏を，ここベルギーで聴ける有難さを感じた鑑賞会となった。

（４）グランプラス『フラワーカーペット』制作ボランティア

世界遺産グランプラスに生花を敷き詰める２年に１度の祭典『フラワーカーペット』が８月中旬に行わる。2016年は日白友好150周年を記念し，日本の「花鳥風月」がテーマになり，縦75m横24mいっぱいに球根ベゴニアなど80万輪で，色鮮やかな大作を作り上げた。生花は下絵に合わせて色彩などを考慮しながら栽培され，現地の日本人学校に通う児童生徒10名を含むボランティア120名（うち日本人40名）が早朝５時から約６時間かけて敷き詰めた。作業を終えた児童生徒はどの子も手やズボンを汚しながらも誇らしげである。その後，いろんな国の取材班からのインタビューが待っていた。市庁舎ベランダから見る風景は，２年前とは比べ物にならない美しいものだった。

このように来校者が年に１０組は越える。児童生徒にとって海外だからこそ触れることや、日本に住む以上に日本文化を深く知ることは何事にも代え難い経験となった。

ブラッセル日本人学校に赴任して

神戸市立樫野台小学校　長谷川　静佳

１　赴任地の概要

ベルギーは、西ヨーロッパに位置する国で，隣国にはオランダ，ルクセンブルグ，フランス，ドイツ，海を挟んでイギリスがある。

緯度は北緯５０度と，北海道よりも高い位置にあるが、海洋性気候のため，比較的温暖となっている。

首都ブリュッセルは欧州連合（EU）の主要機関が多くあり，「EUの首都」と呼ばれている。公用語は３か国語あり、北部ではオランダ語，中部と南部ではフランス語，南東部ではドイツ語が使われている。

大国に挟まれたベルギーは，歴史の中で度々国土を奪われたが、１８３０年にネーデルラント連合から独立を宣言し，１８３１年に今のベルギー王国の形となった。建国２００年程の若い国である。

そんな中，ベルギーと日本のつながりは深く，日白友好１５０周年を昨年迎えた。ブリュッセルの至るところで行われる日本の催し物に、ベルギー人も好意的であった。

２　赴任校の概要

ブラッセル日本人学校は，ベルギーの首都ブリュッセル郊外にあり，今年度で創立３８年となる。小学部児童数２５８名，中学部生徒数３８名の２９６名の小中一貫校だ。小学部と中学部が共に活動する行事も多く，９学年が互いのことを意識しながら仲良く学校生活を送ってる。

土曜日には，同じ校舎を補習校が使うため，全日制の児童生徒は，金曜日には荷物をすべてロッカーに移し，互いに教室を気持ちよく使えるようにしている。

数年前より，ベルギーの情勢が悪くなっている。赴任当初は、テロの脅威度（レベル１～４）はレベル２だったが，近隣諸国でのテロを受けてレベルは３に引き上げられた。最高レベルのレベル４になったこともあり，その間学校は休校になった。特に一昨年の空港・地下鉄テロでは，多くの犠牲者を出した。そのあとレベルが３から引き下げられることはなく，学校には警備員が配置され，子どもたちの郊外活動の場所も身長に選びながら進めることとなっている。町中を大きな機関銃を持って軍隊の人が歩いている様子が日常となり，その姿を見ても驚かなくなっている住民や自分がいることを今更ながらに恐ろしいと感じている。

３　特色ある教育実践

（１）　外国語教育

ネイティブの教員から，英語かフランス語を学ぶことができる。小学部１，２年生はフランス語が必修となり，それ以上の学年はフランス語と英語を選択できる。選択できる学年では，８割の児童生徒が英語を選択し，２割の児童生徒がフランス語を選択している。

（２）　現地教材の活用

①　系統表

ブラッセル日本人学校では，９年間を見通した系統表を作成している。「生活」と「総合的な学習の時間」を使って，現地のことを知るための時間を確保している。子どもたちが日本に帰国した時に，ベルギーについて語れるようにすることは，日本人学校で育った子どもたちが，その地で過ごせたことに誇りをもてる機会になり，また日本という島国で暮らす子どもたちにも，世界を知る良いきっかけとなると考えている。

低学年では，ベルギーの昔話，中学年では学校の周りやブリュッセルの街，高学年では国に目を目を向け，中学部ではベルギーから世界に目を向けられるような構成となっている。

②　補習校連携

一昨年度より，同じ校舎を使っている補習校との連携授業が年に数回行われている。同じ教室を使いながらも普段は出会うことがなく，母国語が同じであるにも関わらず，全く違う文化の中

で生活している同世代の仲間。そんな仲間と触れ合うことで，それぞれの国の文化や，考え方について身近に考えられるのではないかと考えている。

③ 現地校との交流

現地校との交流が，年に２回行われる。昨年度の６年生は，レイモンド・ヴァンベル校との交流を行った。この学年の子どもたちは，レイモンド・ヴァンベル校と３年連続の交流ということもあり，お互いを知っている中で交流を進めることができた。現地校はフランス語での会話となるため，ほとんどの児童は会話ができないが，ジェスチャーを使って気持ちを伝える姿から，言語はコミュニケーションの一ツールであることを実感させられた。

コミュニケーションを取る手段はたくさん存在し，その中の一つが言葉であることに気づける，大切な機会がこの現地校交流であった。

④ 校外学習の充実

街頭インタビューに挑戦

ブラッセル日本人学校では，校外学習にも力を入れている。習った英語やフランス語を実際に使い，会話をすることで習熟を計り，目で見て肌で感じる体験型の学習を大切にすることで生き生きと自分らしく活動できるようにと考えている。

一昨年度の４年生は，グランプラスに行き，「自分たちのガイドブックを作る」という目標を立てて，グループごとにそれぞれ思い思いの店にインタビューをしに行った。保護者ボランティアにもグループごとについていただき，安全に配慮をしながらブリュッセルの中心部をグループ活動できた。

「インタビューをしよう。」と自分たちで決めたことにより，外国語学習にも主体的に取り組めた。インタビューをするにあたって，様々な問題が出てきたが，子どもたちはよく考え，自分たちで課題解決をしていった。

単元のまとめにはガイドブックを作り，ホール掲示をしてたくさんの保護者や来校者の方に見ていただいた。

⑤ 経験や体験を生かす活動

各国代表として
国をアピール

昨年度の６年生は，ヨーロッパの国々を調べた。子どもたちは休日にはたくさんの国を訪れている。せっかくの記帳な経験も､そのままにしておくと，日本に帰ったときに「〇〇に行ったことがある。」という事実しか残らない。そこで，行ったことのある国での経験や体験をもとに，それぞれの国のよさを探る単元を作った。

「総合的な学習の時間」だけでは単元を組むことは難しかったため，他教科の学習ともリンクさせて単元を構成していった。

単元のまとめでは，調べたことをもとに討論会を行ったり，クイズを作ったりして DVD に成果をまとめた。まとめた DVD はお世話になった方々や､理事長，大使にも渡し，視聴していただいた。

４ 成果

この３年間で多くのことを学んだ。新しいアイディアを生み出す喜びと不安。同じ日本人でありながら，県が違うことで文化が違う教員集団が歩調をそろえることの難しさと大切さなどである。しかし，日本人学校の中で起こったすべての喜びや不安，難しさは，大小関わらずどんなコミュニティでも起こり得ることだと気づいた。これから未来に向かって羽ばたく子どもたちのためにも，そういった喜びや不安，難しさを色々な場面で経験・体験できる機会を設けることこそが，教師に求められていることだと感じた。私たちは，子どもを次の学年にあげるために存在しているのではなく，社会に出る人を育てるために存在していることを改めて学ぶことができた３年間であった。

そのためにも，子どもの主体性を大切にした体験型の学習を通して，子どもたちにたくさんの課題設定と自己解決の力をつけていける教師になっていきたいと思う。

ジャカルタ日本人学校に赴任して

神戸市立長峰中学校　葛西　竜一

１　インドネシアの概要

インドネシア共和国、通称インドネシアは、東南アジア南部に位置する共和制国家。首都はジャワ島に位置するジャカルタ。5,110km と東西に非常に長く、また世界最多の島嶼を抱える国である。赤道にまたがる１万 3,466 もの大小の島により構成される。人口は２億 3,000 万人を超える世界第４位の規模であり、また世界最大のイスラム人口国としても知られる。島々によって構成されている国家であるため、その広大な領域に対して陸上の国境線で面しているのは、東ティモールのティモール島、マレーシアのカリマンタン島、パプアニューギニアのニューギニア島の３国だけである。海を隔てて近接している国は、パラオ、インド（アンダマン・ニコバル諸島）、フィリピン、シンガポール、オーストラリアである。

ASEAN の盟主とされ、ASEAN 本部が首都ジャカルタにある。そのため、2009 年以降、アメリカ、中国など 50 か国あまりの ASEAN 大使が、ジャカルタに常駐。日本も、2011 年（平成 23 年）5 月 26 日、ジャカルタに ASEAN 日本政府代表部を開設し、大使を常駐させている。

昨年の１月 14 日午前 10 時 40 分、ジャカルタで４名のインドネシア過激派自爆テロ犯による爆弾テロ事件が発生した。「イスラム国」（IS）が、犯行声明を発表した東南アジア初のテロ事件であった。そのためか日本から見ると、イスラム教の人口が多く、危険な地域と思われているが、実際に生活してみると、日本人に対して大変好意的であり、酷い渋滞を除いては住みやすい国の一つであろう。

２　赴任校の概要

ジャカルタ日本人学校は、日本から南に約 5000 ㎞の赤道直下の国、インドネシア共和国の首都ジャカルタの郊外にある。1996 年３月までは、ジャカルタ市内のパサールミングというところに学校があったが、校舎の老朽化と児童生徒数の増加に伴い、1996 年４月に、現在のビンタロ地区に移転をした。敷地面積 79,192 ㎡、３階建て校舎３棟、小学部・中学部ごとに運動場、体育館、プール、コンピューター室がそれぞれにある。また全教室・特別教室・中学部体育館に冷房が完備されていて、快適な学校生活を送っている。

学習内容は日本の小中学校と同じ教科の他、「英会話の時間」がある。小学部１年生から学習が始まり、小学部４年生以上は週２時間学習をしている。「総合的な学習の時間」や「生活科」では、インドネシアのことを理解するために自分たちで様々なことを調べたり、現地の学校と交流活動をしたりしている。また、熱帯にある学校なので、「水泳」は、年間を通して行うことができ、泳ぎの大好きな児童生徒がたくさんいる。

児童・生徒のほとんどは、約 70 台のスクールバスで通学している。ジャカルタは熱帯にあることや交通渋滞がひどいことから、朝早いうちに登校し、7 時 30 分から始まる朝の活動に備えている。給食はなく、全員がお弁当と水筒を持参している。また、朝早く家を出るため、お腹の空いた児童生徒のために、２時間目と３時間目の間の休み時間には中間食を食べてもよいことになっている。

校内にはカリヤワンさん（インドネシア人の学校用務員）が各教室の掃除、用具の管理、印刷物の印刷などの業務を担当してくれ、教員の仕事を手伝っている。児童・生徒も愛称であるカリヤワンさんと呼んでいる。

３　特色ある教育活動

（１）ジャカルタ日本人学校の行事の概要

ジャカルタ日本人学校には、体育祭、JJS フェスティバル、合唱コンクール、学習発表会、校外学習、遠足、宿泊学習、修学旅行など、たくさんの行事がある。特にジャカルタで生活をしているので、ジャカルタのことインドネシアのことを学ぶことを大切にしている。行事を通じて、インドネシアの児童生徒と交流することもそのひとつで、インドネシア語や文化を学ぶことができる。中学生が参加する、日本インドネシア友好親善スクールは、20 年以上の伝統をもつ行事である。その他、部活動の親善試合、ヘリテイジ（インドネシア理解）など、楽しい活動がたくさんある。

特に小中合同（総勢約１２００人）で開催する体育祭、ＪＪＳフェスティバルは２大行事として児童・生徒が生き生きと活動する行事である。

（２）中学生の３年間（平成２６年４月～平成２９年３月）

①中学１年生　４月：入学　５月：リド湖宿泊学習、中間考査　６月：**体育祭**
７月：期末考査　８月：夏休み
９月：**ＪＪＳフェスティバル（文化祭、合唱コンクール）**
１０月：中間考査　１１月：現地校交流、親子活動（スポーツ大会）
１２月：期末考査、<u>総合体育大会</u>
１月：冬休み、書き初め大会、<u>日本インドネシア友好親善スクール</u>
２月：ヘリテイジ（ワヤンなどインドネシア文化について）、学年末考査
３月：修了式

②中学２年生　４月：始業式　５月：中間考査　６月：**体育祭**、ヘリテイジ（バリについて）
７月：期末考査、現地校交流①　８月：夏休み
９月：**ＪＪＳフェスティバル（文化祭、合唱コンクール）**
１０月：中間考査、修学旅行（バリへ：３泊４日）
１１月：職場体験（２日間）、親子活動（インドネシア語カルタ大会）
１２月：期末考査、<u>総合体育大会</u>
１月：冬休み、書き初め大会、<u>日本インドネシア友好親善スクール</u>
２月：現地校交流②、学年末考査　３月：修了式

③中学３年生　４月：始業式　５月：中間考査　６月：**ＪＪＳフェスティバル（文化祭）**
７月：期末考査、<u>合唱コンクール</u>　８月：夏休み
９月：**体育祭**
１０月：現地校交流、中間考査、親子活動（立志式）、
ヘリテイジ（インドネシアの国の成り立ち、文化について）
校内入試スタート（土浦日大、明徳義塾など）
１１月：インドネシア国民議会訪問、学年末考査
１２月：<u>総合体育大会</u>、<u>３年生を送る会</u>
１月：冬休み、書き初め大会、<u>日本インドネシア友好親善スクール</u>
２月：学年スポーツ大会　３月：卒業式

＊太字：小中合同行事　<u>下線：中学校行事</u>

平成２８年度はラマダン（断食）の日が６月中旬であったため、体育祭を９月に実施し、ＪＪＳフェスティバルを分割開催になった（生徒の中にはラマダンを実施している生徒がいるため）

４　成果

赴任した時に中学１年生の担任を受け持ち、そのまま中学２年生の担任兼主任、中学３年生の担任兼主任を務め、同じ子ども達を卒業させることができた。しかし、中学１年生の４月に入学した生徒の６割は途中で転出している。その中で、保護者や子どもと上手に信頼関係を築きながら、感動する卒業式を行うことができた。また、初めて経験する学年行事、学年経営を無事にできたことは自分の自信にもつながった。インドネシアでしかできない経験ができたことが一番の成果であり、今後はこの経験から学んだことを日本の子どもの教育に還元していきたい。

モスクワ日本人学校に赴任して

西宮市立真砂中学校
山村　裕二

1　ロシアの概要

ユーラシア大陸北部の国で世界一の国土面積を誇るロシア。日本の約45倍である。2015年1月時点で，ロシアの人口は1億4千3百万人で世界第9位である。首都モスクワには1220万人が暮らしている。国土全体が北アジア全体および東ヨーロッパの大部分に広がるため，11の標準時を持つ。それだけ広いということが言えよう。ロシアの気候は北からツンドラ気候，寒帯気候，冷帯気候，温帯ステップ気候で，一般に寒冷で東に進むほど年較差の大きい大陸性の特色が強くなる。

政治的には2014年のウクライナ騒乱のあとに生じたクリミア危機の影響がある。アメリカ合衆国，欧州連合，そして日本政府などの諸外国はクリミアの独立とロシアへの編入は無効であるとし，ロシアとの間で対立が続いている。そんな中でも2014年に黒海沿岸のソチで冬季オリンピック（ソチオリンピック）が開催された。また2018年にはワールドカップ（2018 FIFAワールドカップ）が開催されることが決まっている。

2　モスクワ日本人学校の概要

モスクワ日本人学校は，ヨーロッパで最初にできた日本人学校である。1967年10月2日にあるアパートの2部屋から始まり，当時の全校児童数は16名だったそうだ。現在の場所に移ってきたのが1977年。2017年10月には50周年記念式典が開かれる予定である。現在は児童生徒数が約130名で多くがスクールバスと自家用車で通っている。モスクワ日本人学校の特色のひとつに，同じ建物の中に他の国の学校が入っていることがあげられる。1階はスウェーデン，2階はイタリア，3階はフィンランドの学校があり，日本人学校が4，5階を使用している。5階にある体育館と外の運動場は共同で使っている。

昨今の治安上の問題から，子どもたちの登下校はバスか，自家用車，タクシー，あるいは保護者の付き添いが必要である。放課後も限られた空間で遊べることはできるが，自由に出歩くことはない。ロシアで生活していても，日本人学校に通う子どもたちは，ロシア人と気楽に話したり，ロシアの生活文化に触れたりする機会はとても少ない。ロシアにいながら日本人に囲まれて生活をしている子どもが多いのが実情である。

しかしそんな中でも，モスクワ日本人学校では，少しでもロシアの文化に触れ，ロシア人との子どもたちとも関わりをもたせようと，現地校との交流を年に2回実施している。その他にも年1回の芸術鑑賞教室も行い，子どもたちが芸術性豊かなロシアならでは文化に直接触れる機会を設けている。また同じ建物の中にロシア以外の国も同居しているため，同居校との仲を深めるため，また異文化理解を推し進めるために，スポーツ交流や文化交流も不定期に実施している。

3　特色ある教育実践

（1）現地理解教育

①　小学部

「交流を通じて，お互いの国の文化・風俗・習慣などを理解し合い，交友を深める。」という目的のもと，ロシアの現地校（平成28年度は1449番校）と1年に2回交流を行っている。2学年ずつ（低・中・高学年）に分けて日にちをずらし，2回のうち1回は現地校を訪問し，もう1回は現地校を招いて，授業を受ける。平成28年度の交流内容は以下の通りである。

1回目（モス日が現地校を訪問）

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
1限目	手作り	数学	音楽	ビタミンの話	総合	日露伝統服
2限目	体育	英語	自然科学	英語	図画	ロシアティ伝統

2回目（現地校がモス日を訪問）

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
1限目	ものつくり	手裏剣つくり	豆まき	習字	家庭	家庭
2限目	体育	手裏剣つくり	そろばん	チェス	家庭	家庭

現地校を招くとき（年明けの1月が多い）は，日本の伝統的な行事や遊びを取り入れて，ロシア人の子どもたちに日本の文化を実際に体験してもらう授業を意図的に組んでいた。子どもたちは英語とロシア語，身ぶり手ぶりでコミュニケーションを図っていた。

② 中学部

平成 28 年度に実際に行った活動を紹介する。１回目は現地校を招いた。まずは全員が一堂にホールに会し，モスクワ日本人学校の中学部の生徒たちによる日本文化の紹介を行った。ロシア語の先生たちの力も借りてロシア語で日本文化や日本の風習などを紹介した。パワーポイントで写真が提示されたため，ロシア人の子どもたちも興味津々の様子で聞き入っていた。そのあとは，「折り紙」「書写」「伝統遊び（コマ・メンコ・紙風船・けん玉・竹とんぼ・お手玉)」の 3 つのブースに分かれ，日本文化を体験した。また，ロシア語で落語「まんじゅうこわい」を上演したり，ソーラン節を踊って見せたりした。日本語を学んでいるロシア人の子どもたちだったので，実際に日本文化に触れることができ，とても喜んでいた。来て頂いたお土産にダルマをあげた。

2 回目は現地校を訪れた。手作りのお菓子でおもてなしを受け，簡単な衣装を身につけてのロシア伝統舞踏体験，日本語による「大きなかぶ」の劇を披露，リズムに合わせて詩（歌）を一緒に歌う活動，ロシア料理であるブリヌイの調理実習など盛りだくさんの内容であった。2 回の交流とも 2 時間の時間を取ったが，もっと時間があればと感じるほど充実したものであった。

（２） 国際理解教育～同居校との交流を通して～

① スポーツ大会

スポーツを通して同居校との交流を図る目的で行われている。平成 25 年から 3 年間，小学部は毎年 10 月に 4 校合同で「アスチックデイ」を実施した。しかし，28 年度は天候不順のため実施できなかった。平成 27 年度は 60M走，走り幅跳び，ボール投げ，60Mハードル，学校対抗リレーを行った。中学部は，イタリアン校主催でサッカー大会を行った。ユニフォームをそろえて参加した学校（国）もあったり，各国の国旗を振って応援したり，それぞれの国の特色が出ていた。子どもたちもとても楽しそうだった。

② 聖ルシア祭

キリスト教の聖人聖ルシアの 聖名祝日を祝う行事で，12 月 13 日に行われ，スカンジナビア諸国と南欧が主の伝統行事である。同居校のスウェーデン校の招きで 12 月 13 日前後に，毎年小学部 6 年生が招待され，歌や演奏を聴く。白い服を着て天使の扮装をした子どもたちとの交流を通して，日本とは全く異なるクリスマスを体験することができた。

③ 国際理解教育～芸術鑑賞教室～

毎年 12 月に行われる。平成 28 年度はロシア舞踊団，ラーダンカの人達がモスクワ日本人学校を訪れた。民族衣装をまとって歌や踊り，合奏を 10 曲以上披露してくれ，子どもたちも実際に踊ったり歌ったりしてロシアの文化に触れる経験をした。

４ 成果

モスクワに赴任すると知ったときは，正直不安だった。しかしそんな不安も実際にモスクワ日本人学校に赴任し，子どもたちはもちろん職員や保護者など素晴らしい出会いに恵まれて，少しずつ消えていった。気候も含め生活面での不安も取り越し苦労だった。今ではモスクワに赴任することができて本当に良かったと思っている。

この 3 年間，ここで紹介した現地校との交流などをきっかけに，ロシア，モスクワの教育や文化に興味をもち直接触れることができたことは私にとって大きな収穫であった。そしてこのモスクワ日本人学校ならではの同居校との交流も，初めての経験が多く得るものが多かった。そこで聞いた話，実際に体験したことは私のものの見方を大きく変えるものだった。また外から日本を見ることによって，日本や日本文化のことを改めて考え直すことのできた 3 年間であった。

ロシア，モスクワのことを多く知り，同時に日本の素晴らしさを多く再発見したこの在外での経験は，これからの私の教員生活においても大きな影響を与えることは間違いない。ここで経験したことや，感じたことを伝えていき，目の前の子どもたちが少しでも何かを感じてくれたらと思う。

児童生徒にとって，ここモスクワでの現地理解教育や国際理解教育で学んだことが大きな財産の一つになるといえよう。今後もこの活動が継続され，ますます充実していくことを願ってやまない。

バルセロナ日本人学校に赴任して

バルセロナ日本人学校（川西市立明峰小学校）　小西　宏典

１　赴任地の概観

バルセロナは、地中海沿岸に位置する港湾都市で、フランスとの国境であるピレネー山脈の南に位置し、人口約１６０万人の都市である。

夏は乾燥し、冬は温暖で湿度のある地中海性気候であり、とても過ごしやすい気候である。また、雨も少ない。

１４世紀に建設された城塞を起源とする旧市街と、1859年の大拡張計画によって建設された碁盤の目のように正方形の街区が並ぶ新市街からなり、サグラダ・ファミリア教会、グエル邸、グエル公園など、アントニ・ガウディの残した建築物が多い。

１９９２年にはバルセロナオリンピックが開催された。

日本からスペインへの最初の公式使節である支倉常長率いる慶長遣欧使節団の派遣から４００周年を記念して２０１３年から２０１４年にかけて、「日本スペイン交流４００年」事業が行われた。

２　赴任校の概観

バルセロナ日本人学校は、１９８６年４月１日にバルセロナ日本文化財団により設立された。当初は小学部と中学部のみであったが、２０１１年に幼稚部を新規に設置した。バルセロナ中心部から10kmほど北のSant Cugat del Vallesに位置するため、バルセロナ市内に居住する児童生徒はスクールバスを利用して通学している。

「自ら学び、心豊かで、たくましい子どもの育成を図る」を教育目標とし、少人数学級を生かしたきめ細かい指導を行っている。スペイン語や英語を学習することで、その言語について理解するだけでなく、その国の生活や文化についても理解することをねらいとして、スペイン語活動（低学年は週２時間、高学年は週１時間）、英語活動（３年生以上で週１時間ずつ）の授業が現地採用教員により行われている。また、現地校との交流会や校外学習、宿泊・遠足的行事をはじめとした様々な場面で日頃の学習成果を生かして人間関係の構築をはかることもできる。

３　特色ある教育活動

（１）ヌリア自然教室（２０１４年６月）

バルセロナ日本人学校小学部高学年は、毎年、フランスとの国境近く、ピレネー山脈の麓にあるヌリア渓谷にて２泊３日の自然教室を行っている。活動内容は、カヌーやボート、乗馬、ハイキング、ロッククライミング、アーチェリーなどがあり、現地のモニトールさんに指導していただく。「大自然・マナー・協力・責任・スペイン語」をキーワードに、様々な活動を通して人に対するやさしさや、感謝の気持ち、高学年としての責任を再認識し、充実した自然教室にすることをねらいとしている。

事前学習として、一人ひとりがテーマを決めて調べ学習に取り組んだ。内容は、上記の現地での活動において注意することやうまくするコツ、ヌリアの歴史などであった。事前学習を通して、各活動における目標を意識しながら取り組むことができ、意義ある充実した活動につなげることができた。

当日は、様々な活動を通して、単にその活動を体験するだけでなく、モニトールさんとの会話をひろげ、スペイン語で会話をする機会をつくることもできた。子どもたちは、今回の宿泊学習を通してスペインの人々と話をするだけでなく、同じ時間を過ごし、同じ経験をともにすることで生まれる一体感を経験することができた。この一体感を味わうことこそが本当の意味でのコミュニケーションが構築できたことを示していると思う。

文化や生活様式がちがっても、何か一つでも共通の経験をすることで得ることができる一体感。日本で生まれ育ち、現在は日本人学校に通う子どもたちには、外国語を学習して実際に会話をしたり、ジェスチャーなどを使って自分の気持ちを伝えたりすることがお互いの理解につながることをもっとたくさんの場面で実感してほしいと思う。

（２）低学年：イシドロ校来校、訪問

バルセロナ日本人学校の低学年は、毎年、バルセロナ市近郊にあるイシドロ校の子どもたちとの交流を行っている。イシドロ校の子どもたちは、日本の祝日である「子どもの日」に合わせて来校するため、日本人学校の玄関先にこいのぼりを飾って迎えている。

この交流活動のねらいは、子どもたちの学年に応じて以下の４点としている。

①イシドロ校の子どもたちと親睦を深めることができる。

②すすんで会話をしたりいっしょに遊んだりする中で、お互いのよさを見つけようとすること　ができる。

③簡単なスペイン語を使って自己紹介をしたり、表情やしぐさから相手の思いを感じ取ったりすることができる。（３年生）

④簡単な挨拶やジェスチャーを交えながら、伝える・聞くといった伝え合う活動を楽しむことができる。（１・２年生）

創作活動（こいのぼりづくり）、スポーツ活動（障害物リレー）、音楽活動（ロンドン橋､ジャンケン列車）と３つのグループに分かれ、日本人学校の子どもたちが活動内容を企画し、当日の運営まで行う。教室前廊下には、写真付きの自己紹介カードを掲示し、グループと名前が分かるようにしておくことで、当日、誰にどんな事を話しかけようか考えるきっかけにもなっている。

また、軽食の時間を使って、スペイン語や英語、ジェスチャーによるコミュニケーション活動の時間を設けた。保護者のみなさんには、ボランティアとして軽食づくりのお世話をしていただいた。子どもたちは、改まって会話をするというような場面よりも、軽食を食べながらや、サッカーやあそびなどの体を動かす活動を通してより深く交流することができた。

秋のイシドロ校訪問では、５月の来校時と同様に、事前にイシドロ校の友だちの自己紹介カードを見ながら会話したいことや質問を考え、スペイン語で練習をした。５月にいっしょに活動をしたり、話をしたりした子の自己紹介カードを見つけて、「もう一度話をして友だちになる。」と前向きな気持ちで訪問しようとする子どもがたくさんいた。

当日は、事前に練習していたスペイン語を使うだけでなく、英語やジェスチャーを使ってコミュニケーションを図っていた。

昼食は、イシドロ校の給食をいただいた。日本人学校での週一回の給食とはちがい、学年ごとにランチルームへ行き、調理や盛り付け、食事指導も専門の担当者が行う。高学年の子どもたちは、飲用水のお世話をしてくれていた。食べ終わった子どもたちから部屋を出て外へ遊びに行くが、ここでも専門のモニトールさんが遊びを教えてくれたり、危険がないように見守ってくれたりしていた。スペインの学校では、昼食の時間が日本とちがっているため、午後の授業開始時刻が15時となっている。午前中の授業が終わる12時ごろから15時ごろまでの過ごし方は子どもによってちがい、（学校で給食を食べる、家に帰って昼食を食べる）一人ひとりの生活スタイルを大切にしている。

お別れ式の最後には、「かたつむり」の歌を日本語とスペイン語で歌い、イシドロ校の子どもたちは、楽しそうな表情で、手拍子をしながら聴いてくれていた。

４　成果

スペインの子どもたちはとても明るく、誰に対しても「オラ！」とにこやかに、とても明るい表情であいさつをしてくれる。日本人学校の子どもたちはどうだろうか？？

「たくさん友だちをつくりたい。」「今まで学習したスペイン語を話してみたい。」と、気持ちでは積極的なところがたくさんあるのだが、その気持ちを行動にうつすとなると、子どもたちにとって難しい課題となっている。言葉が通じることや、コミュニケーションが成り立つことの喜びを低学年の時から経験させ、「交流会が楽しい。」「もっとたくさんの友だちをつくりたい。」「スペイン語や英語を今よりもっと話せるようになりたい。」という気持ちを高めていくことが大切である。

今回の日本人学校での経験を活かし、子どもたちが様々な場面で、自信を持って自分を表現する力を育てていきたい。

ボストン補習授業校（ボストン日本語学校）に赴任して

シニア派遣校長　横山勝寿

１　赴任地の概観

歴史・文化・芸術そして学問の街ボストンは、ニューイングランド地方にあり、この地方最大の都市である。１８世紀の「ボストン茶会事件」やイギリスからの独立戦争の歴史が、石畳の路地を歩く「フリーダムトレイル」と呼ばれる道を進むと感じることができる。また、マサチューセッツ州と北海道、ボストン市と京都市は姉妹都市として交流している。そして、アメリカ最古の大学ハーバード大学や宇宙開発に貢献したマサチューセッツ工科大学（ＭＩＴ）など多くの大学や研究機関がある。音楽は、ボストン交響楽団、ボストン・ポップス・オーケストラが有名である。美術は、アメリカ３大美術館の１つであり、浮世絵の所蔵で知られるボストン美術館などがある。ボストンの自然は、四季を豊かに演出してくれる。

２ 赴任校の概要

本校は、ボストンの郊外メドフォード市にある。１９７５年６月に「ボストン日本語学校」として２５人の子ども達でスタートしたが、現在約８００人近い人数となり、学校創設からご尽力いただいた皆様のおかげで、多くの子ども達が学んでいる。本校は、幼稚部、小学部、中学部、高校部、日本語部に別れ、全部で４４学級あり、メドフォード高校の校舎を借用して毎週土曜日の午前中３時間のみ学校が開かれている。また、通学はボストン及びその近郊だけでなく、遠くはロードアイランド州、ニューハンプシャー州などから片道２時間以上かけて通う子ども達もいる。平日は、ほとんどの子どもたちが現地公立学校へ通っている。本校は、日本人の子どもたちの日本語を維持補強することを第１の目的として教育活動を実践している。

３　特色ある教育実践

近年のニーズに応えるために、国籍を問わず日本語や日本文化を勉強したい子ども達に、その機会を与えるための学級も併設したが、年々日本語部への入学希望者が増加している。最終目標として学級目標にあるように「国際社会で活躍できる日本人の育成」を目指している。教育活動として、国語を中心に基礎基本を習得するために教科書等を用いた授業

を実施している。また、国語に加え、算数（数学）、社会、総合学習、特別活動、日本語指導も取り入れている。そして、子ども達にとって土曜日だけは、日本の友達と思いっきり日本語で学び、遊び、ストレスを発散しながら日本人としてのアイデンティティを確認する大切な時間である。できる限り、日本の学校と同じ事を体験してもらうために、運動会、入学式、卒業式なども行っている。最後に、本校のすばらしいところは、保護者の皆様、PTA の役員、学校理事及び学校関係者の方々そして、現地採用教員が一丸となって「子ども達」のためにボランティア精神で取り組んでいることである。そんなボストン日本語学校を訪れてみてください。「初代校長：増渕興一氏(平成２８年４月１日永眠９１歳)、「日本と米国の架け橋となる人材育成」という先生の意志を継ぎ、取り組んでいる。」

４ 成果と課題

(１)成果として

①安全安心な学校生活　ア)アクセスコントロールの徹底、イ)ロックダウン・避難訓練の実施

②教職員の指導力向上　ア)主任手当制度の創設、イ)教員引継ぎ手当制度の創設

(２)課題として

教員との意思疎通をどう図っていくか。また、保護者の意識・関心を本校教育に向け、家庭のすべき役割をどう認識させていくかである。多様な環境、条件、背景を持った子ども・保護者が増える傾向にあるが、「帰国後、スムーズに日本の学校に入っていけるように、基幹教科の基礎基本を身につける」という軸を堅持してきた。補習校の門をくぐる以上努力が必要だが、子どもにとって日本語は「国語(駐在員子女)、母語(永住日本人子女)、継承語(国際結婚家庭子女)」の３通りである。この状況で授業をするには、教科指導(子どもの心をつかむ指導法)の力量が教員に要求される。日本語力不足の子どもには、向上策として教員と保護者が「家庭で具体的に継続すべき事柄を提示」して連携している。また、最大の課題は、教員の確保である。その対策として現在は保護者にも枠を広げ「入学願書に教員蘭」をつくり、対応している。

借用校外観（メドフォード高校）

パハン州特別支援教育センターでの活動

兵庫県立阪神昆陽特別支援学校　加藤佳恵

１　マレーシアの外観

(1) 東南アジアのマレー半島とボルネオ島に位置し、国境を接する国はブルネイ、インドネシア、タイ、シンガポールである。国土面積は日本とほぼ同じ、約 33 万㎢、人口は約 3100 万人である。主要産業は電気機器などの製造業、天然ゴムやパーム油採取の農林業および錫、原油、天然ガス採掘の鉱業などである。2014 年まではシンガポール、中国に続き重要な貿易国として日本との関係も深い。

日本から知ることのできるマレーシアはペトロナスツインタワーや雄大な自然など都市と自然が調和したイメージではあろう。国教はイスラム教ではあるものの、マレー系（人口比約６７％)、中国系（約２５％)、インド系（約７％）と少数民族が混在する多民族国家でもあり、宗教を強制しない寛容さがある。

途上国のイメージである「水が得られにくい」というものとはかけはなれた国でもあり、モノも水も豊富にあり、高速道路も多く見られる。携帯電話も高校生が持つなど、ハード面では特に首都クアラルンプルでは途上国という感じはない。政府の強力な指導が進められ急速に発展を遂げつつある国でもある。国際協力機構でもマレーシアは中進国と位置づけ、今後、南南協力のリーダーシップを担うことを期待される国でもある。

マハティール首相が提唱した「ルックイースト政策」をはじめとし、活発な文化・留学生交流に支えられ、二国間関係は全般的に良好である。2017 年は日本・マレーシア外交関係樹立 60 周年であり、5 月に皇太子がマレーシアを訪問された。

（２）マレーシアの教育環境

マレーシアの義務教育は 2003 年から始まり、7 歳になる年に入学し 6 年間とされている。その後、全国統一テストの結果により進級できる中高学校が決定され、6 年間の高等教育期間を学ぶ。再び全国統一テストが行われ、結果をもとに大学へとの進学とつながる。進学率は高い。

多民族国家であり、国語をマレー語、中国語、タミル語とするかは学校に準拠するがマレー語が必修教科と定められている。公立学校への入学要件はマレーシア国籍を有する者となっている。学校では多民族国家らしく、各宗教に関する祝日がナショナルホリデーとして設定されており、学期休みなども日本より頻繁に設定されている。

マレーシアは日本より早く 2006 年に障害者権利条約に批准したが、障害児者教育の義務制はまだ始まっていない。聴覚、視覚への教育は古くからおこなわれている。ここ数年は障害者への職業教育のための学校も作られている。特別支援学校は国内に数は少ないことから寄宿舎を持つ。

２　活動の概要

（１）　配属先について

パハン州特別支援教育センターは、マレーシア教育省直轄の教育支援センターである。各州に作られ、障害者の発達に指導助言を行なう。パハン州は半島マレーシア最大の面積を持つ州であり、配属地は州都クアンタン市に置かれている。この都市は、首都クアラルンプールから 300km 程度東に位置し、首都

との高速道路が敷設され、半島マレーシア東部の最大都市であり、国内でもイスラム色の強い地域ではあるが、中国系の外資により開発が進められている。

配属機関は、巡回訪問を担当する職員１名、センター内での活動を担当する職員１名で構成される。

（２） 活動の状況

派遣要請は数カ月ごとに学校を巡回し、特に美術・音楽など情操教育に関して障害に応じた教材の開発と授業の方法を紹介することである。また、可能ならば動作法を教員に向けて教えることである。移動の関係上、クアンタン市街地南部地域の巡回となった。

① 国立クアンタン特別支援学校特別支援学級（巡回期間６カ月）

全寮制聴覚支援学校（在籍約 60 名）であるものの、身辺介助の不要な近隣の知的障害生徒も受け入れている。聴覚支援学校に関する指導技術は高く、方法も多様である。知的障害児童に手話で教える場面が見られた。教材の提案を通して即効性を求められた。

② パンリマプラン中高学校特別支援学級（巡回期間３カ月）

中高学校（在籍約 1200 名）に併設する特別支援学級（約 80 名）である。上述の特別支援学校よりも、教室が手狭であった。巡回中は、教育実習生と言う位置づけであり、助言をすることは所属長の許可を必要とされるなど要請と活動実態の内容が乖離していると感じながらの活動であった。積極的に意見を採用する教員もいたことが活動の励みになった。12 歳以上の男子生徒は女性教員が触ることができないなど宗教上の理由、教材提案しても即効性がないという理由などで、歯がゆい思いもしながら活動期間が終わった。

③ チェンドラワシ小学校特別支援学級（巡回期間３カ月）

JICA と巡回前の手続き方法を変更したこともあり、ワークショップ、授業提案の機会を得られ、それをもとに教員と体育や音楽、美術の活動をする機会も得られた。これまでの学校よりも児童の障害種別が多様（在籍約 50 名）で、教員も指導方法を学びたいと言う意識もあったが、イスラム教の断食の季節とも重なり、日中の活動意欲の低下につながる時期での活動であった。

④ 国立クアンタン職業専門特別支援学校（巡回期間８カ月）

障害を持つ高校生に対する実践的な授業を行う国内４校のうちの特別支援学校（在籍約 200 名）であり、全寮制の学校として 2012 年に開校した。調理、伝統産業、農業、畜産等の専門コースを３年間で履修する。ワークショップ、授業提案、日本文化紹介などの機会を得られた。

３ 活動を通して得られたこと

マレーシアの特別支援教育の発展に寄与できたという達成感はない。短期間ではあるが、巡回中は現地の教員とともに考え、意見を交換できたことは私自身が関わる日本の特別支援教育についても考えられる機会となった。マレーシアや日本の生徒には、自分の国以外に目を向け、少しでも視野を広げて豊かに生きていけるきっかけになればいいと感じている。

フィジー　　マハトマ・ガンディー・メモリアル小学校に赴任して

播磨町立蓮池小学校　丸岡　ひとみ

１　赴任地の外観

フィジーは、オセアニアの国家であり、イギリス連邦の加盟国である。南太平洋に位置し、330 の島国から成っている。

1874 年、イギリスの植民地になり、1916 年まで砂糖のプランテーションのためインド人を労働者としてフィジーに移民させた歴史がある。そのため、今では、人口の割合は、フィジー人とフィジー系インド人がほぼ同じぐらいである。言語は、フィジー語、ヒンディー語と現地の言葉があるが、公用語は英語である。文化もそれぞれ違い、大変興味深い。近年では、リオオリンピック大会でフィジーの７Ｓラグビーチームが金メダルを獲得した。ラグビーがさかんな国である。気候は、年中高温多雨で、乾季と雨季がある。

２　赴任校の概要

マハトマ・ガンディー・メモリアル小学校は、ヒンディー系の学校であり、児童の８割はインド系フィジー人が通っている。小学校１年生から８年生、１クラス 50～55 人、各学年２クラス、全校生徒 880 人、フィジーの中でも規模が大きい学校である。

この学校は、フィジーの首都、スバにあり、フィジーの中でも所得の安定している家庭の児童が通っているようである。

３　特色ある教育実践

フィジーでは、全体的に見て、算数の力に課題があるとされている。原因として考えられることは、公用語である英語が理解できていないと、算数の理解が難しいという点、教師の授業は、教科書をただ教え込むだけという点、テスト重視であり、暗記型の授業であるという点、弱い児童に対してのフォローアップが少ない点、等だと思われる。私は、この学校における算数教育の向上のサポートを行った。

大きく分けて、３つのことを目標に活動を行った。

①基礎学力（基礎計算力）の支援

基礎計算力をアップさせるため、授業の始めには、５分間の基礎計算の時間としてチャレンジタイムを設けた。毎回、同じ計算問題に取り組ませたため、力がついていくのが目に見えてわかる。児童も意欲的に取り組めた。また、クラスを２つに分け、習熟度別で授業を行ったこともあった。

昼休みは、15 分間ほどなのだが、算数が苦手な児童やもっと力をつけたい児童が職員室に来て、個別の問題に取り組む場を設けた。これは、大変有効であり、算数に対して自信がない児童にとっては、自信がつく場所となった。

そして、特に力を入れたのが、九九を覚えることである。以前は、問題にかけ算がでてくると、児童は一生懸命絵を描いたり、指を使ったりしていた。まずは、九九を覚えよう！と担任とともに、声をかけた。先に述べた、基礎計算の時間を使ったり、一人ずつ教師が覚えた段をチェックしたりした。児童は、少しずつであるが、九九を覚えて問題に取り組めるようになっていった。

②算数授業への興味を持たせる支援

現地教員の授業は、教科書を読み、書き、その後、子どもたちは練習問題を解いたり、黒板を写したりする。そのため、算数授業に興味を持てずにいる児童が多いと感じた。

そこで、まず、実際の物を使って、計量してみたり、動かしたり、掲示物を見たり、と学習を進めていった。

また、日本の勤務校から『世界の笑顔プログラム』では算数セットを送ってもらい、一人ひとりが手を動かし、物を見て触って考えて…という授業を構成することができた。児童は、実感を伴って理解することができたと感じている。

③教員の指導力向上の支援

児童の算数の力を向上させるために、現地教員の指導力は必要不可欠だと感じた。授業前や後に授業についての話し合いをすることはもちろんだが、その他にも、教員向けのワークショップを行った。授業の仕方や日本から送ってもらった算数セットの使い方、チャレンジタイムの有効的なやり方等、私が帰国してからもできるだけ、教員ができるように…という考えのもと行っていった。

ワークショップ後、現地教員からは「日本はこういう授業をしてるから算数ができるんだ！」と言ってくれていた。ワークショップでやったことを早速、授業でやってくれる教員がいたのはうれしかった。

１年前は、授業中、児童に対して答えだけを聞いてた教員が、「なんでそう思うの？」と児童に理由を聞いたり、「想像してごらん、予想を言ってごらん！」「間違ってもいいから、恥ずかしがらずいっていいぞ！」「おしい！」そんな声かけができるようになっていったのも教員の成長だと感じた。

帰国前には、レベル別のプリント集や算数セットの使い方についてのプリントを現地教員と話し合い作成でき、今後も現地教員の役に立てばと思う。

④その他

算数の他にも、図工や体育等の支援に入ったり、日本文化紹介をしたりした。その授業も教員や児童は興味をもって取り運動会やおり染めも楽しむことができた。

日本の文化や東京オリンピックについても関心が高く、私にとっても大変やりがいがあった。

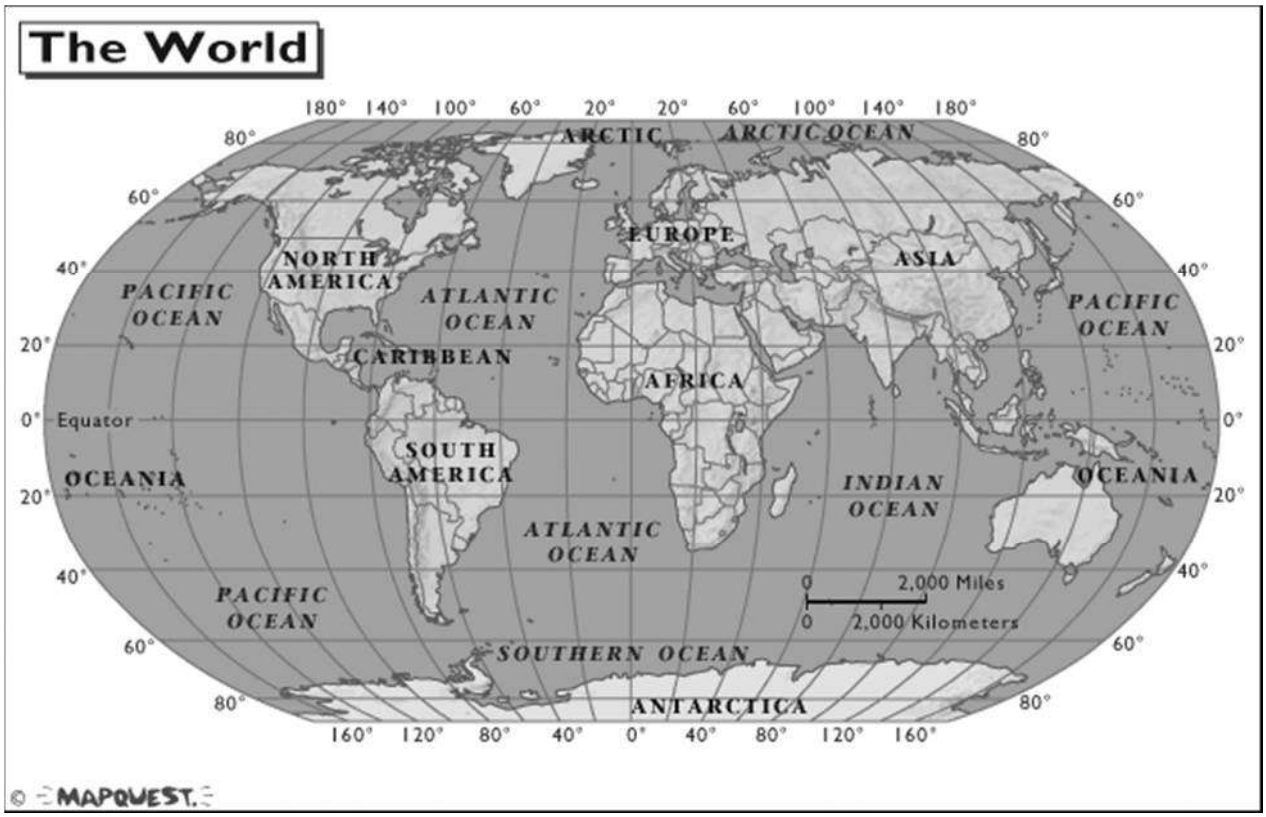
４　成果

活動については、色々あったが、終わってみれば１年９ヶ月あっという間だった。身体を壊さずに終われたことは、大変良かった。活動を通して、思っていることは言葉に出して伝える必要があることを学んだ。伝えることで信頼関係も生まれ、何か困った時や苦しい時にも声をかけてくれ、多くの場で助けてもらった。

また、日本でもフィジーでも教育ってやはり大切だと思った。教員は、これからの日本やフィジーを担っていく児童を育てている。児童と愛情いっぱい、しっかり向き合い、一緒に成長していければと思った。得たものは、数知れないが、人との出逢いが一番大きかった。多くの方とつながり、支えていただいた。それを糧に、今後もがんばっていこうと思う。

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会

≪活動状況≫



活　動　状　況　　目　次

平成 29 年度　兵庫県在外教育施設派遣教員一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・・54

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会組織　・・・・・・・・・・・・・・・・・・55

平成 28 年度　事業報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56

平成 28 年度　多文化共生・国際教育セミナー実施報告・・・・・・・・・・・・・・・57

平成 29 年度　事業計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58

平成 29 年度　多文化共生・国際教育セミナー計画書・・・・・・・・・・・・・・・・59

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会会則　・・・・・・・・・・・・・・・・・・60

兵海研　入会申込書 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62

2017(H29)年度　兵庫県在外教育施設派遣教員一覧

□■　本年度　帰国予定者　■□

本年帰国

派遣者	派遣国	学校名	派遣時国内所属	
葛西　竜一	ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ	ジャカルタ	神　戸	湊翔南中
園田　和弘	ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ	ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ(ｸﾚﾒ)	宝　塚	小浜小
野田　星奈	ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ	ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ(ｸﾚﾒ)	明　石	錦浦賞
中澤　大樹	タイ	バンコク	西　宮	深津中
奥谷　裕子	韓国	ソウル	神　戸	福池小
佐々木　国江	中国	深セン	高　砂	伊保南小
西口　美希	中国	上海(浦東)	たつの市	龍野西中
畠野　茂樹	中国	上海(浦東)	神　戸	シニア派遣
宮田　正彦	中国	杭州【長】	篠　山	シニア派遣
伏見　聖人	中国	大連	芦　屋	打出浜小
菅沼　翔吾	中国	香港(小)	尼　崎	園田小
升村　誠志	中国	香港(小)	川　西	清和台南小
塚本　与久	中国	香港(大埔)	西　宮	高木小
松下　千里	ベトナム	ハノイ	尼　崎	常陽中
大辻　智加子	マレーシア	ジョホール	稲　美	シニア派遣
堤　香織	台湾	台北	神　戸	竜が台中
阪口　要	ブラジル	マナウス	姫　路	香寺中
真次　秀一	メキシコ	ｱｸﾞｱｽｶﾘｴﾝﾃｽ	福　崎	福崎東中
小西　宏典	スペイン	バルセロナ	川　西	明峰小
豊田　悦子	ドイツ	ﾃﾞｭｯｾﾙﾄﾞﾙﾌ	加　東	鴨川小
二俣　明日香	ドイツ	ﾃﾞｭｯｾﾙﾄﾞﾙﾌ	神　戸	塩屋中
八幡　良一	ベルギー	ブラッセル【頭】	三　木	緑が丘中
長谷川　静佳	ベルギー	ブラッセル	神　戸	舞子小
山村　裕二	ロシア	モスクワ	西　宮	真砂中
横江　和彦	トルコ	イスタンブル	高　砂	高砂中
横山　勝寿	アメリカ	ボストン補【長】	宝　塚	シニア派遣
小林　恵子	アメリカ	ニューヨーク	姫　路	飾磨東中
照本　忠光	グアテマラ	グアテマラ【長】	姫　路	飾磨中部中

□■　本年度　新規派遣予定者　■□

派遣1年目

■ 2017(H29)年度派遣 ■(派遣時25名)

派遣者	派遣国	学校名	派遣時国内所属	
増田　恵津子	ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ	ジャカルタ	明石	高丘中
篠原　功二	ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ	ジャカルタ	川西	北稜小
中村　陽希	タイ	バンコク	加古川	加古川中
林　由加子	タイ	バンコク		
西村　一将	中国	天津	加古川	別府西小
河野　真也	中国	広州	南あわじ	三原中
吉田　茉由	中国	深圳		
山本　佳奈	中国	上海(虹橋)	宝塚	丸橋小
加耒　亮平	中国	上海(浦東)	西宮	甲子園中
長江　麻里子	中国	蘇州	播磨	蓮池小
大西　一人	中国	杭州【長】	神戸	
﨑田　真宏	中国	大連	篠山	八上小
槇本　龍	ﾌｨﾘﾋﾟﾝ	マニラ	神戸	上野中
齊藤　真実	ベトナム	ホーチミン		
白根　佐知子	アメリカ	シカゴ	明石	鳥羽小
久保田　信	ｱﾙｾﾞﾝﾁﾝ	ﾌﾞｴﾉｽ･ｱｲﾚｽ	丹波	柏原中
岸本　紗矢子	ｱﾙｾﾞﾝﾁﾝ	ﾌﾞｴﾉｽ･ｱｲﾚｽ		
小野寺　裕美	ブラジル	マナウス	明石	山手小
北野　貴誠	イタリア	ミラノ日本人学校	尼崎	大成中
菅原　庸介	ドイツ	ﾃﾞｭｯｾﾙﾄﾞﾙﾌ	伊丹	天神川小
西尾　由紀子	ドイツ	ﾃﾞｭｯｾﾙﾄﾞﾙﾌ	加古川	綾南中
蔭地野　左智	ドイツ	ミュンヘン		
古川　英治	ベルギー	ブラッセル【頭】		
竹山　森汰郎	ｻｳｼﾞｱﾗﾋﾞｱ	ジェッダ	相生	双葉小
仲　順也	カナダ	トロント補【長】	伊丹	シニア派遣

□■　ただいま奮闘中　■□

派遣3年目

■ 2015(H27)年度派遣 ■(派遣時22名)

派遣者	派遣国	学校名	派遣時国内所属	
高木　智子	ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ	ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ(小)	加古川	野口南小
西　康滋	タイ	バンコク	神　戸	北神戸中
神脇　貴子	中国	深セン	姫　路	家島小
佐々　順子	中国	上海(浦東)	神　戸	有野小
金谷　亜姫	ベトナム	ハノイ	神　戸	西神中
兼山　三吾	ベトナム	ハノイ	神　戸	シニア派遣
三輪　信之	台湾	台中	神　崎	神河中
藤中　寛子	カンボジア	プノンペン	芦　屋	岩園小
有冨　謙悟	アメリカ	ニューヨーク	伊　丹	伊丹小
河田　武志	オランダ	ロッテルダム	明　石	江井島中
吉永　真由美	ドイツ	ミュンヘン	西　宮	脇浜中
村上　貴士	フランス	パリ	神　戸	井吹の丘小
松田　賢	ロシア	モスクワ	尼　崎	武庫中
福本　俊也	UAE	ドバイ	小　野	小野中
上坂　浩一	ｻｳｼﾞｱﾗﾋﾞｱ	リヤド	姫　路	神南中
細見　隆昭	トルコ	イスタンブル	丹　波	新井小
梅田　博之	バーレーン	バハレーン	西　宮	脇浜小
伊井　直明	アメリカ	ローリー補【長】	香美町	シニア派遣
今崎　充康	アメリカ	テネシー補【長】	川　西	川西小
大西　正展	ｱｲﾙﾗﾝﾄﾞ	ダブリン補【長】	神　戸	シニア派遣

□■　ただいま奮闘中　■□

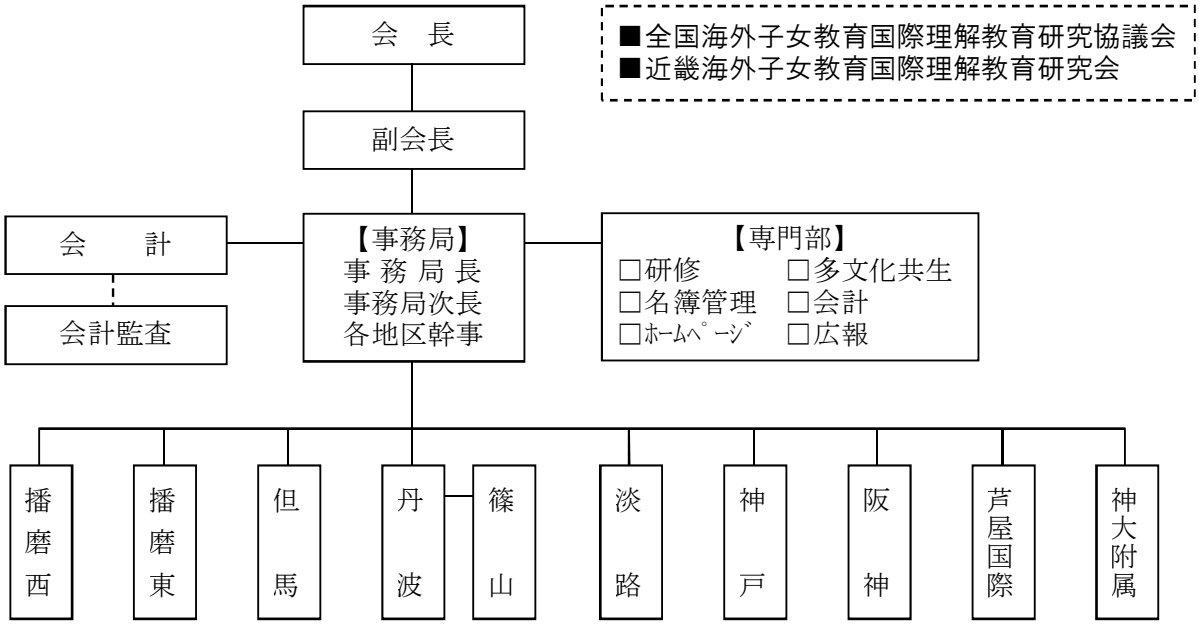
派遣2年目

■ 2016(H28)年度派遣 ■(派遣時22名)

派遣者	派遣国	学校名	派遣時国内所属	
耳田　由美子	ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ	ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ(ﾁｬﾝｷﾞ)	赤　穂	尾崎小
藤谷　奈穂	ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ	ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ(中)	神　戸	雲中小
加賀　悠土	タイ	バンコク	明　石	清水小
森安　祥平	タイ	バンコク	多　可	八千代小
肥後　綾子	中国	香港(中)	西　宮	上甲子園中
飯塚　恵子	ベトナム	ハノイ	川　西	緑台中
田中　良枝	マレーシア	ペナン	姫　路	菅野中
渡辺　裕史	台湾	台北	神　戸	玉津中
矢野　博之	コスタリカ	サン・ホセ	西　宮	段上小
樹下　幸代	コロンビア	ボゴタ	播　磨	播磨中
丸岡　慶子	チリ	サン・チャゴ	神　戸	長田南小
永田　博己	メキシコ	メキシコ【長】	姫　路	シニア派遣
水井　廉雄	イタリア	ローマ【長】	篠　山	シニア派遣
中田　公平	オランダ	アムステルダム	宝　塚	宝塚第一小
前田　隆吾	スイス	チューリッヒ	三　木	上吉川小
村山　次郎	スペイン	マドリッド	丹　波	芦田小
黒田　智広	チェコ	プラハ	神　戸	魚崎小
里田　健郎	ルーマニア	ブカレスト	川　西	清和台小
織田　真弘	イラン	テヘラン	姫　路	夢前中
稲中　伸彦	ケニア	ナイロビ	宝　塚	宝塚中
祢津　明信	アメリカ	ﾆｭｰｼﾞｬｰｼﾞｰ【頭】	神　戸	有馬中
中野　龍文	アメリカ	シアトル補【長】	篠　山	西紀南小

平成 29 年度

兵庫県海外子女教育･国際理解教育研究会組織



会　長	足立　浩	事務局長	中井　治嗣
副会長	大月　祐三(研修)	事務局次長	原田　英聖(組織･渉外)
	小畑　幸一(組織)		小池　宏尚(渉外)
	高木　浩志(研修)		田中　秀滋(研修)
	八幡　良一(帰国報告会)		島多　峰史(研修)
	松本　肇仁(帰国報告会)		杉本　裕司(研修)
	八幡　良一		小嶋　拓也(研修)
会　計	二谷　洋平		徳野　雅信(研修)
研　修	小嶋　拓也(セミナー)		二谷　洋平(組織)
	小谷　仙嘉(帰国報告会)		松田　一樹(組織)
	杉浦　浩（セミナー）		矢野　越史(組織)
	田中　秀滋(セミナー)	名簿管理	小池　宏尚
	中井　治嗣(セミナー)		原田　英聖
多文化共生（教育相談）	貞松　千佳子	ホームページ	榎戸　二郎
	島多　峰史		小池　宏尚
監事	司波　伸作、宮田　正彦	広　報	浅田　智之
			西田　隆之

地 区 幹 事			
神　戸	徳野　雅信、榎戸　二郎	播磨西	小谷　仙嘉
阪　神	原口　正義、岡坂　隆志、山村裕二	播磨東	水田　良
丹　波	梅垣　泰三、伊藤　憲司	但　馬	中沢　泰明、大月　祐三
篠　山	小嶋　拓也、浅田　智之、中野　純也	淡　路	美濃　正明、立田　和弘
芦屋国際中等	貞松　千佳子	神大附属小中	福島　麻衣

顧　問	谷口　哲、　生野　康一、　橋本　力、　茶谷　紀元、　青木　芳信 横田　政美、　西田　富男、　水岡　俊一、　串光　宏治、　森本　孝 桝田　邦夫、　丸山　一則、　中馬　義治、　宮田　正彦、　照本　忠光		
海外幹事	兼山　三吾、　永田　博己、　藤本　孝仁、　水井　廉雄		
全海研顧問	生野　康一	全海研副会長	高木　浩志
全海研事務局次長	原田　英聖	全海研研修担	事務局長

平成２８年度　事業報告

１　活動方針

『21 世紀の多文化共生に向けて』　～派遣経験をいかに活かすか～

❶帰国教員の海外経験を活かした帰国子女･国際理解教育の推進
　・派遣志望者、シニアへの研修活動
　・多文化共生・国際教育セミナーの実施
❷一般教員・保護者への外国人・海外子女･国際理解教育の啓発
❸兵海研活動の活性化
　・帰国教員の組織化（組織のネットワーク化、新体制への移行
　・各地区組織の立ち上げ支援、研修会・交流会の実施
❹全海研全国大会・近畿ブロック大会の開催

２　事業計画

（１）**総会・歓迎会**　5 /7(土)

（２）**帰国報告会**　6/11(土)

（３）**多文化共生・国際教育セミナー**（派遣志望者研修会）

第１回	5/ 7(土)	『海外子女教育の概論』	(場所:県民会館)
第２回	6/11(土)	【帰国報告会】	(場所:JICA 関西)
第３回	8/5(金)～7(日)	【全国大会/近畿ブロック大会】	(場所:JICA 関西)
第４回	12/17(土)	『在外教育事情緊急報告』	(場所: 神戸市教育会館)
第５回	2/18(土)	『保護者の目・派遣 OB を交えて』	(場所:県立のじぎく会館)

その他、各地区の研修会

（４）**派遣教員激励会**

（５）**各地区研修会・実践交流会**…各地区の特色を生かして　「国際理解教育研修会」

（６）**帰国教員の名簿管理、及び兵海研会員名簿の作成**
　会費納入者名簿を作成して会費納入の呼びかけを行う。
　会費納入者、研修参加者を中心に情報提供を行う。

（７）**広報・編集**
　①ホームページの更新、充実　(アドレス http://hyokai.sakura.ne.jp/htdocs/　)
　②海外から実践報告、兵海研諸活動は、今後ＨＰ上で（またはデジタル化）発信

（８）**全海研近畿ブロックとの連携**

（９）**全海研本部との連携**　全国大会（兵庫:JICA 関西）　8/5(金)～7(日)

(10) **その他の活動**
・兵海研組織、諸活動の活性化と組織の引き継ぎ、再編成
・派遣教員への情報提供と教材支援
・在外教育施設教育事情視察

(11) **関係諸団体との連携**
・兵庫県教育委員会（子ども多文化共生センター、芦屋国際中等教育学校）
・各市町教育委員会　・兵庫県教職員組合（兵庫教育文化研究所）
・兵庫県国際交流協会、JICA 関西　・（財）海外子女教育財団関西分室
・帰国子女教育を考える会　・帰国子女親の会「かけはし」　・兵庫 OV 教員研究会

平成２８年度　多文化共生・国際教育セミナー報告

下記の表のように５回の研修会を実施いたしました。

	日時・場所	主な研修内容（講師：敬称略）
第１回	５月７日（土） １０：００～１２：００ 兵庫県民会館１２０２号室 （神戸市中央区下山手通４丁目 16-3）	「海外子女教育の概論と派遣希望者説明会」 講師：　丸山　一則 （豊岡市立八代小学校　校長）
第２回	６月１１日（土） １０：００～１７：００ ＪＩＣＡ関西 （神戸市中央区脇浜海岸通１－５－２）	帰国報告会 ２０１５年度末 帰国教員による活動報告 青年海外協力隊員による活動報告　他
第３回	８月５日(金)～７日(日) ＪＩＣＡ関西 （神戸市中央区脇浜海岸通１－５－２）	第４３回全海研全国大会(兵庫大会) 第２７回近畿ブロック国際理解教育研究会 兵庫大会 国際理解教育　現地理解教育　多文化共生教育
第４回	１２月１７日(土) 神戸市教育会館 １３：００～１６：００ （神戸市中央区中山手通 4-10-5）	一時帰国報告 ①「在外教育事情緊急報告」 ②講演「人生チャレンジ～異文化からのメッセージ～」 講師：照本忠光（グァテマラ日本人学校　校長）
第５回	２月１８日（土） １０：００～１２：００ 県立のじぎく会館 （神戸市中央区山本通 4-22-15）	「保護者の目・派遣 OB を交えて」 講師：派遣教員配偶者 「世界地域（エリア）別情報交換会」 ～同エリアの派遣教員ＯＢを交えて～ 講師：兵海研会員（元在外教育施設派遣教員）

平成２９年度　事業計画

１　活動方針

『21 世紀の多文化共生に向けて』　～派遣経験をいかに活かすか～

❶帰国教員の海外経験を活かした帰国子女･国際理解教育の推進
　・派遣志望者、シニアへの研修活動
　・多文化共生・国際教育セミナーの実施
❷一般教員・保護者への外国人・海外子女･国際理解教育の啓発
❸兵海研活動の活性化
　・帰国教員の組織化（組織のネットワーク化、新体制への移行
　・各地区組織の立ち上げ支援、研修会・交流会の実施
❹全海研全国大会(長野大会)への参加
❺近畿ブロック大会(京都大会)への協力/参加

２　事業計画

（１）**総会・歓迎会**　5 /6(土)　県立のじぎく会館

（２）**帰国報告会**　6/24(土)　JICA 関西

（３）**多文化共生・国際教育セミナー**（派遣志望者研修会）

第１回　5/ 6(土)　『海外子女教育の概論』　(場所:県立のじぎく会館)
第２回　6/24(土)　【帰国報告会】　(場所:JICA 関西)
第３回 10/28(土)　【近畿ブロック大会】　(場所:京都市)
第４回 12/16(土)　『在外教育施設での多文化共生について』　(場所:宝塚市立教育総合センター)
第５回　2/24(土)　『保護者の目・派遣 OB を交えて』(場所:県立のじぎく会館)

その他、各地区の研修会

（４）**派遣教員激励会**

（５）**各地区研修会・実践交流会**…各地区の特色を生かして　「国際理解教育研修会」

（６）**帰国教員の名簿管理、及び兵海研会員名簿の作成**

会費納入者名簿を作成して会費納入の呼びかけを行う。
会費納入者、研修参加者を中心に情報提供を行う。

（７）**広報・編集**

①ホームページの更新、充実　(アドレス http://hyokai.sakura.ne.jp/htdocs/　)
②海外から実践報告、兵海研諸活動は、今後ＨＰ上で（またはデジタル化）発信

（８）**全海研近畿ブロックとの連携**

（９）**全海研本部との連携**　全国大会（長野県：長野市生涯学習センター）　8/3(木)～6(日)

(10) **その他の活動**

・兵海研組織、諸活動の活性化と組織の引き継ぎ、再編成
・派遣教員への情報提供と教材支援
・在外教育施設教育事情視察

(11) **関係諸団体との連携**

・兵庫県教育委員会（子ども多文化共生センター、芦屋国際中等教育学校）
・各市町教育委員会　・兵庫県教職員組合（兵庫教育文化研究所）
・兵庫県国際交流協会、JICA 関西　・（財）海外子女教育財団関西分室
・帰国子女教育を考える会　・帰国子女親の会「かけはし」　・兵庫 OV 教員研究会

平成２９年度　多文化共生・国際教育セミナー計画

下記の表のように５回の研修会を計画しております。

	日時・場所	主な研修内容（講師：敬称略）
第１回	５ 月 ６ 日（土） １０：００～１２：００ 県立のじぎく会館 (神戸市中央区山本通 4-22-15)	「海外子女教育の概論と派遣希望者説明会」 講師： 足立　浩
第２回	６ 月２４日（土） １０：００～１７：００ ＪＩＣＡ関西 （神戸市中央区脇浜海岸通１－５－２）	帰国報告会 ２０１６年度末 帰国教員による活動報告 青年海外協力隊員による活動報告　他
第３回	１０月２８日(土) １４：００～１６：００ 京都市呉竹文化センター ２Ｆ 第３会議室	第２８回近畿ブロック国際理解教育研究会 京都大会 国際理解教育　現地理解教育　多文化共生教育
第４回	１２月１６日（土） １３：００～１６：００ 宝塚教育センター(予定)	内容:在外教育施設での多文化共生について(予定)
第５回	２ 月２４日（土） １０：００～１２：００ 県立のじぎく会館(予定)	「保護者の目・派遣 OB を交えて」 講師：派遣教員配偶者 「世界地域（エリア）別情報交換会」 ～同エリアの派遣教員ＯＢを交えて～ 講師：兵海研会員（元在外教育施設派遣教員）

上記の予定の変更点は、下記ホームページにてお知らせします。

ホームページアドレス　http://hyokai.sakura.ne.jp/htdocs/

【 お問い合わせ先 】
兵海研事務局　原田　英聖　Email： hide-ha@tb3.so-net.ne.jp

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会会則

■第一章■

第一条　本会は兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会（略称；兵海研）と称する

■第二章　目的および事業■

第二条　本会は国際的視野にたった海外子女教育および国際理解教育の充実発展に寄与することを目的とする

第三条　本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う

1. 海外子女教育・国際理解教育に関する研究の推進
2. 海外子女教育・国際理解教育に関する研究会、交流会の開催
3. 海外子女教育に関する教育相談の実施
4. 会員相互の情報交換を行うための会報の発行
5. 在外教育施設に派遣中の教師に対する情報交換や援助
6. 全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会との連携に基づく活動
7. その他　本会の目的を達成するために必要な事業

■第三章　会　員

第四条　本会の会員は在外教育施設に派遣された者および本会の趣旨に賛同する者で年会費を納入した者で構成する派遣時に年会費を納入した者は、3年間準会員とし、本会からの連絡等を受けることができるものとする

■第四章　役　員

第五条　本会には次の役員をおく

1. 会　長　1　人
2. 副会長　若　干
3. 事務局長　1　人
4. 事務局次長　若　干
5. 会計部長　1　人
6. 専門部長　若　干
7. 地区幹事　若　干
8. 監　　事　2　人
9. 顧　　問

第六条　役員は総会において選ばれる

第七条　会長は本会を代表し会務を総括する
副会長は会長を補佐し、会長に事故ある時はその任を代行する
事務局長は本会に関する事務を行う
事務局次長は事務局長を補佐する
会計部長は本会の事務関係の事務を行う
専門部長は各専門部の活動を推進する
地区幹事は地区の会員をまとめ、地区の活動を推進する
監事は本会の会計を監査する
顧問は必要に応じて置くことができる

第八条　役員の任期は1年とする　但し再任は妨げない
補欠により選任された役員の任期は前任者の在任期間とする

第九条　本会は事務局を事務局長の勤務場所に置く

■第五章 機　関

第十条　本会に次の機関をおき会長がこれを召集する

1. 総　　会
2. 役 員 会

第十一条　総会は毎年1回召集する　但し必要に応じ臨時に召集することができる
役員会は必要に応じこれを召集する

第十二条 総会は次の事項を審議する

1. 事業計画
2. 予算および決算
3. 会則の変更
4. その他　必要事項

※緊急かつやむを得ない事情により総会を開くことができないときは役員会の決議をもってこれにかえることができる。この場合は該当事項について次回の決議をもってこれにかえることができる。この場合は該当事項について次回の総会で承認を受けなければならない。

第十三条　役員会は次の事項を審議する

1. 総会での審議を要しない事項で本会の運営に関する事項
2. 総会に提案する議案の検討
3. その他　会長が必要と認める事項

■第六章　会　計

第十四条　本会の費用は会費　寄付金　その他の収入をもってこれにあてる

第十五条　本会の会費は年額2000円とする

第十六条　本会の会計年度は、毎年総会に始まり、翌年総会の前日に終わるものとする

（この会則は昭和57年9月1日から施行する）
（この会則は一部修正の上昭和62年6月1日から施行する）
（この会則は一部修正の上平成元年6月1日から施行する）
（この会則は一部修正の上平成3年6月2日から施行する）
（この会則は一部修正の上平成8年5月25日から施行する）
（この会則は一部修正の上平成9年5月24日から施行する）
（この会則は一部修正の上平成 11 年5月8日から施行する）
（この会則は一部修正の上平成 15 年5月10日から施行する）
（この会則は一部修正の上平成 24 年5月6日から施行する）

海外子女教育・国際理解教育に関心のある皆様へ

兵海研事務局

兵海研(兵庫県海外子女教育･国際理解教育研究会)入会のご案内

我々兵海研は，兵庫県内の小中学校教員が中心となって組織している研究団体です。県内の国際理解教育や帰国子女教育･多文化共生教育，また，派遣教員による海外子女教育の充実・発展をめざして精力的に活動しています。ぜひ兵海研に入会し，ご一緒に学び合いませんか。

【　会員特典　】

○　兵海研が主催する各種セミナーに，無料でご参加いただけます。
○　兵海研からの情報（セミナー案内，派遣先行関連等）を提供いたします。
○　兵海研の海外子女教育，国際理解教育に関わるネットワークにご参加いただけます。

【　主な活動　】

□　在外派遣帰国教員による帰国報告会（海外教育事情等）
□　国際教育セミナー（在外教育施設派遣希望者研修会）
□　文部科学省内定者研修（東京）での兵庫連絡会
□　国際理解教育近畿ブロック研究大会
□　在外教育施設派遣教員への支援活動
□　県内各地域での国際理解教育･多文化共生教育実践交流
□　派遣教員激励会，帰国教員歓迎会の企画
□　HP による活動報告や国際理解教育関連の情報提供　　等

【　会　　費　】

年会費２，０００円　（会場費や資料代に使います）

※　ネットワークや案内情報に活用しますので，下記『兵海研入会申込書』と共に納入してください。

【　連 絡 先　】

事務局　中井　治嗣（ナカイ　ハルツグ）
E-mail:　hyo1982kai@gmail.com
川西市立川西養護学校（〒666－0143　兵庫県川西市清和台西 2－3－81）
TEL 072－799-3418　/　FAX　072-799-5413

キ リ ト リ

兵海研入会申込書

平成　　年　　月　　日

お名前		現所属	
海外との関係		E-mail	

※ 海外との関係（例：H24～カラチ日本人学校 or 日本人学校に興味あり）